

二月十二日 大東社補助金三月分繰上ケ渡シ青木貞三受取書アリ

二月十八日 獨逸協會學校補助金十九年一月二月兩月分青木貞三へ渡ス受取書アリ

二月二十日 岩倉贈太政大臣行狀取調諸費一月中不足ノ分山本復一へ渡ス受取書アリ

同 日 同上二月分山本復一へ渡ス受取書アリ

金五十圓 城多董渡シ二月分受取書アリ

同 日 馬場文英渡シ二月分受取書アリ

金二十圓 獨逸協會學校補助金三月分青木貞三へ渡ス受取書アリ

三月廿二日 三月二十六日

金九百五十圓 日報社補助金三月分條野傳平へ渡ス受取書アリ

三月廿二日 岩倉贈太政大臣行狀取調諸費三月分山本復一へ渡ス受取書アリ

金四十七圓四十九錢八厘 同 日 城多董渡シ三月分受取書アリ

同 日 金二十圓 馬場文英渡シ三月分受取書アリ

同 日 小以 金六萬五千三百六十圓九十錢五厘

金八千二百八十七圓九十二錢六厘 舊太政官ニ屬スル殘金ニ付會計局ヨリ大藏省へ還納ス

金一萬千四百五圓九十錢 十九年六月八日小牧昌業外二名へ會計局ニ於テ渡方取計ノ分

合計 金八萬五千五十四圓七十五錢一厘

引繼元高ト差引殘リ

金二萬七千八十九圓三十七錢七厘 十九年六月廿二日別途預ケ金トス

三井銀行へ別途預ケ金

一、金二千九百八十八圓三十二錢八厘 前年度ヨリ預ケ越高

一、金二萬七千八百九圓三十七錢七厘
 一、金六十八圓六十七錢五厘
 合計 金三萬百四十六圓二十錢

十八年度殘金
 十九年六月廿三日預ケ高
 前年度ヨリ預ケ掛金ノ利息十九年一月ヨリ五月迄五ヶ月分但元金
 ノ内四百圓ハ十九年三月ヨリ預ケニ付四、五兩月分ノ利息タリ年
 六分ノ利

但十九年六月改メ預ケ高ナリ

一、金四百五十二圓十九錢六厘

預ケ金三萬百四十六圓四十錢ニ對スル十九年七月ヨリ十二月マデ
 ノ利息二十年一月十日受取直ニ元金ニ差加預ケ置年三分ノ利

元利合計

金三萬〇五百九十八圓五十九錢六厘

十九年度機密金勘定書

一、金十萬圓

十九年度元金

一、金三千圓

前年度十八年十一月廿一日田中榮秀渡ノ分十九年四月十九日外務
 省ヨリ返金

合金十萬三千圓

内

四月七日

金六百圓

大東社補助金四月分青木貞三へ渡ス受取書アリ

同日

金一圓八十錢

右大坂へ爲換手数料受取書アリ

四月二十一日

金五十圓

三井銀行預ケ金一萬圓ノ手数料受取書アリ

四月二十一日

金十三圓九十五錢

三井銀行臨時預ケ金二千七百九十圓ノ手数料受取書アリ

四月二十七日

金九百五十圓

日報社補助金四月分條野傳平へ渡ス受取書アリ

四月一日

金二百十圓

渡邊昇渡シ三月分受取書アリ

四月十七日

金二百十圓

渡邊昇渡シ四月分受取書アリ

四月二十日

金四圓八十三錢八厘

岩倉贈太政大臣行狀取調諸費三月分不足金山本復一へ渡ス受取書
 アリ

同日

金五十圓

同上四月分山本復一へ渡ス受取書アリ

内閣機密金勘定書

同 日 金二十圓
 同 日 金二十圓
 五月八日 金二百圓
 同 日 金六百圓
 同 日 金一圓八十錢
 五月二十四日 金九百五十圓
 五月四日 金二百圓
 五月二十日 金三十錢
 同 日

城多董四月分受取書アリ

馬場文英渡四月分受取書アリ

大東社補助金五月分青木貞三渡シ受取書アリ

同上爲換手數料受取書アリ

日報社補助金五月分
條野傳平へ渡ス受取書アリ

渡邊昇渡シ五月分受取書アリ

岩倉贈太政大臣行狀取調諸費四月分不足金山本復一へ渡ス受取書アリ

三條内大臣履歴取調諸費五月分山本復一へ渡ス受取書アリ

城多董渡シ五月分受取書アリ

馬場文英渡五月分受取書アリ

大東社補助金六月分青山大太郎へ渡ス受取書アリ

四月十七日ホアソナード俸給千二百五十圓一時立替渡ノ處返金ニ
付三井銀行へ預ケ入手數料受取書アリ

日報社補助金六月分條野傳平へ渡ス受取書アリ

内大臣履歴取調諸費五月中ノ不足金山本復一へ渡ス受取書アリ

同上六月分山本復一へ渡ス受取書アリ

金五十圓
 同 日 金二十圓
 同 日 金二十圓
 六月十六日 金六百圓
 六月十六日 金六圓二十五錢
 六月二十四日 金九百五十圓
 六月二十一日 金一圓六十九錢八厘
 同 日 金五十圓

同日

金二十圓

城多董渡六月分受取書アリ

同日

金二十圓

馬場文英渡ス六月分受取書アリ

六月二十二日

金二百十圓

渡邊昇渡シ六月分受取書アリ

七月五日

金六百圓

大東社補助金七月分高橋健三へ渡ス受取書アリ

七月二十四日

金九百五十圓

日報社補助金七月分條野傳平へ渡ス受取書アリ

七月六日

金二百十圓

渡邊昇渡七月分受取書アリ

七月二十日

金五十圓

内大臣履歴取調諸費七月分山本復一へ渡ス受取書アリ

同日

金二十圓

馬場文英渡七月分受取書アリ

同日

金二十圓

城多董渡七月分受取書アリ

七月二十四日

金二百十圓

渡邊昇渡八月分繰上ケ渡受取書アリ

八月四日

金六百圓

大東社補助金八月分高橋健三へ渡ス受取書アリ

八月二十四日

金九百五十圓

日報社補助金八月分條野傳平へ渡ス受取書アリ

八月二十日

金五十圓

内大臣履歴取調諸費八月分山本復一へ渡ス受取書アリ

同日

金二十圓

城多董渡八月分受取書アリ

同日

金二十圓

馬場文英渡八月分受取書アリ

九月十三日

金六百圓

大東社補助金九月分高橋健三へ渡ス受取書アリ

九月二十四日

金九百五十圓

日報社補助金九月分條野傳平へ渡ス受取書アリ

九月二十四日

金二百十圓

渡邊昇ノ九月分受取書アリ

九月十三日

金二千四百五十四圓六十一錢七厘

清國政府へ寄贈ノ野砲一門附屬品共新製代並陸軍省へ渡ス受取書アリ

九月二十一日

金三十九圓八十八錢二厘

内大臣履歴取調諸費九月分山本復へ渡ス受取書アリ

同日

金二十圓

城多董渡九月分受取書アリ

同日

金二十圓

馬場文英渡九月分受取書アリ

十月二日

金六百圓

大東社補助金十月分高橋健三へ渡ス受取書アリ

十月二十六日

金九百五十圓

日報社補助金十月分條野傳平へ渡ス受取書アリ

十月九日

金二百十圓

渡邊昇渡十月分受取書アリ

十月二十五日

金四十八圓三十三錢九厘

内大臣履歴取調諸費十月分山本復一へ渡ス受取書アリ

同日

金二十圓

城多董渡十月分受取書アリ

同日

金二十圓

馬場文英渡十月分受取書アリ

十一月十七日

金三千圓

大東社特別補助トシテ一時限リ下附金高橋健三へ渡ス受取書アリ

十一月二十六日

金九百五十圓

日報社補助金十一月分條野傳平へ渡ス受取書アリ

十一月八日

金五十圓

渡邊昇渡毎月二百十圓ツツノ處本月分ヨリ百六十圓減シ本行ノ
通リ相渡ス受取書アリ

十一月十五日

金五十圓

内大臣履歴取調諸費十一月分山本復一へ渡ス受取書アリ

同日

金五十圓

同上臨時費山本復一へ渡ス受取書アリ

同日

金二錢二厘

同上十月分不足金同人渡ス受取書アリ

十一月十七日

金五十圓

渡邊昇渡十二月分繰上ケ受取書アリ

十一月二十日

金二十圓

城多董渡十一月分受取書アリ

同日

金二十圓

馬場文英渡十一月分受取書アリ

十二月八日

金七十五圓

三井銀行へ預金一萬五千圓ノ手数料受取書アリ

十二月二十四日

金九百五十圓

日報社補助金十二月分條野傳平へ渡ス受取書アリ

同日

金二千八百五十圓

日報社補助金二十年一月二月三月分繰上ケ渡條野傳平へ渡ス受取
書アリ

十二月二十五日

金五十圓

内大臣履歴取調諸費十二月分山本復一へ渡ス受取書アリ

同日

金二十圓

城多董渡十二月分受取書アリ

同日

金二十圓

馬場文英渡十二月分受取書アリ

二十年一月十九日

金三千圓

在倫敦黒田清隆渡ノ分外務省へ送達方依テ同省ヨリノ受取
書アリ

同日

金十七圓六十八錢

同上電信爲換手数料外務省受取書アリ

一月二十日

金五十圓

同日

内大臣履歴取調諸費二十年一月分山本復一へ渡ス受取書アリ

金一圓三十五錢

同日

同上十九年十一月分不足金山本復一へ渡ス受取書アリ

金九圓十二錢六厘

同日

同上十九年十二月分不足金同人へ渡ス受取書アリ

金二十圓

同日

城多董渡シ一月分受取書アリ

金二十圓

二月二十一日

馬場文英渡一月分受取書アリ

金四十七圓三十三錢七厘

同日

内大臣履歴取調諸費二月分山本復一へ渡ス受取書アリ

金二十圓

同日

城多董渡二月分受取書アリ

金二十圓

三月十六日

馬場文英渡二月分受取書アリ

金百二十五圓

三月十九日

三井銀行へ預ケ金二萬五千圓ノ手数料受取書アリ

金四千圓

同日

在倫敦黒田清隆渡ノ分外務省へ送達方依托ス依テ同省ヨリ受取書アリ

金十七圓六十八錢

三月十六日

同上電信爲替手数料受取書アリ

金百五十圓

三月十九日

渡邊昇渡シ二十年一月二月三月分取束ネ渡ス受取書アリ

金四十六圓五十五錢五厘

同日

内大臣履歴取調諸費三月分山本復一へ渡ス受取書アリ

金二十圓

同日

城多董渡三月分受取書アリ

金二十圓

内閣機密金勘定書

馬場文英渡三月分受取書アリ

同日

金十六圓四十一錢

合計

金三萬四千三百二十九圓六十七錢四厘

金二萬圓

內務省ニ送付金會計局ニ於テ取扱濟

右支出總計

金五萬四千四百三十九圓六十七錢四厘

元金ト差引殘リ

金五萬五千五百六十圓三十二錢六厘

內

金二萬四千四百八十五圓三十二錢六厘

三井銀行ヘ定例預ケ金殘額

金三萬七十五圓

三月十六日同行ヘ別途預ケ金

三井銀行ヘ定例預ケ金

一、金二萬四千四百八十五圓三十二錢六厘

十九年度預ケ金殘額

此抵當

起業公債證書二萬三千五百五十圓

此實價金二萬十七圓五十錢

百圓ニ付キ八十五圓ノ割

三井銀行ヘ別途預ケ金

一、金三萬五百九十八圓五十九錢六厘

十七年一月已來十九年十二月ニ至ル別途預ケ金元利合計

一、金三萬七十五圓

十九年度殘金ニテ二十年三月十六日ニ別途預ケ金トス

合計

金六萬六百七十三圓五十九錢六厘

此抵當

海軍公債證書六萬七千四百圓

此實價金六萬六百六十圓

百圓ニ付金九十圓ノ割

明治二十年四月六日

內閣書記官長 田中光顯
內閣書記官 金井之恭

内閣書記官 谷 森 眞 男

二十年度機密金勘定書

一、金十萬圓

二十年度定額元金

支出

一、金一萬千四百圓

右ハ日報社補助金一ヶ月金九百五十圓ツケ十二ヶ月分

一、金五百四十八圓二十八錢

右内大臣履歴取調諸費十二ヶ月分

一、金二百四十圓

右ハ同上取調ニ付城多重手當金一ヶ月二十圓ツツ十二ヶ月分

一、金二百四十圓

右ハ同上取調ニ付馬場文英手當金一ヶ月二十圓ツツ十二ヶ月分

一、金百圓

機密金勘定書

右ハ岩永兵二手當金一ヶ月五十圓ツツ二十年四五兩月分

一、金百二十圓

右ハ市川文吉手當金一ヶ月四十圓ツツ二十年五六七ノ三ヶ月分

一、金四千圓

右ハ黒田内閣顧問洋行費補足

一、金二十八圓二十三錢

右ハ前同人ヨリ土耳其格皇帝へ贈呈ノ村田銃及實丸共二箱ニ係ル運送費

一、金五千圓

右二十年十月八日外務省機密金ノ内ニ分賦

一、金百十六圓六十九錢七厘

右ハ總理大臣沖繩外三縣へ出張ノ節護衛警部巡查へ取替金、但追テ返納可相成分

一、金百四十六圓

右ハ三井銀行へ預ケ金五回分ノ手數料

一、金二萬圓

右ハ内務省機密金ノ内へ分賦

一、金四萬二百九十七圓七十七錢

右ハ海江田元老院議官渡邊検査院長一行ノ洋行費

一、金五百五十六圓二十四錢五厘

右ハ渡邊検査院長洋行ニ付外國人へ贈品代

合計 金八萬二千七百九十三圓二十二錢二厘

定額元金ト差引

殘金一萬七千二百六圓七十七錢八厘

右之通

明治二十一年三月三十日

内閣書記官長 子爵 田中 光顯

内閣書記官 巖谷 修

同 谷森 眞男

內閣屬 手塚光榮
同 奧宮國治

第四回機密金報告書

收入部

金十九圓
金六萬五千八百圓
金二千圓

前回ヨリ越元現在
內藏寮ヨリ受繼
法典取調委員報酬繰替分戻入

通計金六萬七千八百十九圓

仕拂部

金五百圓
金二百圓
金二百圓
金四萬千七百圓

朝野新聞社渡 (三月分)
東京通信社渡 (四_下月_上半_分分)
中央電報社渡 (四月分)
整理公債證書額面四萬圓代但百四圓
二十五歳ノ割

金一萬四百二十五圓
金二十五錢

同上額面一萬圓代金同上ノ割
銀行小切手五十枚ノ印稅

通計金五萬三千二十五圓二十五錢

差引殘金一萬四千七百九十三圓七十五錢第一國立銀行當座預ケ高

右收支計算相違無之仍テ及御報告候也

明治二十六年四月八日

內閣書記官長 伊東 巳代治

內閣總理大臣伯爵 伊藤 博文殿

改第五回機密金報告書

受入ノ部

一、金三萬四千五十八圓八十五錢二厘

越元（銀行預ケ）

一、金二千二百五十九圓四十二錢一厘

同上（常備現金）

計金三萬五千九百十八圓廿七錢三厘

支出ノ部

一、金四百九十九圓九十九錢九厘

ルートル社トラフオルト渡三月分

一、金千圓

警保局渡（第一期分）

一、金八百圓

同上（廣島縣分）

一、金六百圓

同上（宮城縣分）

一、金二千圓

同上 臨時補助

一、金二千圓

板垣伯渡

- 一、金千圓
- 一、金五百圓
- 一、金二百圓
- 一、金五十圓
- 一、金六十圓
- 一、金四十圓
- 一、金九十七圓五錢五厘
- 一、金百五十圓
- 一、金千二百九十圓
- 一、金千圓
- 一、金三百圓
- 一、金四百九十九圓九十九錢九厘
- 一、金三百圓
- 一、金三千圓
- 一、金千圓

常備引出

- 日報社渡 (四月分)
- 東通社渡 (六月下半年)
- 日通社渡 (六月分)
- 佐藤渡 (四月分)
- 稻田渡 (四月分)
- 大臣警衛巡查車馬賃賄料三月三十一日迄ノ分
- 假裝巡查手當
- 東京新聞補助 (三月分) 山田東次渡
- 自由黨遊說費ノ内山田東次渡
- 爆發物一件探偵費園田總監渡
- ルートル社トラフォルド渡 (四月分)
- 川村惇渡
- 園田總監渡機密費 (四、五、六月分)
- 東京新聞社渡 (四、五月分)

- 一、金五百圓
- 一、金二百
- 一、金五十圓
- 一、金四十圓
- 一、金二百圓
- 一、金五百圓
- 一、金四十一圓六十錢
- 一、金三千圓

計金一萬九千八百七十八圓六十五錢三厘

殘金一萬六千三十九圓六十二錢

- 内 金一萬五千七百二圓二十一錢九厘
- 金二百十六圓六十三錢五厘
- 金百二十圓七十六錢六厘
- 外ニ整理公債證書五萬圓

第一銀行預ケ

安田銀行預ケ

常備現金

宮内省預ケ

日報社渡 (五月分)

東通社渡 (七月下半年八月上旬)

日通社渡 (七月分)

稻田渡 (五月分)

高島大臣渡探偵費

自由黨遊說費ノ内山田東次渡

故伊藤正四位葬儀當日大臣警衛巡查賄料

首相渡臺ニ付假渡

右收支決算相違無之仍テ此ニ及御報告候也

明治廿九年六月三日

內閣書記官長男爵 伊東巳代治

內閣總理大臣侯爵 伊藤博文殿

歲計剩餘金及公債募集金使用意見

- 第一節 總論
- 第二節 各事業
 - 第一 府縣興業
 - 第二 興業銀行
 - 第三 官設鐵道
 - 第四 電信
 - 第五 米國直航海保護船
 - 第六 砲臺
 - 第七 兵器彈藥
 - 第八 軍艦
- 第三節 各事業費年割、公債募集并ニ償還方案
 - 歲計剩餘金及公債募集金使用意見

第一 各事業費年割

第二 公債募集并ニ償還方法

第四節 結論

第一節

試ニ本邦幅員ノ廣狹人口ノ多寡ヲ以テ西洋諸強國ニ比較スルニ多クハ伯仲ノ間ニ居リ、且ツ土壤ノ豊腴ナル人民進取ノ氣象アル亦彼ニ一步ヲ讓ラズ。然ルニ何ゾヤ、則チ貧富甚ダ相縣隔スルニ因ルノミ。彼ハ國富ムガ故ニ、兵強キガ故ニ、國權伸ブ。我ハ國貧シキガ故ニ兵弱シ。兵弱キガ故ニ國權縮ム。今我カ幅員人口ヲ以テ我ガ豊腴ノ土壤進取ノ氣象ヲ以テ大ニ國ヲ富マシ兵ヲ強クセバ、條約ヲ改正シ國權ヲ擴張スルノ何ノ難キコトカ之レカラン。故ニ今日本邦ノ急務ハ富ヲ進ムルヨリ先ナルハナシ。

論者則チ云ハン富ヲ進メテ兵ヲ強クシ國權ヲ張ル誰カ之ヲ欲セザルモノアラシ。惟フニ今日ノ民力ト國力トニ於テ之ヲ許サザルヲ如何セント、尋常ノ方法ニ依リ其途ヲ求ムルトキハ寔トニ論者ノ言ノ如シト雖トモ、苟クモ非常ノ事業ヲ爲サント欲セバ非常ノ英斷ナカルベカラズ。夫レ第一期國會ニ於テ豫算歲出ヲ削減シ、而シテ衆議院地租五厘減額ノ決議アリシガ、試ニ其

減額ニ相當スル金六百八十一萬六千六百二十三圓ヲ全國ニ配當スレバ、平均一反歩ニ付田租二十錢一厘畑租五錢六厘ナリ。之ヲ農家ノ戸數五百五十一萬八千四十戸ニ平均スレバ田租一圓四厘畑租ニ二十三錢二厘合計一圓二十三錢六厘ヲ減ズルニ過ギズ（北海道沖繩縣ヲ除ク）減租固ヨリ美舉ナリ、多少ノ負擔ヲ輕クス亦賀スベシト雖、之ガ爲メ實際民福ヲ進メ得ラルベキヤ否ニ至テハ未ダ容易ニ一條ノ理論ヲ以テ判斷スベカラザルモノアリ。想フニ第二期ノ國會ニ於テモ又減租論ノ出ヅルヤ必セリ。然レドモ其兩院ヲ通過スルハ固ヨリ期スベカラズ。然ルトキハ恐クハ明治二十五年度ニ於テモ亦二十四年度ノ如ク剩餘金ヲ國庫ニ貯置クノ不幸ヲ醸サンコトヲ。若シ予ガ立案ニ依リ非常ノ英斷ヲ爲ストキハ、其農民ヲ利スルヤ遠ク減租ノ上ニ出ヅルヲ以テ己ニ議院ノ願ニ負カザルベク、又兼テ國權ノ擴張足ヲ翹テ竣ツベキヲ以テ政府ノ望ヲ充タスニ足ルベシト信ズルナリ。

英斷トハ何ゾヤ、公債一億萬圓ヲ内國ニ起シ、内ハ百般ノ殖産興業費ニ充テ、外ハ國權伸張費ニ充テ尙ホ該費ノ不足ヲ補フガ爲メ、且減債ノ爲ニ二十五年度以後五十五ヶ年間ハ彼ノ歲計剩餘ノ金五百四十五萬圓（二十四年度歲計剩餘金額ノ内別段ノ財源ニ屬スル直江津柏崎間鐵道建設費ニ係ル額ヲ除キタル高）以下ノ金額ヲ歲計ヨリ削減セント欲スルニ在リ。夫レ我國内外國債ノ總額二億七千八百八十五萬餘圓、一見過度ノ負債タルガ如シト雖、此公債タル殖産興業、財

政整理制度變更軍事擴張等ニ出テ其減債方案モ己ニ確立シタルモノナレバ、深ク憂フルニ足ラザルノミナラズ、苟クモ他ニ民福ヲ養ヒ國力ヲ増スベキモノアリテ、其元利償還ノ方法覈實ナルモノアラバ、更ニ進テ公債ヲ起ス復タ何ノ憚カル所アラシヤ。維新以來百官有司思ヲ焦シ力ヲ盡シ制度文物略々具ハリ外觀ハ美ナリト雖、今ニ於テ農工振ハズ、武備完カラズ民力羸憊外交繁錯而シテ因循日ヲ送り姑息年ヲ重ヌ制度文物亦何ノ益アラン。之ヲ思ヒ之ヲ念フ誰カ寒心セザルモノアラシヤ。今茲ニ一日モ速カニ起サザルベカラザルノ事業ヲ左ニ列記スベシ。

- 第一 府縣興業
- 第二 興業録行
- 第三 官設鐵道
- 第四 電信
- 第五 米國直航海保護船
- 第六 砲臺
- 第七 兵器彈藥
- 第八 軍艦

是等ノ事業ニシテ其財源ヲ得ザルカ爲或ハ自然ノ發達ニ任セ或ハ成功ヲ百年ノ後ニ望ム吾恐ク

ハ其未ダ發達セザルニ民力ハ早ク己ニ疲弊シ、其未ダ成功セザルニ外難クバ早ク己ニ不測ニ起ルノ虞アラシコトヲ。請フ第二節ニ於テ各事業ノ必要ヲ説カン。

第二節 各事業

第一 府縣興業 一千萬圓

(明治二十五年ヨリ十五ケ年間ニ支出)

各府縣ノ興業タル米作米質ノ改良ヲ始メ府縣特有物産改良灌溉排水、水産改良發達ノ類枚舉ニ違アラズト雖、假ニ米作改良ノ一事ニ就イテ之ヲ言フニ、舊習慣ニ仍ルトキハ一反歩平均一石二斗一升^{廿二年調}ヲ得ルニ過ギズ、今良教師ヲ雇ヒ撰種苗代等ノ法ヲ講ジ其改良ヲ求ムルトキハ少クトモ一反歩平均五年ヲ増シ、一石七斗一升ヲ得ル難キニ非ズ。是レ學者ガ學理ニ照シ老農輩ガ實驗ニ徴シ固ク誓テ證明スル所ナリ。加之己ニ某某縣ニ在テ實施成績アルノ事ニシテ決シテ架空ノ論ニ非ズ。世人亦往々之ヲ知レリ。而シテ一般ニ之ヲ實行スルコト能ハザルモノハ想フニ改良期ノ未ダ熟セザルト、費用ノ出所ナキニ苦ムニ外ナラザルベシ。今地方經濟ニ對シ國庫金ヲ以テ補助(各地方ニ補助金配當ノ率ハ民有地反別ニ對シ一反歩ニ付四錢六厘一三四五八租額ニ對シ十圓ニ付一圓三十二錢四九三。人口ニ對シ一人ニ付二錢五厘四一一三、面積ニ對シ

歲計剩餘金及公債募集金使用意見

一方里ニ付八十圓二十一錢八厘一九三ノ割合トスヲ爲シ、政府一タビ之ヲ獎勵セバ誰カ其實行ヲ躊躇スルモノアラシヤ。

夫レ一反歩ニ付平均五年ノ增收ヲ得ルトキハ、全國田反別二百七十五萬二千七十餘町歩ニ對シ千三百七十六萬〇三百五十石餘ノ增收ヲ得、假ニ之ヲ一石五圓ノ價格トスルモ六千八百八十八萬餘圓ヲ得ベシ。是レ減租ノ爲六百八十一萬餘圓ヲ得ルニ比スレバ殆ンド十倍以上ノ利得アルニ非ズヤ。吾ハ十倍ノ利ヲ欲セズシテ吾ハ唯減租ヲ欲スルモノナリト言ハバ亦之ヲ奈何トモスル能ハザレドモ、天下恐ラクハ此理ナカルベキナリ。其他地方ノ實益アルモノヲ撰ビ、其議會ノ決議ヲ以テ該金ヲ支用セバ是モ亦得ル所ノ利益必ラズ巨大ナラン。夫レ府縣ノ富ハ則チ全國ノ富ナリ、苟クモ國ノ富ヲ増進セント欲セバ府縣ノ富ヲ謀ラザルベカラズ。是レ予ガ府縣興業ノ爲本行ノ金額ヲ支出セント欲スル所以ナリ。而シテ其補助金額配當ハ甲號表ノ如シ。

第二 興業銀行 五百萬圓

明治二十五年ヨリ五ヶ年間ニ支出

夫レ已ニ府縣ノ經濟ニ與フルニ一千萬圓ヲ以テス、其地方ヲ潤フス不少ト雖、澤ノ及ブ所未ダ甚ダ大ナラズ、熟々我が國ノ現狀ヲ察スルニ農工業ノ起サザルベカラサルモノ甚ダ多ク、其

已ニ起リタルモノニシテ成功ヲ期シ改良ヲ要スルモノ亦甚ダ多ク、其他公共土木工事ノ着手セザルベカラザルモノ亦甚ダ多シ。而シテ實業家及公共組合等ニ於テモ之ヲ熱望スル固ヨリ切ニ其經營畫策スル所以亦必シモ當ヲ得ザルニ非ズ。然ルニ其業ヤ起ラズ、其功ヤ成ラズ、其改良ヤ徒ニ之ヲ口ニスルノミニ止マルモノ何ゾヤ。實業家ト云ヒ公共組合ト云ヒ概ネ皆充分ノ資力ヲ有セズ、若シ他ニ資本ヲ求ムレバ其利ハ高ク其返期ハ短シ、高利短期已ニ如此故ニ舉グベキノ利アルモ、之ヲ舉グルコト能ハズ、除クベキノ害アルモ之ヲ除クコト能ハズ、其レ實業家公共組合等ガ算ヲ擲チ、天ヲ仰テ慨歎スル所以ナリ。是ニ於テ乎興業銀行並ニ農業銀行ヲ創立シ農工ヲ獎勵シ及土木工事ノ利益ヲ謀ラザルベカラズ。今興業銀行ノ資本ヲ一千万圓ハ廣ク之ヲ人民ニ募集シ、五百萬圓ハ政府ノ負擔トシ、無利息之ニ加入シ、至當ノ方法ヲ設ケ其利ヲ低フシ、其期ヲ長クシ事業ノ確實ナルモノニ之ヲ貸付スルトキハ、農工之ガ爲ニ振ヒ土木工事之ガ爲ニ起ル。期シテ待ツベシ。而シテ募集ニ應ズル所ノ株主モ其資本ノ三分一ハ無利息ナルニ因リ、總株ニ對シ四六ノ利アルモ一般株主ハ即チ六六ノ利ヲ收ムベシ。資本案ノ爭テ募集ニ應ズル亦信ジテ疑ハザル所ナリ。是レ予ガ興業銀行ノ爲本行ノ金額ヲ支出セント欲スル所以ナリ。然ルニ兩銀行タル其利多キモ其害亦隨テ生ジ易キガ故ニ、該條例案ヲ起スニ當リ、之ヲ商業會議所ニ諮問シ廣ク公議ヲ採リ丁寧反覆希クハ遺策ナカラシコトヲ。

第三 官設鐵道 四千七百六十四萬四千圓

明治二十五年ヨリ十五年間ニ支出

鐵道ハ富強ノ要具文明ノ利器タルハ此ニ論說スルヲ要セズ。而シテ官設民設ノ得失ニ就テハ世論嗷々タリト雖、今私設鐵道會社ノ實況ヲ觀ルニ前途成功ノ困難ヲ告グルモノ少シトセズ。此時ニ當テ政府自ラ進デ其任ニ膺ル當ニ妨ダナキノミナラズ、全國ヲ貫通スル幹線ノ如キ利益甚ダ少クシテ資金甚ダ多ク、人民ノ容易ニ企テ及ブベカラザルモノアルニ於テオヤ。今ヤ日本鐵道會社ノ線路ハ其東端ナル青森ニ達シ、山陽鐵道會社ノ線路モ其西端ナル赤間關ニ達スル日亦遠キニ非ラザラントス。此ニ於テ幹線ヲ東青森ヨリ起シ、秋田、新庄、米澤、新津、直江津、富山、金澤、敦賀、宮津、米子、濱田ヲ經テ西小月即チ山陽鐵道ニ聯絡セシメ、東西匝周以テ運輸ノ便ヲ開キ興業ノ利ヲ謀ラントス。是レ予ガ官設鐵道ノ爲メ本行ノ金額ヲ支出セント欲スル所以ナリ。但シ各支線ノ如キ又四國線路ノ如キハ他日財政之ヲ許スノ時ヲ俟ツモ亦遲キニ非ザルナリ。

第四 電信 六十九萬圓

明治二十五年ヨリ三ヶ年間ニ支出

電信ハ國防ノ爲メ、國家經濟ノ爲メニハ縱令收支相償ハズト雖ドモ、其架設ヲ要スルモノアリ。琉球隱岐及五島ノ如キ是レナリ。夫レ琉球ハ地積已ニ小ナラズ、商工業モ稍々殷賑ノ望ミアリ。而シテ其地タル支那ト一葦水ヲ隔テ我邦南門ノ鎖鑰タリ。然ルニ一月三回ノ定期船ニ賴リ僅ニ其音問ヲ通ズルハ闕典モ亦甚シト謂フベシ。又隱岐及五島ノ如キ人口物産亦少ナカラズ皆共ニ敷設ノ必要ヲ感ズ、是レ予ガ電信架設ノ爲メ本行ノ金額ヲ支出セント欲スル所以ナリ。

第五 米國直航海保護船

四百八十九萬八千四百五十圓

明治二十五年ヨリ十ヶ年間ニ支出

通商貿易ノ急務ナル今日ニ當リ、本邦船ヲ以テ海外ニ直航スルモノ僅ニ雲樹相望ムノ上海ニ止マリ、他ハ皆外國船ニ依賴シ坐シテ其利ヲ占メラル、豈歎スベキノ至ナラズヤ。然レドモ無經驗ノ航路ヲ開キ其業ヲ營マントス。收支始メヨリ相償ヒ難キヲ以テ、人民ノ奮テ其衝ニ當ルモノナキ亦已ムヲ得ザルノ勢ナリトス。故ニ今試ミニ國庫金ヲ以テ商船一隻ヲ造リ、之ニ船費其他ノ諸費ヲ付シ、之ヲ其會社ニ委托シ、香港布哇ヲ經テ我國ト商業上關係アル米國桑港ニ航路ヲ開キ、他年定期航海ノ業ヲ起ス者ノ楷梯ト爲サントス。而シテ搭載ノ貨物ハ可成其運賃ヲ

廉價ニシ、以テ貿易ノ發達ヲ誘導シ、且ツ農工商業者、農工商學校ノ卒業生、若クハ帝國及地方議會議員ノ如キハ特ニ無賃乗船ヲ許シ、以テ見聞ヲ廣メ知識ヲ長ゼシムルノ便ヲ開カバ、國家ノ利益知ルベキナリ。是レ予ガ米國直航海ノ爲本行ノ金額ヲ支出セント欲スル所以ナリ。而シテ乗客ノ船賃及特許乗客ノ食費貨物ノ賃錢ハ一切之ヲ積立金ト爲シ、以テ修繕其他ノ費用ニ充ツベシ。

第六 砲臺 九百九十二萬千四百十八圓八十五錢

明治二十五年ヨリ十五ケ年間ニ支出

夫レ府縣ニ興業費ヲ與ルノ事ヨリ、外國貿易ノ便ヲ開クノ業ニ至ルマデ、民ヲ利シ國ヲ富マヌノ道路々備ハルノ時ニ於テ、砲臺ヲ築キ海防ヲ嚴ニスルノ策ヲ講ゼザルベカラズ。然ルニ明治二十四年度ノ豫算ヲ觀ルニ東京灣砲臺ハ七百七十八萬零五百八十二圓五十錢九厘ヲ要シ、其竣功ハ明治六十二年ヲ待チ、下ノ關ハ九十八萬六千五百三十六圓三十四錢六厘ヲ要シ、其竣功ハ三十四年ヲ待チ、紀淡海峽ハ、百十五萬四千三百圓ヲ要シ、其竣功ハ三十六年ヲ待ツモノトス。嗚呼平和ノ明日ヲ保タザル天下萬人皆之ヲ知ル。若シ一旦事アリ、外艦突進其下ノ關ヲ過ギ紀淡ヲ超ヘ東京ニ入ル恰モ無人ノ境ヲ行クガ如ケン。是レ帝國ナキナリ、是レ帝都ナキナリ。

其三十四年三十六年ト云フ猶忍ブベカラズ、況ンヤ六十二年ナラザレバ帝都ノ守ヲ成ス能ハズト云フニ至リテハ果シテ何等ノ事ゾヤ。一念此ニ及ブ誰カ戰慄セザルモノアラシヤ。是レ予ガ砲臺建築ノ爲本行ノ金額ヲ支出シ速ニ其功ヲ成サント欲スル所以ナリ。

第七 兵器彈藥

六百九十九萬千百三十一圓二十二錢一厘

明治二十五年ヨリ十五ケ年間ニ支出ス

已ニ砲臺建築ノ設計アリ、之ニ伴フ所ノ兵器彈藥ナカラザルベカラズ。然ルニ兵器彈藥ニ對スル明治二十四年度ノ豫算ヲ觀ルニ、二十五年ヨリ四十二年マデニ其完備ヲ謀レリ。今ヤ本案ニ於テ已ニ砲臺ノ建築ヲ十五ケ年間二期スルヲ以テ、之ニ要スルノ兵器彈藥モ亦同年度間ニ之ヲ完備セザルヲ得ズ。是レ予ガ兵器彈藥ノ爲メ本行ノ金額ヲ支出セント欲スル所以ナリ。

第八 軍艦 四千三百四十三萬圓

明治二十五年ヨリ十五ケ年間ニ支出

本邦四面環ラスニ海ヲ以テス。軍艦ノ整備、尤急務ニ屬セリ。況ンヤ外交繁難ノ今日ニ於テ

オヤ。然ルニ現在ノ軍艦噸數ハ議會ノ協賛ヲ得、起工ノ計畫ニ從事セシ六千七百五十噸ヲ併セ凡五年八千噸ニ過ギズ。而シテ苟モ海軍ノ勢力ヲ保タント欲セバ十二萬噸ノ軍艦ヲ具ヘザルベカラズトハ已ニ海軍大臣ノ明言スル所ニシテ、本邦ノ如キ海國ニ於テハ少クモ是等ノ軍艦無カラザルベカラザルハ勿論ナリトス。然ルニ十二萬噸ノ内五萬八千噸ヲ去リ、六萬二千噸ノ軍艦製造費ハ金四千三百四十三萬圓ヲ要ス。斯ル巨大ノ金額ヲ海軍ノ一部ニ要求スルハ我が國今日ノ財政ニ於テ其望ヲ達スルコト至難ナリト謂ハザルベカラズ。然ラバ則チ財政之ヲ許スノ日ヲ待タン乎、吾其何レノ時ニ在ルヲ知ラズ、嗚呼嚴然一國ヲ建テ獨立ノ體面ヲ保タント欲セバ幾十萬噸ノ軍艦ヲ有シ、進ンデハ攻メ退テハ守ルノ備ヘナカルベカラズ。十二萬噸何ゾ論ズルニ足ランヤ。而シテ是等ノ噸數ヲモ具フル能ハズンバ國豈其レ國ナランヤ。是レ予ガ軍艦製造ノ爲本行ノ金額ヲ支出セント欲スル所以ナリ。其維持費ノ如キハ明治二十五年以後ノ砲臺建築兵器彈藥ノ繼續費ハ本公債中ヨリ支出スルガ爲メ、自然不用ニ屬シ、又既成鐵道ノ收入ハ少クモ五朱前後ノ利益アルベキニ因リ、是等ノ金額ヲ以テ漸次該維持費ニ充テバ餘リアルモ決シテ不足ナキナリ。

第三節 各事業費年割、公債募集並ニ償還方協案

第一 各事業費年割

第二節ニ於テ各事業ノ必要ト其費額トハ已ニ之ヲ説ケリ。而シテ其年割ハ乙號表ノ如シ。

第二 公債募集並償還方案

其一 公債募集

公債一億萬圓各年募集額及歲計剩餘金各年支出額ハ丙號表上欄ノ如シ。而シテ上欄ニ掲グル明治四十年度ヨリ四十五年度マデ朱書ノ金額百八十萬圓ハ該年度間ニ於テ、公債償却ノ財源ニ不足ヲ告グルニ依リ、本計畫鐵道ノ收利ヲ見込之ニ充テタルナリ。之ニ反シ四十六年度ヨリ七十九年度マデハ歲計剩餘金ノ内毎年拾萬圓ヲ遞減スベキガ故ニ、是ハ時世適當ノ事業ニ支用スルコトヲ得ベシ。

夫レ一ケ年ニ六百餘萬圓ノ公債ヲ募ルトキハ市場ニ激變ヲ與フルナキヤ否ヤハ深ク講究セザルベカラザル一大問題ナリトス。然リト雖予ハ決シテ斯ル憂ナキヲ斷定シタルヲ以テ此募集方案ヲ立テタルナリ。

其二 公債償還

論者或ハ云ハン、民福ヲ進メ國權ヲ伸張スルガ爲メ公債ヲ起シ、大ニ其事業ヲ作振スルハ可

ナリト雖トモ、從來已ニ二億以上ノ公債ヲ負ヒ、今又之ニ加フルニ斯ル巨大ノ公債ヲ以テス。果シテ之ヲ償還シ得ルノ道アリヤト。論者ノ懸念良ニ然リ、然レドモ今起ス所ノ公債一億萬圓ハ一ケ年ニ六百七十萬圓ヲ募集シ、十五ケ年目ニ至テ止ム。其利ハ五朱トシ、毎募集ノ年ヨリ拂出シ、元金ハ六ケ年目ヨリ償却シ、遂ニ五十五年ニ至テ元利共ニ償還シ了ルコト丙號表下欄ノ如シ。論者之ヲ熟覽スルトキハ其憂ヲ解クニ足ルモノアラン。

第四節 結 論

夫レ小成ニ安ンズレバ則チ已ム。苟クモ國ノ富强ヲ欲シ、歐米諸邦ト肩ヲ比シ之ト先ヲ爭ハント欲セバ非常凡ヲ出ヅルノ英斷ナカラザルベカラズ、今本邦ヲ以テ彼諸邦ニ比スルニ國ノ貧富果シテ如何、兵ノ強弱果シテ如何論ヲ俟タザルナリ。世人動モスレバ輒チ曰ク、對等ノ權力ヲ有セザルベカラズ、曰ク稅權ノ恢復ヲ謀ラザルベカラズ。曰ク東洋ノ政略ヲ立テザルベカラズ。而シテ一題ヲ出セバ則チ曰ク是レ危道ナリ、是レ後患ヲ遺サント、何ヅ其言ノ大ニシテ其略ノ小ナルヤ、如此ニシテ國ノ富强ヲ致シ、彼諸邦ト并馳セント欲スルハ黄河ノ清ムヲ待ツニ異ナラザルノミ。人或ハ曰ハン、今日ノ國力ヲ以テ斯ル巨額ノ公債ヲ起スハ是レ國家ヲ孤注視

スルモノナリト、然レドモ其償却方法確然已ニ立テバ或人ノ論ハ所謂杞人ノ憂ニ過キズト謂フベシ。

終ニ臨テ一言スベキコトアリ、近ク湖南ノ變ニ際シ、上下色ヲ失ヒ人心恟々遂ニ恐レ多クモ龍駕ヲ枉ゲ給フノ已ムヲ得ザルニ至レリ。是レ果シテ何ゾヤ、國民タルモノ畢生肝ニ銘ジテ忘ルベカラザルノ一事ナリ。然ルニ今我國財源ニ於テ容易ニ得難キノ歲計剩餘金ヲ以テ區々タル事業又ハ政務ノ爲メニ之ヲ費消シ盡サバ實ニ臍ヲ噬ムモ及ブベカラザルノ悔アラントス。熱心國ヲ思フノ餘リ謹テ意見ヲ述ブルコト如此。

明治二十四年九月一日

宮内顧問官 岩村通俊

內閣總理大臣伯爵 松方正義殿

物價並弗相場職工賃錢表

自明治八年
至同十七年
物價並職工賃銀表 (京都府)

種目	數量	八年	九年	十年	十一年	十二年	十三年	十四年	十五年	十六年	十七年
米	一石	五円 六〇〇	四円 七〇〇	五円 三〇〇	六円 九〇〇	八円 四〇〇	二円 三〇〇	三円 六〇〇	二円 五八〇	二円 五〇〇	二円 五八〇
大麥	〃	二 一〇〇	一 六五〇	三 九〇〇	三 九五〇	三 八〇〇	三 六〇〇	三 六〇〇	二 五八〇	二 三五〇	二 三五〇
大豆	〃	八 〇〇〇	六 八〇〇	六 六六〇	七 二〇〇	九 〇〇〇	九 〇〇〇	一 三 五〇〇	一 三 〇〇〇	一 三 〇〇〇	一 三 〇〇〇
小豆	〃	六 三〇〇	七 三〇〇	六 一〇〇	七 三〇〇	八 〇〇〇	九 〇〇〇	九 〇〇〇	九 三〇〇	一 一 〇〇〇	一 一 〇〇〇
茶	五貫目	一 九 五〇〇	二 〇 〇〇〇	一 六 三〇〇	一 七 〇〇〇	一 九 〇〇〇	二 一 〇〇〇	二 一 〇〇〇	二 一 〇〇〇	二 一 〇〇〇	二 一 〇〇〇
酒	一升	100	〇 八〇	〇 九〇	100	110	140	145	115	105	100
味噌	一斤	〇 三三	〇 一〇	〇 一九	〇 三三	〇 三三	〇 三八	〇 三五	〇 三五	〇 三四	〇 三四
醬油	一升	〇 三五	〇 三五	〇 二〇	〇 二〇	〇 二〇	〇 二八	〇 二九	〇 二九	〇 二九	〇 二九
炭	一俵	四 一〇	四 二〇	三 〇〇	四 三〇	五 九〇	五 四二	五 一六	五 七〇	四 六五	四 五〇

種目	數量	八年	九年	十年	十一年	十二年	十三年	十四年	十五年	十六年	十七年
薪	一把	〇 三八	〇 三三	〇 三八	〇 五二	〇 六五	〇 九五	一 〇五	〇 九八	〇 六〇	〇 五五
水油	一升	二 二五	二 〇五	三 三五	二 八五	三 二八	三 二九	四 二七	一 五 七	一 七 〇	一 五 五
鹽	一斤	〇 三三	〇 一〇	〇 三三	〇 二八	〇 二〇	〇 四七	〇 四九	〇 三七	〇 二九	〇 二九
甘藷	一個	〇 〇三	〇 〇三	〇 〇三	〇 〇三	〇 〇六	〇 一六	〇 一五	〇 〇九	〇 〇八	〇 〇八
豆腐	一個	〇 〇八	〇 一〇	〇 一〇	〇 〇八	〇 〇六	〇 一〇	〇 一〇	〇 一〇	〇 〇八	〇 〇八
鯉節	百目	一 七五	一 六五	一 七〇	一 五五	一 七〇	二 六八	二 三三	二 〇九	一 七六	一 五五
白木綿	一端	四 七五	四 六〇	三 七五	四 五〇	五 〇〇	六 〇〇	六 七五	六 〇五	三 八〇	三 七〇
半紙	一束	二 四三	二 八二	二 四二	二 四四	二 四八	二 四二	二 七一	二 六四	一 三四	一 三〇
大工	一人	三 三三	三 五〇	二 八〇	二 八〇	二 八〇	三 六〇	四 三五	四 三五	三 五〇	三 〇〇
左官	〃	二 三〇	二 七〇	二 七〇	二 七〇	二 七〇	三 六〇	四 四〇	四 四〇	三 七五	三 〇〇
建具師	〃	一 五〇	一 五〇	一 五〇	一 八〇	一 八〇	一 八〇	二 〇〇	二 五〇	二 五〇	三 五〇
土方	〃	一 八〇	一 八〇	一 八〇	一 八〇	一 八〇	二 八〇	三 〇〇	二 八〇	三 〇五	二 九〇
染工場	〃	111	110	110	110	110	130	140	150	110	100
染工中	〃	〇 六五	〇 六五	〇 六五	〇 七〇	〇 七〇	〇 八〇	〇 八五	〇 九〇	〇 九〇	〇 九〇
染工下	〃	〇 四五	〇 四五	〇 四五	〇 五〇	〇 五〇	〇 五五	〇 六〇	〇 六五	〇 六五	〇 六〇
職工上	〃	二 一〇	二 一〇	二 五〇	二 八〇	二 八〇	三 〇〇	三 〇〇	三 〇〇	一 八〇	一 八〇
職工中	〃	一 七〇	一 八〇	二 〇〇	二 二〇	二 二〇	二 五〇	二 五〇	二 五〇	一 五〇	一 五〇
職工下	〃	〇 四五	〇 四五	〇 六〇	〇 九〇	〇 九五	110	100	100	〇 五〇	〇 五〇

物價並弗相場職工賃錢表

從明治八年至同十七年西陣織物製産金額表

年次	一ヶ年金額	増減前年比較
明治八年	三百七十萬五千七百圓	
同九年	三百三十貳萬四千四百六十五圓減	三十八萬二千二百九十三圓五十錢
同十年	五百二十八萬八千七百九十六圓增	百九十六萬四千三百八十九圓五十錢
同十一年	七百四十三萬三千九十圓增	二百十四萬四千二百九十四圓
同十二年	七百八十四萬三千二百八十圓增	四十萬九千九百九十圓
同十三年	一千二萬四千二百二十五圓增	二百十八萬千八百四十五圓
同十四年	八百三十八萬三千九百二十五圓減	百六十四萬百九十五圓
同十五年	五百八十七萬六千六百四十圓減	二百五十萬七千三百九十圓
同十六年	三百六十九萬三千七百八十五圓減	二百十八萬二千八百五十五圓
同十七年	三百七十四萬三千七百九十八圓增	五十萬十三圓

同十八年 八十一萬二千七百五十四圓八十八錢

從明治八年至同十八年粟田燒陶器製産金額表

明治八年	五萬二千圓	
同九年	七萬五千圓	增 二萬三千圓
同十年	八萬五千圓	增 一萬圓
同十一年	九萬八千圓	增 一萬三千圓
同十二年	十二萬五千圓	增 二萬七千圓
同十三年	十一萬圓	減 一萬五千圓
同十四年	九萬圓	減 二萬圓
同十五年	八萬七千圓	減 三千圓
同十六年	七萬圓	減 一萬七千圓

同	十七年	四萬五千圓	減	二萬五千圓
同	十六年一月ヨ 同五月マデ	二萬圓		

從明治八年五條清水燒陶磁器製産金額表
至同十八年

明治	八年	五萬一千圓		
同	九年	四萬三千二百圓	減	七千八百圓
同	十年	七萬二千圓	增	二萬八千八百圓
同	十一年	十萬六千四百五十圓	增	三萬四千四百五十圓
同	十二年	十四萬六千四百圓	增	三萬四千四百九十圓
同	十三年	十一萬三千四百圓	減	二萬七千二百四拾圓
同	十四年	十萬五千六百圓	減	七千八百圓
同	十五年	八萬百五十圓	減	二萬五千四百五十圓

同	十六年	六萬四千七百圓	減	一萬五千四百圓
同	十七年	四萬一千圓	減	二萬三千七百五十圓
同	十六年一月ヨ 同五月マデ	一萬二千二百圓		

從明治八年五條清水陶器價格表
至同十七年

品目	年次	八年	九年	十年	十一年	十二年	十三年	十四年	十五年	十六年	十七年
染付三合入石瓶	六月八日	一九〇〇	一九〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇七〇	二四〇〇	二七〇〇	二八〇〇	二四〇〇	二〇〇〇
平形飯茶碗	六月八日	一九〇〇	一九〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇七〇	二四〇〇	二七〇〇	二八〇〇	二四〇〇	二〇〇〇
煖德利	六月八日	六三五〇	六三五〇	六三五〇	六三五〇	六三五〇	六三五〇	六三五〇	六三五〇	六三五〇	六三五〇
猪口	六月八日	三二〇〇	三二〇〇	三二〇〇	三二〇〇	三二〇〇	三二〇〇	三二〇〇	三二〇〇	三二〇〇	三二〇〇
中急須	六月八日	四四五〇	四四五〇	四四五〇	四四五〇	四四五〇	四四五〇	四四五〇	四四五〇	四四五〇	四四五〇
煎茶碗	六月八日	一八六〇	一八六〇	一八六〇	一八六〇	一八六〇	一八六〇	一八六〇	一八六〇	一八六〇	一八六〇

年次	明治八年	同九年	同十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年	同十五年	同十六年	同十七年
洋銀一弗	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
六	一 ^四	一	一	一	一	一	一	一	一	一
月	〇〇二五	〇〇〇〇	九九七三	〇七〇〇	一二〇〇	三五〇〇	六二七	五四八	三一九	〇六六
十二	一 ^四	〇	〇	一	一	一	一	一	一	一
月	〇〇三	九九六五	九九八	一二五	一四二	六三〇	七〇二	三九四	一二一	一六七

明治自十五年三ヶ年間收支豫算調書

自十五年三ヶ年間收支豫算調書

正貨ノ部

金三千百八十六萬八百五十二圓

收入總高

内

金九百九十六萬六千八百九十圓

十五年度歲首在高

金二千百八十九萬三千九百六十二圓

十五年度中收入豫算高

内

金二百三十八萬九百八十七圓

各應繰替金其他

内

金一萬七千九百五十九圓

各應繰替金返納

三ヶ年收支豫算調書

金百十三萬七千圓
 金六十四萬三千三百三十四圓
 金十八萬二千六百九十四圓
 金四十萬圓
 金六十二萬五千圓
 金七十三萬百四十六圓

內

金四十五萬六千三百九十六圓
 金九萬三千七百五十圓
 金十八萬圓
 金七百五十萬千六百八十九圓
 金千六十五萬六千四百十圓
 一、金七百三十六萬六千七百四十三圓
 內
 金七百三十六萬六千八百八十三圓

常用十四、十五年度へ繰替金返納
 貸出金返納
 同 利 子
 東洋銀行外一銀行へ預り金返納
 海外米穀輸出資本返納
 三井物産會社其他荷爲替金返納等

三井物産會社其他荷爲替返納及雜收入
 逆爲替金收入
 正金銀行株券益
 正金銀行爲替返納
 鑄造成貨受入
 支 出 總 高

諸地金買上代

金六千六十圓

雜 支 出

差引

金二千四百四十九萬四千九百九圓

十八年度越高

『外二

金二百三十八萬八千六百六十七圓

諸地金在高

金百九十五萬四千四百二十七圓

外國荷爲替貸在高

墨書越高トモ合計

金二千八百八十三萬七千二百三圓』

十五年度豫算調書

正貨之部

一、金千七百六十四萬九千七百三十六圓

收 入 總 高

內

金九百九十六萬六千八百九十圓

十五年七月一日在高

內

金八百三十七萬千五百五十五圓

傳票濟ノ分

三ヶ年收支豫算調書

『ハ朱
書セシモ
ノ

金七萬圓

大阪ニテ假拂ノ分

金五十萬圓

正金銀行保護預

金十五萬四千圓

第二銀行同上

金八十七萬千七百三十五圓

外國各所預金

金七百六十八萬二千八百四十六圓

十五年度中收入豫算高

内

金百五十二萬八千六百五十一圓

各應繰替返納其他

内

金一萬七千九百五十九圓

各應繰替金返納

金百十三萬七千圓

常用十四、十五年度へ繰替金返納

金二十八萬二千六百十八圓

貸出金返納

金九萬千七百七十四圓

同上利子

金二百四十七萬五千四百七十五圓

正金銀行爲替返納

金三百二十八萬五千二百四十一圓

鑄造成貨受入

金三千九萬三千四百七十九圓

三井物産會社其他荷爲替返納及雜收入

内

金三十萬二千二百二十九圓

三井物産會社其他荷爲替返納及雜收入

金三萬千二百五十圓

逆爲換收入

金六萬圓

正金銀行株券益

一、金百九十三萬五千二百七十六圓

支出總高

内

金百九十三萬三千四百二十圓

地金買上代

金千八百五十六圓

雜支出

差引

金千五百七十一萬四千四百六十圓

十六年度越高

『外ニ

金二百八十六萬六百一圓

諸地金在高

金二百四萬三千四百十圓

外國荷爲替貸在高

墨書越高トモ合計

金二千六十一萬八千二百一圓

『』朱書
以下此レ
ニ做フ

十六年度豫算調書

正貨之部

一、金二千三百二十萬三千二百十八圓

内

金千五百七十一萬四千四百六十圓

金七百四十八萬八千七百五十八圓

内

金四十三萬二千四百五十六圓

内

金十七萬九千三百五十八圓

金五萬三千九十八圓

金二十萬圓

金六十二萬五千圓

金三百六十八萬六千七百一十一圓

金二百五十五萬七千四百六十四圓

收入總高

十六年度七月一日在高

十六年度中收入豫算高

貸出金返納其他

貸出金返納

同上利子

東洋銀行外一銀行へ預け金返納

海外米穀輸出資本返納

鑄造成貨受入

正金銀行爲替返納

三井物産會社其他荷爲替金返納及雜收入

内

金十八萬七千二百二十七圓

金九萬五千八百七十七圓

金三萬二千二百五十圓

金六萬圓

一、金二百七十八萬七千六百三十三圓

内

金二百七十八萬五千五百三十一圓

金二千二百二圓

差引

金二千四十一萬五千五百八十五圓

『外』

金二百六十三萬八千七百九圓

金百九十五萬四千四百二十七圓

墨書越高トモ合計

三ヶ年收支豫算調書

支出總高

正金銀行株券益

送爲替收入

三井物産會社其他荷爲替返納及雜收入

諸地金買上代

雜支出

十七金度へ越高

諸地金在高

外國荷爲替貸在高

金二千五百萬八千七百二十一圓

十七年度豫算調書

正貨之部

一、金二千七百十三萬七千九百四十三圓

收入總高

內

金二千四十一萬五千五百八十五圓

十七年七月一日在高

金六百七十二萬二千三百五十八圓

十七年度中收入豫算高

內

金四十一萬九千八百八十圓

貸出金返納其他

內

十八萬千三百五十八圓

貸出金返納

金三萬八千五百二十二圓

同上利子

金二十萬圓

東洋銀行外一銀行へ預ケ金返納

金二百四十六萬八千七百五十圓

正金銀行爲換金返納

金三百六十八萬四千八百八十八圓

鑄造成貨受入

金十四萬九千五百四十圓

三井物産會社其他荷爲替金返納等

內

金五萬八千二百九十圓

三井物産會社荷爲替金返納其他雜收入

金三萬千二百五十圓

送爲替收入

金六萬圓

正金銀行株券益

一、金二百六十四萬三千八百三十四圓

支出總高

內

金二百六十四萬千七百三十二圓

諸地金買上代

金二千二百二圓

雜收入

差引

金二千四百四十九萬四千九百九圓

十八年度へ越高

『外二

金二百三十八萬八千六百六十七圓

諸地金在高

金百九十五萬四千四百二十七圓

外國荷爲替貸在高

墨書越高トモ會計

三夕年收支豫算調書

金二千八百八十三萬七千二百三圓

自明治十五年 至同二十四年 十ヶ年間罹災費概額一覽表

自明治十五年 至同二十四年 十ヶ年間罹災費概額一覽表

年 度	水 害 費	火 災 費	風 災 費	震 災 費	合 計
十五年度	三〇、〇二一 <small>円</small>	三七、一七四 <small>円</small>	一、〇五五 <small>円</small>	〇〇〇	三三三、二四一 <small>円</small>
十六年度	六、七七八	二一六、二二七	八、〇〇〇	〇〇〇	一三一、三〇六
十七年度	四八九、四六一	三六、二五〇	〇〇〇	〇〇〇	五二五、七一
十八年度	四三八、〇七八	二七、一八八	〇〇〇	〇〇〇	四六五、二六六
十九年度	二六九、五四四	一〇、〇九二	〇〇〇	〇〇〇	二九九、五七六
二十年度	—	三六、五〇八	五、一八七	—	四一、六八六
二十一年度	一七四、三四〇	二四三、五〇〇	〇〇〇	六、三九三	四三四、一二七
二十二年度	一、六二〇、一三六	一〇三、六二五	九、三八五	三六、九〇五	一、七七七、〇〇三
二十三年度	七四八、〇〇〇	五、〇四三	—	—	七九九、〇四三
	五〇一	六〇〇	—	—	一〇一

十ヶ年間罹災費概額一覽表

二十四年度	一、二六〇、三六三	一〇四	二七五、八八八	〇〇七	三〇、八九六	四九六	五、五九三、八六九	八七六	七、一八〇、八六七	四八三
通計	五、三五、四八七	八四三	九三七、六八八	四二	五四、五四四	四八七	五、六三七、一六九	三六二	九、八〇、八七〇	〇六八

右十ヶ年間ノ平均

百十九萬八千八拾七圓

又右十ヶ年間最高最低ノ二ヶ年ヲ擔除スレハ其平均

五十九萬四千七百八十八圓

自明治十五年度 至同二十四年度 十ヶ年間罹災費概額調

年 度	種 別	摘	要	金	額
十五年度	水害費			三四三、二四一	五九五
		山梨縣下堤防道路等修繕費補助		三〇五、〇一一	九五五
				二九〇、〇一一	二一七

十六年度	種 別	摘	要	金	額
	火災費	京都府下堤防其他破損所修繕費		一〇、五〇四	五一〇
		岐阜縣下洪水ニ付土木費増額		四、四九七	二二八
	火災費	神奈川縣廳燒失ニ付需用物品購買費		三七、一七四	六四〇
		福井縣地租改正書類燒失ニ付新調費		七、八八一	六四〇
	風災費	陸軍省ニ於テ暴風雨ノ際死亡及負傷者へ下賜金		二九、二九三	〇〇〇
				一、〇五五	〇〇〇
				一、〇五五	〇〇〇
				一三一、三〇六	二〇〇
	水害費	熊本縣水害ノ爲メ官吏派出等ノ諸費		六、七七八	六一九
				六、七七八	六一九
	火災費	福井縣廳火災ニ罹リ烏有ニ屬シタル地券臺帳再調費		一一六、五二七	五八一
		愛知縣官林出火ニ付消防夫雇入等ノ諸費		一五、五五〇	九〇一
				六六八〇	

十ヶ年間罹災費概額一覽表

二十一年度	
風災費	沖繩縣各社寺暴風ノ爲メ破損修繕費 五、一八七五九〇
水害費	岐阜縣水害ノ爲メ破壊セシ堤防道路 橋梁等ノ修築費 九八、九九〇〇〇〇 德島縣水害ノ爲メ堤防再築修補費 七〇、〇〇〇〇〇〇 青森縣水害ノ爲メ家屋流失田圃損害 等ノ爲メ補助費 二、五二八〇〇〇 岐阜縣水害ノ爲メ官吏出張先キ臨時 事務所ニ充ツル家屋借料 九〇〇〇〇 岐阜縣下各川漲溢堤防破損等ノ爲メ 官吏出張ノ諸費 二、二〇〇〇〇〇 德島縣洪水及海嘯ノ爲メ堤防沙除ヲ 破壊セシ等ニテ官吏出張諸費 四一六〇〇〇 和歌山縣廳火災ニ罹リ器具器械等購 入費 二四三、五〇〇〇三〇 大野治安裁判所燒失新宅費 六、七三四八三〇
火災費	横須賀造船所旋盤工場及模型所火災 燒失ノ爲メ新築及諸器械等購買費 一〇〇、〇〇〇〇〇〇 東京岡山兩遞信管理局及東京郵便局 燒失ニ付新築費 一三〇、〇〇〇〇〇〇 福島縣下那麻郡磐梯山ノ潰裂ニ依リ 用水路修繕費 三、八七一〇〇〇 同上ニヨリ救助治水等ノ爲メ出張旅 費等ノ臨時費 二、五二二五四〇 各府縣水害土木費補助 一、七七〇、〇四三二五九 各府縣水害ノ爲メ出張諸費 一、六二〇、一三六二七〇 愛知縣下大演習ノ際暴風雨ノ爲メ破 損セシ土木費補助 一〇、〇〇〇〇〇〇 木曾大井兩川出水ニ付水制費 一三、三五八一一一 伊豆國大島ニ設置ノ犯罪人留置場燒 失ニ付新築費 一〇三、六一五六七八 七七〇〇〇

二十二年度	
風災費	沖繩縣各社寺暴風ノ爲メ破損修繕費 五、一八七五九〇
水害費	岐阜縣水害ノ爲メ破壊セシ堤防道路 橋梁等ノ修築費 九八、九九〇〇〇〇 德島縣水害ノ爲メ堤防再築修補費 七〇、〇〇〇〇〇〇 青森縣水害ノ爲メ家屋流失田圃損害 等ノ爲メ補助費 二、五二八〇〇〇 岐阜縣水害ノ爲メ官吏出張先キ臨時 事務所ニ充ツル家屋借料 九〇〇〇〇 岐阜縣下各川漲溢堤防破損等ノ爲メ 官吏出張ノ諸費 二、二〇〇〇〇〇 德島縣洪水及海嘯ノ爲メ堤防沙除ヲ 破壊セシ等ニテ官吏出張諸費 四一六〇〇〇 和歌山縣廳火災ニ罹リ器具器械等購 入費 二四三、五〇〇〇三〇 大野治安裁判所燒失新宅費 六、七三四八三〇
火災費	横須賀造船所旋盤工場及模型所火災 燒失ノ爲メ新築及諸器械等購買費 一〇〇、〇〇〇〇〇〇 東京岡山兩遞信管理局及東京郵便局 燒失ニ付新築費 一三〇、〇〇〇〇〇〇 福島縣下那麻郡磐梯山ノ潰裂ニ依リ 用水路修繕費 三、八七一〇〇〇 同上ニヨリ救助治水等ノ爲メ出張旅 費等ノ臨時費 二、五二二五四〇 各府縣水害土木費補助 一、七七〇、〇四三二五九 各府縣水害ノ爲メ出張諸費 一、六二〇、一三六二七〇 愛知縣下大演習ノ際暴風雨ノ爲メ破 損セシ土木費補助 一〇、〇〇〇〇〇〇 木曾大井兩川出水ニ付水制費 一三、三五八一一一 伊豆國大島ニ設置ノ犯罪人留置場燒 失ニ付新築費 一〇三、六一五六七八 七七〇〇〇

	同國新島村火災ニ罹リタル窮民救助費	一、七一二七九七
	帝國大學寄宿舎焼失ニ付新營及物品新調費	二三、四一二一三〇
	國府臺教導團兵營焼失ニ付新築費等	七八、四一二七五一
風災費	長崎及新潟消毒所暴風雨ノ爲メ修繕費	九、三八五四〇一
	東京府外一縣同上ノ爲メ知事官舎修繕費	一、一九二五〇八
	神戶税關暴風破損ノ爲メニ要スル修繕費	一六三七二四
	各裁判所暴風ノ爲メ同上	四八〇〇〇〇
	七、五四九一六九	七、五四九一六九
震災費	熊本縣震災ノ爲メ罹災實況取調費	三六、九〇五九一〇
	八〇四六六〇	八〇四六六〇
	同縣熊本城石垣及兵舎建物修繕費	三四、〇三二八五〇
	熊本始審裁判所修繕費	一、九七五九五〇
	梁川治安裁判所修繕費	九二四五〇

	七九九、〇四四一〇一	七九九、〇四四一〇一
水害費	和歌山縣水害ノ爲メ土功監督費	七四八、〇〇〇五〇一
	一五、〇〇〇〇〇〇	一五、〇〇〇〇〇〇
	北海道豊平川堤防修築費	二〇、三三〇四七五
	各縣水害土木費補助	七〇一、八〇四〇〇〇
	中村區裁判所下出張所洪水ノ爲メ流失ニ付建築費	一、八五〇〇〇〇
	水害地出張旅費	九、〇一六〇二六
火災費	函館商船學校火災ニ罹リ新營費	五一、〇四三六〇〇
	一〇、〇〇〇〇〇〇	一〇、〇〇〇〇〇〇
	三池集治監事務所火災ニ罹リ新營費	三、二〇〇〇〇〇
	陸軍歩兵第八聯隊第一第二大隊浴室火災ニ罹リ新營費	二、三九一六〇〇
	貴衆兩院火災ニ罹リ營繕費	三五、四五二〇〇〇
二十四年度	七、一八〇、八六七四八三	七、一八〇、八六七四八三

水害費	富山福岡兩縣水害費補助	一、二八〇、二八三一〇四
火災費	帝國議會假議院再築費	二七五、八一八〇〇七
	貴衆兩院裝飾及備付費	三一五、四二三三三四
	陸軍屯田兵家屋火災ニ罹リ新營費	三二、九九五〇〇〇
	地質調査所構内分析試驗室新營費	五、七六九六七三
風災費	神戶稅關重量物揚卸器械新設及神戸大阪兩稅關建物修繕費	二一、六三〇〇〇〇
	兵庫縣石炭庫新營及小野濱分工場修繕費	三〇、八九六四九六
	吳鎮守府建物新營及學校修繕費	七、一四六〇〇〇
震災費	岐阜縣震災土木費補助	一八、七四五九五〇
		五、〇〇四五四六
		五、五九三、八六九八七六
		二、〇八一、一五四六七〇

愛知縣震災土木費補助	一、一六四、六八二九六六
名古屋郵便電信局假局舎新築費	二、五〇〇〇〇〇
陸軍省所管震災費	五七、一五一〇四五
司法省所管同上	二二、〇八三五六二
遞信省所管同上	一六、二九七六三三
震災地方救濟及堤防震	二、二五〇、〇〇〇〇〇〇

明治十六年度俸給調

明治十六年度俸給調

各廳

金六百二十萬四千九百十四圓三十一錢一厘

陸海軍兩省

金三百七十三萬九千三百二十八圓四十八錢一厘

各府縣

金二百五十二萬六千二百二十八圓四十七錢六厘

合計

金千二百四十七萬三千七百七十一圓二十六錢八厘

明治十七年度俸給調

各廳

金六百四十二萬三千五百三十一圓

陸海軍兩省

金四百二十二萬三千五百八十二圓

各府縣

金二百七萬五千五十三圓

合計

金千二百七十二萬二千百六十六圓

十六年度十七年度俸給調

十六年度俸給ハ十八年度豫算帳ニ掲グル實費額ニ據ル。

但十八年度豫算帳ニ就テ實費分リ難キ分ハ十六年度ノ豫算ニ據ル其件左ノ如シ。

宮内省 外國公館

大藏省ノ内租稅局、關稅局、各稅關

農商務省ノ内驛遞局中上海郵便局

府縣費

屬官俸給ハ府縣費据置臺帳ニ據ル

明治十六年度俸給調

徵稅費俸給ハ十六年度豫算ニ據ル。
 史誌編輯費俸給ハ据置ナルニヨリ十四年度ノ決算額ニ據ル。
 十七年度ハ先般取調ノ豫算額ナリ。

陸海軍々備請求總括

(番外總括)

一、金三十萬六百三十四圓

海軍省請求

海防水雷布設費

但東京長崎港ノ二ヶ所ニ布設スベキ費用

同省請求

一、金五千九百九十一萬八千八十六圓

軍艦製造費

但十六年度以降年々三百三十三萬圓支出ノ外仍ホ増額ヲ要スル分(年割未定)

陸軍省請求

一、金二百七十三萬九千六百九十九圓

長崎港砲臺建築費

但年度未定

同省請求

陸海軍々備請求總括

一、金四百一十一萬八千三百五十七圓
但年度未定

下關砲臺建築費

陸軍省請求

一、金三十萬圓

村田銃及彈藥製造費

但十八年度へ繰上請求ノ分其他八十萬千九百二十三圓五十錢三厘ハ二十年度迄ニ繰上ケ
請求ノ分

内務省請求

一、金六十萬圓

女川灣修築費

但年度未定

同省請求

一、金百二十萬圓

國道改良費

但十八年度以降年々請求ノ分

同省請求

一、金二十八萬圓

直轄諸川治水費

但十八年度以降年々請求ノ分

外金四十二萬九千九百四十四圓

從前年額既定ノ工費、但利根川始十三川

金五萬圓

淀川筋工費

但廿一年度迄ニ増額目途額ハ悉皆支出ヲ了スル筈尤モ十八年度ハ三萬七千五百圓廿一
年度ハ二萬六百九十四圓ナリ。

合計 六千九百四十五萬六千七百七十六圓

自十六年度至廿二年度軍備皇張費

十六年度

一、金七百六十五萬圓

增稅其他ノ收入額

內

高金七百八十二萬三千百六十圓

十五年度ニ比シ
增稅豫算額

金六百二十六萬四千六百七十九圓

造石稅

內 金六十二萬五千五百二十五圓

煙草稅

金九十三萬二千九百五十六圓

仲買人稅

金七百五十萬圓

增稅額ノ內皇張費ニ充ツベキ額

外金三十二萬三千百六十圓

增稅徵收ノ費用ニ充ツベキ分

金十五萬圓

印刷局積金ノ內納付額

一、金六百八萬二千五百八十一圓四十一錢五厘

皇張費總額

內

金百五十萬圓

陸軍省兵員增加費

金十九萬三千三百五十圓十六錢一厘

東京灣砲臺建築費

外金四萬六千六百四十九圓八十三錢九厘

決算殘金

金三百六十二萬五千四百四十三圓七十八錢

軍艦製造費

外金七十五萬八千九百三十六圓十七錢六厘

決算殘金

金二十五萬圓

軍艦維持費

金四萬三千四百九十七圓七十五錢

(海軍) 火藥製造興業費

外金四萬三千五百四十三圓二十五錢

決算殘金

金二十六萬九千六百六十圓六錢四厘

軍人恩給武官年金

外金七千六百六十五圓九十三錢六厘

決算殘金

金十五萬五千五百六十六圓

(陸軍) 村田銃及彈藥製造費

金四萬四千五百五十一錢五十四錢(海軍)

(海軍) 扶桑天城兩艦航海費

金九百十二圓十二錢

(海軍) 兵器費(十五年度へ納付セシ不用銃器拂下代ニ對シ)

差引殘

軍備皇張費

金百五十六萬七千四百十八圓五十八錢五厘

軍備部へ繰入

但繰入豫算額百八十一萬六千三百三十三圓ニ比シ二十四萬八千七百十四圓四十一錢五厘減
少ス

十七年度

一、金七百六十八萬二千三百七十八圓九十六錢九厘

増税其他ノ收入額

内

高金七百八十七萬八千三百六十三圓

金六百三十六萬六千六百五十六圓

酒造税

内 金百二十三萬九千五百二十六圓

煙草税

金二十七萬二千八百八十一圓

仲買人税

金七百五十萬圓

増税額ノ内皇張費ニ充ツベキ額

外金三十七萬八千三百六十三圓

増税徴收ノ費用ニ充ツベキ分

金十八萬二千三百七十八圓九十六錢九厘

軍備部ヨリ繰入

但十六年度砲臺建築費水雷局廳舎建築費仕拂殘返納ノ分及ヒ砲臺建築費ノ内海岸砲

代價十九年度ヨリ繰上ヲ要スル分本年度軍備部繰入豫算ヨリ支出スヘキ外不足ニ付

軍兩部ヨリ繰入ノ分

一、金七百六十八萬二千三百七十八圓九十六錢九厘

皇張費總額

内

金二百萬圓

陸軍省費兵員増加費

金三十二萬千六百五十九圓七十一錢九厘

(東京灣) 砲臺建築費

金四百三十八萬七千八百六十八圓

軍艦製造費

金四十萬三千八百五十圓

軍艦維持費

金二十萬圓

(海軍) 水雷局廳舎建設費

金二十七萬三千六百六十二圓

武官年金。軍人恩給

金五萬千七百九十六圓

(海軍) 軍艦航海費

金四萬三千五百四十三圓二十五錢

(海軍) 火藥製造所建築費

差引殘

金ナシ

十八年度

一、金二百五十九萬四千八百六十七圓

增稅其他ノ收入額

内

金百三十三萬千九百八十三圓

增稅額ノ内皇張費ニ充ツベキ額

金ナシ

酒造稅

金百二萬二千二百四十七圓五十錢

煙草稅

但十五年度豫算月割額(九ヶ月分)ト十八年度豫算トノ差額增額

金三十萬九千七百三十五圓

仲買人稅

金五十錢

切上増

金百二十六萬二千八百八十四圓

軍兩部ヨリ繰入

但十八年度增稅額不足ニ付軍備部儲蓄ノ内ヨリ繰入スベキ高

一、金六百三十九萬八百十三圓

皇張費總額

内

金三百萬圓

陸軍省經費(兵員增加及隊數增加費)

金二百十三萬三千三十四圓

軍艦製造費

金五十九萬九千二百六十四圓

軍艦維持費

金四十八萬九千四百六十三圓

(東京灣)砲臺建築費

金十六萬九千五十二圓

武官年金。軍人恩給

差引不足

金三百七十九萬五百九十四十六圓

十九年度

一、金七百六十二萬二千五百五十五圓六十一錢六厘

增稅其他收入額

内

金高七百八十七萬八千三百六十三圓

金六百三十六萬六千六百五十六圓

酒造稅……(十七年度ト十五年度トノ比較ニヨル以下皆名ツ)

内 金百二十三萬九千五百二十六圓

煙草稅

金二十七萬二千八百八十一圓

仲買人稅

金七百五十萬

增稅額ノ内皇張費ニ充ツベキ額

外金三十七萬八千三百六十三圓

增稅ニ係ル徵稅費ニ充ツベキ分

軍備皇張費

金千二萬二千五百五十五圓六十一錢六厘

軍備部ヨリ繰入

但十六年度ニテ軍備部へ繰入タル金額百五十六萬七千四百十八圓五十八錢五厘ノ内

十七年度へ繰入タルモノ十八萬二千三百七十八圓九十六錢厘十八年度へ繰入タルモノ

ノ百二十六萬二千九百八十四圓其計百四十四萬五千二百六十二圓九十六錢九厘ヲ差

引殘金本年度ニテ繰入ベキ分

一、金八百四十六萬千三百二十圓

皇張費總額

内

金四百萬圓

陸軍省費(兵員增加及隊數增加費)

金二百四十一萬四千七百十八圓

軍艦製造費

金七十九萬九千十四圓

軍艦維持費

金九十七萬三千九百二十六圓

(東京灣)砲臺建築費

金二十七萬三千六百六十二圓

武官年金。軍人恩給

差引不足

金八十三萬九千六百六十四圓三十八錢四厘

一、金七百五十萬圓

增稅收入額

内

高金七百八十七萬八千三百六十三圓

(内譯其他十九年度ニ同ジ)

金七百五十萬圓

增稅收入額

外金三十七萬八千三百六十三圓

增稅ニ係ル徵稅費ニ充ツベキ分

一、金九百五十六萬七千五百五十二圓

皇張費總額

内

金四百萬圓

陸軍省費(兵員增加及隊數增加費)

金九十六萬五千二百二十六圓

(東京灣)砲臺建築費

金三百三十三萬圓

軍艦製造費

金九十九萬八千七百六十四圓

軍艦維持費

金二十七萬三千六百六十二圓

武官年金。軍人恩給

差引不足

金二百六萬七千五百五十二圓

二十一年度

一、金七百五十萬圓

增稅收入額

(內譯二十年度ニ同ジ)

一、金九百七十七萬二千九百二圓

皇張費總額

內

金四百萬圓

陸軍省費(兵員增加及隊數增加費)

金九十七萬七百二十六圓

(東京灣)砲臺建築費

金三百三十三萬圓

軍艦製造費

金百十九萬八千五百十四圓

軍艦維持費

金二十七萬三千六百六十二圓

武官年金。軍人恩給

差引不足

金二百二十七萬二千九百二圓

二十二年度

一、金七百五十萬圓

增稅收入額

(內譯二十年度ニ同ジ)

一、金九百八十四萬八千七百七十一圓

皇張費總額

內

金四百萬圓

陸軍省費(兵員增加及隊數增加費)

金八十四萬六千八百四十五圓

(東京灣)砲臺建築費

金三百三十三萬圓

軍艦製造費

金三十九萬八千二百六十四圓

軍艦維持費

金二十七萬三千六百六十二圓

武官年金。軍人恩給

差引不足

金二百三十四萬八千七百七十一圓

二十三年度

一、金七百五十萬圓

增稅收入額

(內譯二十年度ニ同ジ)

一、金九百六十萬二千九十二圓

皇張費總額

軍備皇張費

内

金四百萬圓

陸軍省費（兵員増加及隊數増加費）

金四十萬四百十六圓

（東京灣）砲臺建築費

外金十七萬四千八百二十四圓四十錢

廿四年度ニテ支出スベキ分

但十八年度ニテ月割（三ヶ月分）減額ノ分

金三百三十三萬圓

軍艦製造費

但十六年度決算殘金七十五萬八千餘圓ノ内銀貨交換差減ニ係ル員額五十二萬七千餘

圓ヲ除キタル殘額二十三萬二千餘圓ハ二十四年度ニ於テ交付スヘキ計算ナリ。

金百五十九萬八千十四圓

軍艦維持費

金二十七萬三千六百六十二圓

武官年金。軍人恩給

差引不足

金二百十萬二千九十二圓

收入

合計金五千三百九十八萬千九百八十三圓

外金百五十六萬七千四百十八圓五十八錢五厘 各年度殘金ノ收入重複ノ計算ナレバ之ヲ

除算ス

支出

合計金六千七百四十萬八千四百十圓三十八錢四厘

比較不足

金千三百四十二萬六千四百二十七圓三十八錢四厘

信用組合設立意見

我國維新以來國家ノ開明ヲ増進シ、民人ノ權利ヲ保全スルガ爲メニ建設シタル所ノ制度、法律多クシテ、且詳ナリト謂フベシ。殊ニ地方自治ノ制ヲ定メ立憲政治ノ大本ヲ建テラルルニ至リテ國家ノ政治組織全ク備具シ、世界ノ開明諸國ニ對シテ復タ愧ル所ナシ。斯レヨリ以往ハ唯之ニ由リ之ヲ用フルノ習熟練達ヲ期スルノミ、是レ我邦ノ僅々二十三年間ニ於ケル爲政ノ實蹟ナリ。

然レドモ制度法律ノ完全周備ハ是レ唯形式上ノ開明ノミ、開明ノ形式ハ必人民ノ責任ヲ重クシ其負擔ヲ増スモノナリ。人民ニシテ此責任ヲ盡シ此負擔ニ堪ユルノ實力ヲ有スレバ則可ナリ。若シ此實力ヲ有セザレバ完全周備ノ法律アリト雖、不用ノ空文タルニ過ギズシテ、唯々開明ノ進歩ヲ阻絶スルノミナラズ。又社會上政治上ノ德義ヲ汚瀆シテ其國家ニ害アル淺カラズ。之ヲ要スルニ形式上ノ開明ハ實體上即經濟上ノ改良進歩ト並立連行スルニアラザレバ其活動力ヲ發スルコト能ハズ。立憲政治地方自治ノ良制アリト雖、其果シテ能ク美果ヲ收ムルヲ望ムベカラザルナリ。試ミニ我邦現時經濟上ノ景狀ヲ觀察セヨ、經濟上ノ境界ハ封建割據ノ境關既ニ撤去セ

ラレテ全國交通ノ一大區劃方ニ起リ、更ニ進ンデ世界萬國ト連絡ヲ相通ゼントスルノ秋ナリ。而シテ經濟ノ組織秩序ヲ問ヘバ封建時代ノ舊制故習ハ營業、旅行、移住ノ自由ヲ定メタル諸法制ノ爲ニ壞滅セラレ、殆ンド其餘類ヲ遺サズ、自由交通ノ大經濟界ニ適スベキ新秩序、新組織ハ亦未ダ確然成立スルモノアルヲ見ズ。夫レ社會ノ經濟上ニ於テ適當ナル組織ト秩序トヲ要スルハ猶ホ國家ノ政治上ニ於テ一日モ政體ノ確立ヲ缺ク能ハザルガゴトシ。今我邦ノ經濟ハ組織ナクシテ立チ、秩序ナクシテ行クモノナリ。農業ノ振ハザル商工業ノ進マザル、職トシテ之ニ由ラザルハナシ。嗚呼實體上ノ景狀此ノ如クニシテ形式上ノ開明ノ其活動力ヲ發スルヲ望ムモ豈得ベケンヤ。故ニ今日立法上行政上ノ急務ハ自由交通ノ大經濟界ニ適スベキ新秩序新組織ヲ起スニ在リ、實體上ノ發達進歩ヲシテ夫ノ既ニ頂點ニ達セル形式上ノ開明ト並立連行セシムルニ在リ。

然シテ我邦經濟ノ新組織、新秩序ヲ起スニ於テ最モ急務トスル所ハ、資本融通ノ途ヲ開クニ若クハナシ。今、日本銀行ヨリ以テ國立私立ニ至ルマデ銀行ノ數少カラズ、株券ノ制、爲替ノ法等略ボ備ハレリト曰フト雖、是レ概ネ中産以上ノ營業者ニ對シテ資本融通ノ便ヲ與フルモノノミ。中産以下ニ在テハ曾テ其便ヲ享クル能ハズ。此等ノ組織ハ始ヨリ中産以下營業者ノ爲メニ設置シタルモノニ非ズト謂フベシ。抑モ我邦ハ國民ノ財産自ラ平均ヲ得テ、貧富ノ度甚ダ懸

隔ナラズ、豪農大賈ノ數已ニ多カラズシテ、無職ノ窮民モ亦甚ダ繁カラズ。故ヲ以テ國民中十ノ七八ハ小農ト小商工ニ從事スルモノナリ（今農務局農事調査表ニ依ルニ三府二十四縣ニ於テ農民中田畑十町歩以上ヲ所有スル者ハ二萬四千五百二十五戸、十町歩以下二町歩以上ヲ所有スルモノハ三十二萬七千二百六十四戸、二町歩以下ヲ所有スル者ハ二百四十八萬九千八百二十六戸トス）。是レ小農小商工ハ實ニ國民生産者中ノ要部ニシテ其社會ハ實ニ國家ノ基礎ヲ成スモノタリ。況ヤ器械製造ノ業未ダ發達セズ田圃ノ區分狹小ニシテ、大農業ヲ行フ能ハザル今日ニ在テハ、此等小農小商工ノ國家ノ生産業ニ對シテ重且大ナル價值ヲ有スルハ歐洲諸國ニ於ケル中産以上ノ營業者ト比較スベキニ非ルナリ。故ニ資本融通ノ途ヲ開クハ首トシテ此社會ニ供給スルノ利便ヲ務ムベシ。此社會ニシテ資本缺乏シ産業衰替スルニ至ラバ、是レ國家ノ精力耗盡スルモノナリ。中産以上ノ社會獨リ其産業ヲ保タント欲スルモ得ンヤ。且夫レ地方自治ノ團體ハ中央政權ノ基礎ニシテ地方ニ於ケル政務ノ舉否、人民ノ文野、經濟ノ富實虛耗ハ國權ノ消長、國力ノ盛衰ト直接ノ關係ヲ有スルヤ言フヲ待タズ。前ニ中央集權ノ宿弊ヲ一洗シ、地方自治ノ新制ヲ斷行シタルモ、亦實ニ地方ノ獨立ヲ崇重シ、地方ノ福利ヲ増進スルノ趣旨ニ外ナラズ。若シ今ニシテ地方組織ノ基礎タル中産以下農工商ノ爲メニ其産業ヲ維持スルノ方法ヲ講ゼズンバ、地方ノ福利竟ニ増進スルニ及バズシテ其獨立果シテ望ムベカラズ、自治制度ヲ設クルノ趣

旨將ニ是ニ於テカ廢セントス。而シテ國權ノ消長、國力ノ盛衰未ダ其如何ヲ知ラザルナリ。

明治十七年ノ調査ニ據レバ、全國ニ於テ地所ヲ抵當トスル負債ノ金額ハ、二億三千三百十萬餘圓ニシテ、十八年ニハ三億三千二百二十八萬餘圓ナリ。今其利子ヲ概算スルニ平均一割二分トスレバ十七年ニハ二千七百九十七萬餘圓、十八年ニハ二千七百八十七萬圓以上ニ達セリ。然レドモ財主ノ高利ヲ博取スルヤ或ヒハ格外ノ利ヲ要シ、或ハ貸付ノ期限ヲ短縮シテ屢々證書ヲ書換へ、月數ヲ重複セシメテ貪ル所ノ金額ヲ擧グレバ、或ヒハ一割五分ニ平均シテ三千四百萬圓以上ニ達スベシ。夫レ此ノ巨額ノ負債ト高率ノ利子トノ地方人民ノ經濟ニ於テ如何ナル結果ヲ生ズルヤヲ觀察スルニ、負債者ニ在テハ其收益ノ大部分ヲ擧ゲテ之ヲ高利ニ供スルガ爲メニ常ニ經濟ノ困難ヲ免レズ。其地方ニ在テハ之ガ爲メニ其地生産ノ利益ヲ盡シテ都會資本家ニ吸收セラルルヲ以テ、自ラ衰弱ヲ來スニ至ル。然レドモ是レ猶忍ブベシ、唯利子ノ高貴ナルガ爲メニ元金ヲ消却スルコト能ハズシテ、土地ヲ賣却シ若クハ破産スルモノ頻數ナルニ至テハ其經濟上政治上ニ及ボス所ノ害ハ決シテ尠少ナラズ。且此ノ事ヲシテ全國小數ノ大地主ニ出デシメバ猶深ク憂トスルニ足ラズト雖ドモ、國中多數ヲ占ムル中産以下ノ人民ニシテ其土地ヲ棄テ恒産ヲ失フニ至ツテハ是レ國家ノ元氣之ガ爲メニ漸々消耗スルモノナリ。大患ト謂ハザルベケンヤ、今明治二十年全國地所賣買ノ登記件數ヲ統計スルニ、

五圓未滿	一四四、七一四
五圓以上拾圓未滿	一〇四、八九八
十圓以上二十五圓未滿	一五八、五二四
二十五圓以上五十圓未滿	一二七、七二八
五十圓以上百圓未滿	八二、五二七
百圓以上二百圓未滿	三五、〇一七
二百圓以上三百圓未滿	一〇、五五九
三百圓以上四百圓未滿	四、九五七
四百圓以上五百圓未滿	二、七五五
五百圓以上七百五十圓未滿	三、二九九
七百五十圓以上千圓未滿	一、五六一
千圓以上千五百圓未滿	一、四八四
千五百圓以上二千圓未滿	七一六
二千圓以上五千圓未滿	九九四
五千圓以上一萬圓未滿	二四四

一萬圓以上

九二

合計

六八〇、一一五

ニシテ十圓以上二十五圓未滿ノモノ最モ多ク、五圓未滿ノモノ之レニ次ギ五圓以上十圓未滿ノモノ又之ニ次ダリ。此三項ヲ合計スレバ五十三萬三千八百六十四件ニシテ、之ヲ總件數六十八萬一百十五ニ比較スレバ實ニ七割八分強ヲ占ムルヲ見ル。是レ我邦小資本ノ需用最モ多ク、而シテ其供給ノ機關ナキガ爲ニ中産以下人民ノ其ノ生産力ヲ衰弱シ、若クハ全ク之ヲ耗失スルモノノ多キヲ證スルニ足レリ。

中産以下人民ノ産ヲ破リ業ヲ失フ其趨勢既ニ此ノ如シ。此ノ如クニシテ止マズンバ地方人民自治ノ精神全ク消耗シテ少數豪産者ノ專制ヲ致シ、豪産者モ亦竟ニ自治ノ勞費ト救惠恤ノ費用トニ堪ユル能ハザルニ終ラントス。是レ豈唯々自治ノ精神ト背馳スルノミナランヤ。經濟上ノ紛争ト社會ノ軋轢トヲ起シ、以テ國力ヲ衰微セシム。其害毒タル亦甚シ、今ニシテ之ヲ防止セザレバ後終リニ爲スベカラザルニ至ラントス。西哲言ヘル有リ、曰ク國家ノ目的ハ人民ノ幸福安寧ヲ謀ルニ在リ、故ニ人民ノ衣食ニ窮シ、其生ヲ遂グル能ハザル者有レバ之ヲ救ヒ、之ヲ恤ムハ執政者ノ最モ貴重スベキ職掌ナリ。而シテ人民ヲシテ早く其所ヲ得セシメ是ノ如キノ窮困ニ陥ラシメザルハ更ニ貴重スベキノ職掌ナリト。當局ノ責アル者之ヲ忽ニシテ可ナランヤ。

然ラバ則之ヲ防止スルノ策如何、營業ノ自由ヲ禁止シ、交通移住ノ區劃ヲ定メ、衣服、器物ノ使用ヲ制限シテ、財貨ノ聚散ヲ遏メ、田地賣買ノ禁ヲ復シテ富豪兼並ノ弊ヲ防ギ以テ、一地方ノ利益ヲ保護シ、以テ中産以下農工商ノ困難ヲ救ハンカ。此ノ如キ政略ハ之ヲ封建割據ノ時代ニ施スベクシテ、自由交通ノ今日ニ行フベカラズ。然ラバ則今日ニ適スルノ策果シテ如何、曰ク信用組合ノ法ヲ制シ、中産以下人民ノ爲ニ金融ノ便ヲ開クニ在ルノミ。信用組合ハ其目的トスル所ハ中産以下人民ヲシテ經濟上自助ノ精神ヲ作興セシムルニ在リ。其方法ハ組合員ヲシテ毎月少額ノ資金ヲ拂込マシメ、一方ニ於テ組合員自己ノ資本ヲ貯蓄シ他ノ一方ニ於テ其需用スル所ノ資本ヲ供給スルニ在リ（其方法ハ別冊ヲ參照スベシ）而シテ組合ノ資本ヲ組合員ニ貸付スルハ專ラ對人信用ヲ主トシテ、財産抵當ヲ要トセズ、是レ中産以下人民ノ小資本ヲ供給スルニ於テ最モ適切ノ方法ナリト、世或ハ對人信用ノ困難ヲ説クモノアリ。然レドモ左ノ方法ヲ以テセバ頗ル其容易ニシテ行ハルベキヲ知ルナリ。

第一、組合ノ區域ヲ一町村若クハ數町村ニ限リ組合員ノ生産力ト其品行資望等トヲ詳悉スルノ便ヲ謀ルコト。

第二、組合役員ニ十分ナル權限ヲ付與シ組合員ノ信用ヲ酌量シ貸付金ノ使用ヲ監督セシムルコト。

又組合員中ヨリ信用評定委員十名乃至十五名ヲ選舉シ之ヲシテ各組合員ノ信用スベキ程度ヲ評定シテ信用尺度表ヲ調製セシメ、組合役員ヲシテ此表ニ據リテ貸付金額ノ多寡ヲ斟酌セシムルコト。

第三、資本貸付ニ際シ、保證人ヲシテ其償還ヲ保證セシムルコト。蓋シ對人信用ノ程度ヲ確定スルニ於テ最モ緊密ノ利害ヲ有シ常ニ負債者生産力ノ伸縮ヲ監督スルモノハ保證人ニ過グルハナシ。

以上ノ三法ニ據リテ對人信用貸付ノ方法ヲ計畫セバ、組合設立ノ目的ヲ達スルハ決シテ難キニアラザルベシ。是レ既ニ歐洲諸國ノ信用組合ニ於テ經驗シ、而シテ對人信用ヲ擴張スルト共ニ組合營業ノ基礎ノ甚ダ鞏固ナルヲ表明シタル所ナリトス。殊ニ獨逸國ニ在テハ一千八百七十三年乃至七十七年ニ於ケル有名ナル世界商業ノ不振、詐偽會社ノ恐慌ニ當リ全國信用組合ノ損失ハ言フニ足ラザルノ少額ニ止マレリ。

年次	組合數	貸付金ニ對スル平均損失額
一八七二年	八〇七	五千馬克毎ニ 一馬克
一八七三年	八三四	千馬克毎ニ 同
一八七四年	八一五	二千馬克毎ニ 同

一八七五年	八一五	千百十一馬克九分一每ニ	同
一八七六年	八〇六	千二百五十馬克每ニ	同
一八七七年	九二九	九百七十六馬克每ニ	同

右ノ表ハ信用組合ガ世界商業恐慌ノ中ニ屹立シテ、基礎ノ鞏固ナルト營業ノ確實ナルトヲ證明シタルモノナリ、彼ノ妄リニ對人信用ノ危險ヲ疑ヒ組合成立ノ困難ヲ慮ルガ如キハ皮相ノ論ノミ。

今之ヲ我國ニ施設シテ全國中最多數ヲ占ムル中産以下人民ノ爲メニ低利ノ資本ヲ媒介シ、併セテ貯蓄寄托ノ便宜ヲ得セシメ以テ其生産力ヲ振興スルハ眞ニ當務ノ急ト謂フベシ、然シテ之ニ因リテ生スベキ利益ヲ概括スレバ大略左ノ如シ。

第一 自治ノ精神ヲ鞏固ニスルノ利益

シユツエ氏曰ク信用組合ハ地方自治ノ豫備數ナリト、至言ト謂フベシ、每自治區若クハ二三ノ自治區ニ一ノ信用組合ヲ設ケ、町村公民ノ多數ヲシテ組合員タラシメ以テ經濟上隣保相助クルノ親和團結ヲ養成スレバ、直接ニハ自治ノ制度ヲ圓滑運用セシメ間接ニハ多數公民ノ經濟上ノ景況ヲ改良シテ自治ノ費用ヲ分擔スルノ資力ヲ増加スルヲ

得ルノ利益アリ。且組合ノ經理ニ由リテ生ズル所ノ利潤ハ之ヲ組合員ニ配當シ、尙ホ剩餘アラバ、自治區學校ノ補助書籍館ノ設置並ニ孤兒院等ノ維持費ニ供スルコトヲ得ベシ、獨逸國ノ如キハ常ニ之ヲ以テ例トス。

第二 地方經濟ノ獨立ヲ維持スルノ利益

信用組合ノ經理スル所ハ、一地方ノ經濟事務ヲ囊括シテ遺スナキガ故ニ此ニ由リテ生ズル所ノ利益ハ盡ク其地方營業者ノ手ニ落ち、其剩餘ノ金圓モ亦地方ノ區域ヲ出デズ因テ以テ地方ノ金融ヲ圓滑ニシ、有害ナル經濟上ノ變動ニ抵抗シテ地方經濟ノ獨立ヲ保全シ、都會射利ノ徒ヲシテ地方ノ經濟ヲ蹂躪セシムルノ患ヲ禦クベシ。

第三 低利ヲ以テ資本ヲ供給スルノ利益

信用組合員ハ資本主ト借主トヲ兼ヌルモノナリ、故ニ組合ハ信用貸付ノ間ニ於テ利ヲ射ルノ要ヲ見ズ、期スル所ハ唯低利ノ資本ヲ供給スルニ在リ、其利子ハ組合員ノ拂込ミタル持分金ノ利子及ビ組合外ヨリ收集シタル、資本ノ普通利子及ビ諸雜費ヲ償還スルニ足ルヲ以テ程度トス、是レ資本家ト借主ト各其利害ヲ異ニスル所ノ通常銀行ニ在テハ決シテ爲ス能ハザル所ナリ。

第四

中産以下人民ノ節儉勉強ノ精神ヲ鼓舞スルノ利益

信用組合ハ主トシテ中産以下人民ノ團結ヲ以テ成立シ、資本ヲ運轉シテ貯蓄金額ニ利子ヲ生ズルノ方法ナルガ故ニ、其組合員ニ對スルハ常ニ對人信用ヲ主トシテ重キヲ土地財産ニ置カズ、蓋シ豪農巨商ノ生産上ノ要素ハ其土地及ビ資本ニ存シ、小農小工商ノ生産上ノ要素ハ、節儉勉強耐忍等ノ如キ人身上ノ徳義ニ存ス、是ヲ以テ中産以上ノ人民ハ土地及資本ヲ以テ信用ノ基礎トナスベキモ、中産以下ノ人民ハ必ラズ人身上ノ徳義ヲ以テ信用ノ基礎トナサザルベカラズ、是レ信用組合ガ對人信用ヲ主トスル所以ナリ、故ニ此ノ組合ヲ旺盛ニスル、即チ人身上ノ徳義ニ價值尊嚴ヲ加フルモノナルヲ以テ組合設置ノ結果ハ中産以下人民ヲシテ節儉、勉強、耐忍等ノ精神ヲ作興セシムルヤ疑ヲ容レズ。

第五

生産事業ノミニ資本ヲ放下スルノ利益

組合ニ役員又ハ評定委員アリテ常ニ各組合員ヲ觀察シ、營業經理ノ巧拙精粗ト平素ノ儉奢、勤怠等トヲ甄別シテ信用ノ程度ヲ定メ、其貸付金額ヲ増減スルノ方法ナルガ故ニ資本ヲ放下スルハ必ラズ生産事業ニ限レバ、彼ノ財産ヲ抵當トスル通常銀行ノ如ク

不生産ノ事業ニ資本ヲ貸付スルモノノ比ニ非ズ。

第六

信用經濟ノ普及スルノ利益

營業ノ資本ヲ集聚シ信用ヲ以テ金融ノ利便ヲ享クルハ、從來豪農巨商大資本家ノ專有獨占ニ屬スル所タリ。今信用組合ノ法ヲ設クルトキハ小農小商工ヲシテ豪農巨商ト同ジク此利便ナル方法ヲ利用セシムルニ至ル、其益タル少カラズ。我邦ノ如キ富力ノ分配ニ甚シキ不平均ナク、中産以下ノモノ國民ノ最多數ヲ占ムル邦國ニ於テハ其大ニ全國經濟ノ發達ヲ進ムルハ辯ヲ待タザル所ナリ。

信用組合ノ利益ハ以上ニ列舉スル所ノ如シ。果シテ此法ヲ施行セバ我邦目下ノ急務タル實體上ノ進歩ヲ促シ、形式上ノ開明ト並立連衡セシムルニ足ル、復何ゾ地方自治制度ノ活動力ヲ發セズ、其美果ヲ結バザルヲ是レ憂ヘンヤ。

然レドモ我邦經濟發達ノ程度ハ、猶海外諸國ノ比ニ非ズシテ、人民ノ多數ハ新世ノ經濟機關ヲ利用スルノ經驗ニ乏シ、殊ニ中産以下資本ニ缺乏セルノ景狀ヨリシテ之ヲ察スレバ、信用組合ヲ設クルノ利益大ナリト雖ドモ、之ヲ誘導勸奨スルニ非ズンバ竟ニ其成立ノ隆昌ヲ見ル能ハザラントス、而シテ之ヲ勸奨誘導スルニハ亦唯組合資本ノ不足ヲ補助シ、以テ内ハ其成立ヲ容易

ニシ外ハ組合ノ信用ヲ鞏固ナラシムルニ在ルノミ、但之ヲ補助スルハ組合自治ノ精神ト組合員自助ノ能力トヲ發達セシムルノ方針ヲ取り、之ニ若干金圓ヲ貸付シテ漸次ニ之ヲ償還セシムルノ方法ニ由ルヲ要ス、夫ノ資金ヲ惠與スルガ如キハ唯ニ國庫ノ損失ナルノミナラズ、之ヲ受クルモノ又濫費ニ流レ易シ。是取ルベキノ方法ニ非ザルナリ。

世或ハ補助ノ弊ヲ言フモノアリ、然レドモ國利ヲ興シ民病ヲ救フノ要務ニシテ自然ニ發達スル能ハザルノ勢アルニ當リ捨テテ之ヲ顧ミズンバ豈ニ經世ノ要ヲ得ルモノト言フヲ得ンヤ、且補助ニ於テ弊害トスル所ハ一事業ニ偏シ一會社ニ私スルヲ以テナリ、信用組合ノ如キハ全國最多數ノ人民ノ利ヲ進メ、病ヲ救フニアリテ、之ヲ補助スルハ最モ公平ニ且ツ普偏ナルモノナリ。一事業一會社ノ保護ト同日ニシテ論ズベカラズ、況ンヤ其補助タル惠與ヲ以テセズシテ貸付ヲ以テスルニ於テヤ、今ヤ我邦國民貧富ノ懸隔未ダ甚ダシカラズシテ社會ノ軋轢未ダ大ナラザルヲ以テ社會政略ノ費用ヲ要セズ、又家族の自助ノ精神幸ニシテ社會ニ存スルヲ以テ救恤ニ費ス所多カラズト雖ドモ、將來中産以下人民ノ漸々産ヲ破リ業ヲ失フニ至ラバ社會政略費ト救恤費トニ於テ、國庫及自治區ノ負擔ヲ増加スルコト知ルベシ、故ニ今信用組合ノ設立ヲ以テ人民自助自治ノ精神ノ精神ヲ養成シテ社會政略費ト救恤費トノ増加ヲ將來ニ防止スルノ目的ト

シ、之ヲ消極的ニ觀察スルモ、實ニ之ヲ補助スルノ價值アリ、況ンヤ經濟上ニ於ケル積極的ノ目的ハ更ニ之ヨリ大ナル幾倍ナルニ於テヤ、全國一萬六千ノ市町村ニ貸付スルニ數百萬圓ノ補助金ヲ以テス、未ダ多額トスルニ足ラザルナリ。然レドモ貸付補助金ハ初ヨリ巨額ヲ要スルニ非ズ、蓋信用組合ノ普ク全國ニ設立スルニ至ルハ固ヨリ數多ノ年月ヲ期セザルベカラズ、且補助金ハ設立ノ初ニ當テ其全額ヲ貸付スルニ非ズシテ、漸次組合資本ノ積立高ニ應ジテ貸付スルガ故ニ組合法施行ノ初ニ當テバ甚ダ小額ニ止マルベシ。

今ノ時ニ當リ中産以下人民ノ經濟ヲ改良シテ、國家ノ元氣ヲ補育シ富力ヲ増殖シ地方自治ノ基礎ヲ鞏固ニシ、社會ノ軋轢ニ由テ生ズル禍害ヲ未萌ニ防止セントスルニハ信用組合ノ法ヲ置テ他ニ其途アルヲ知ラザルナリ。依テ試ニ信用組合法信用組合定款模式及補助金貸付法ノ案ヲ草シ添テ參考ニ備フ。希クハ一閱アランコトヲ。

信用組合法

第一章 組合ノ創立及組織

- 第一條 信用組合ハ組合員ニ營業資金ヲ貸付シ及貯金ノ機會ヲ與フルヲ以テ目的トス
- 第二條 信用組合員ノ組合ニ對スル責任ハ定款ノ定ムル所ニ依ル但其責任ハ持分ノ三倍ヲ超エ又ハ持分ヲ下ルコトヲ得ス
- 第三條 信用組合ハ有期又ハ無期トス有期組合ハ滿期ニ至リ本法ノ規定ニ依リ營業ヲ繼續スルコトヲ得
- 第四條 信用組合ハ一定ノ商號ヲ定メ其信用組合ト稱スヘシ
- 第五條 組合員ノ數ハ十名ヲ下ルベカラズ
- 第六條 組合ヲ創設セント欲スル者ハ同意者ノ數前條ノ定員ニ滿チタル後創業協議會ヲ開キ定款ヲ議定シ役員ヲ選任スベシ

第七條 定款ハ本法ノ規定ニ牴觸スルコトヲ得ズ

定款ニハ本法ニ規定スルモノノ外左ノ事項ヲ掲グルコトヲ要ス

第一、組合員ノ商號及營業所

第二、組合員ノ責任

第三、總會招集ノ手續

第四、組合ノ存立時期ヲ定メタルトキハ其時期

第五、組合員ヲ一定ノ區域内ニ住居スル者ニ限リタルトキハ其區域

第八條 組合長ハ定款、組合員名簿、役員ノ姓名住所ヲ記載シタル書面各二通及組合印鑑ヲ其地管轄區裁判所ニ差出シ登記ヲ受クベシ但組合員名簿ハ組合員ノ捺印ヲ要ス區裁判所ハ信用組合登記簿ヲ備ヘ組合ノ適法ニ成立シタルコト及其年月日ヲ登記スベシ

定款ノ改正、組合員名簿ノ加除、役員ノ更任其姓名住所ノ移動及組合印章ノ變更ハ本條第一項ノ例ニ依リ届出ヅベシ

第九條 區裁判所ハ組合ヨリ差出シタル定款、組合員名簿、役員選任届書ヲ適法ト認メタ

ルトキハ其一通ニ證明書ヲ添ヘ郡長ニ送付スベシ其定款ノ改正、組合員名簿ノ加除役員ノ更任及其姓名住所ノ移動ニ關シ届出ヲ受ケタルトキ亦同ジ

第十條 區裁判所ハ第八條ノ書類ヲ保存シ執務時間中ハ何人ニモ閱覽ヲ許スベシ

第十一條 登記以前ニ在テ爲シタル組合營業上ノ取引ハ無効トス

第十二條 組合支店ヲ設ケタルトキハ組合長ヨリ第八條ノ管轄區裁判所ニ届出デ登記ヲ受クベシ區裁判所ハ登記後ハ其旨ヲ郡長ニ通知スベシ

第十三條 區裁判所ハ組合設立ノ年月日定款ノ要略役員ノ姓名住所及支店ヲ設ケタルトキハ其旨ヲ三十日間裁判所及組合所在地ノ市町村揭示場ニ揭示スベシ

區裁判所ハ組合ヨリ定款ノ改正及役員ノ更任ニ關シ届出ヲ受ケタルトキハ前項ノ例ニ依リ之ヲ揭示スベシ

第十四條 區裁判所ノ裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第十五條 第一條ノ目的ヲ達スル爲メニ組合員ハ左ノ資金ヲ拂込ムベシ

第一、加入金

加入金ハ定款ニ於テ其金額ヲ定メ組合員加入ノ際之ヲ拂込ムモノトス

第二、持分

持分ハ定款ニ於テ其金額ヲ定メ右金額ニ達スルマデ組合員ヨリ毎月之ヲ拂込ムモノトス但毎月ノ拂込金額ハ定款ニ於テ其程度ヲ定ム

第十六條 持分ハ一組合員ニ付一口以上ヲ有スルコトヲ得ズ但組合員ノ責任持分高ニ止マルモノハ定款ニ於テ五口迄ヲ有セシムベキ規定ヲ設クルコトヲ得

前項ノ規定ニヨリ二口以上ヲ有セントスル者ハ順次毎口ノ拂込ヲ終リタル後ニ非レバ次ノ口ヲ有スルコトヲ得ズ

第十七條 信用組合ハ加入金ト營業純益金ノ一部トヲ以テ少クトモ全組合員ノ持分合計高ノ十分ノ一二達スル迄準備金ヲ積立ツベシ

準備金ノ積立ニ充ツベキ純益金ノ割合ハ定款ニ於テ之ヲ定ムベシ

第十八條 組合ノ計算期ハ六個月トシ定款ニ於テ其終始ノ月日ヲ定ム但組合ヲ設立シタル當初ノ計算期ニ限リ八個月以内ニ定ムルコトヲ得

第二章 組合及組合員ノ權利義務

第十九條 信用組合ハ法律ノ規定ニ依リ權利及義務ヲ有シ且ツ之ヲ行フ

第二十條 組合ト組合員トノ權利關係ハ定款ノ定ムル所ニ依ル

第二十一條 新ニ組合ニ加入セン事ヲ求メ組合長之ヲ認許シタルトキハ加入者ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ第八條第三項ノ手續ニ依リ裁判所ニ名簿記入ヲ請フベシ加入者ハ右記入ヲ經タル時ヨリ組合員タル資格ヲ有ス

第二十二條 組合營業上ノ損益ハ組合長ニ於テ毎計算期ノ後貸借對照表及損益割當表ヲ製シ總會認定ヲ經テ之ヲ組合員ニ割當ツベシ

右割當ハ組合ヲ設立シタル當初ノ計算期ニ於テハ組合員ヨリ拂込ミタル持分ノ割合ニ從ヒ第二期算期ヨリハ前期ニ於テ利益高ヲ記入シ又ハ損失高ヲ引去リタル持分現在高ノ割合ニ從フ又右利益高ハ持分全高ニ達スル迄之ヲ記入スルモノトス
利益割當ト持分拂込トニ依リ成立シタル持分現在高ガ持分ノ半額ニ達スル迄ハ前項ノ利益ヲ配當スルコトヲ得ズ右半額ニ達シタル後ハ定款ノ定ムル所ニ依リ利益ノ幾分ヲ配分スルコトヲ得但損失割當ニ依リ持分現在高ニ減少ヲ來シタルトキハ之ヲ補填スル迄配分ヲ停止スベシ

第二十三條 組合ハ組合員ノ退社セザル限リハ其持分ヲ拂戻スコトナシ組合ハ組合員ノ持分ヲ

貸金ノ抵當トシテ取ルコトヲ得ズ

第二十四條 組合ニ加入スル者ハ其加入前ニ成立シタル組合ノ債務ニ對シテ亦其責ヲ分擔ス

第二十五條 第十六條第一項但書ニ依リ一口以上ヲ有スル組合員ノ責任ハ其口數ニ應ジテ増加ス

第二十六條 第二條ノ責任額ヲ増減セントスルトキハ總會ニ於テ出席組合員四分ノ三以上ノ多數決ヲ要ス

第二十七條 第二條ノ責任額ヲ減少セントスルトキハ組合ハ豫メ其債權者ノ承諾ヲ經ルヲ要ス責任額ノ減少ハ新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ少クトモ三回以上之ヲ公告シタル後一箇年ヲ經ルニ非ンバ第三者ニ對スル從來ノ債務ニ關シテ其効ヲ有セズ

第二十八條 組合ハ組合員ノ持分現在高ニ付キ租稅其他ノ公課ヲ除キ他ノ債權ニ對シテ優先權ヲ有ス

第三章 役員及處務

第二十九條 組合ニ左ノ役員ヲ置キ總會ニ於テ組合員中ヨリ之ヲ選任ス

組合長 一人

會計役 一人

監査役 三人以上

組合長及會計役ハ有給職又ハ無給職トス

監査役ハ無給職トス但總會ノ決議ニ依リ手當ヲ給スルコトヲ得

組合役員ノ任期ハ定款ヲ以テ之ヲ定ムベシ但任期中ト雖ドモ總會ノ決議ニ依リ之ヲ解任スルコトヲ得

第二十條

組合長ハ組合ノ事務ニ付キ裁判上ト裁判外トヲ問ハズ外ニ對シテ組合ヲ代表ス

組合ノ名ヲ以テスル書類ハ其信用組合ト記シ組合長ノ姓名ヲ附記シ組合及組合長ノ印ヲ捺スベシ

第二十一條

組合長ハ組合ヲ代表スル權限ニ關シ定款又ハ總會ノ議決ニ依リ加ヘラレタル制限ヲ守ルベキ義務アリ

前項ノ制限ハ第三者ニ對シテ無効トス但第三者其制限アルコトヲ知リタルトキハ此限ニ在ラズ

第三十二條

組合長及會計役ハ組合ノ必要ナル帳簿ヲ備フルノ義務アリ

組合長ハ毎計算期終結ノ後六週日內ニ前期ノ貸借對照表組合員ノ出入表ヲ製シ組合事務所ニ揭示シ及新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ公告スベシ

第三十三條

組合長及會計役ハ疾病其他ノ事故ニ由リ職務ヲ執ル能ハザルトキハ互ニ代理スベシ

組合長及會計役ノ權限及義務ニ關スル法律及定款ノ規定ハ其代理人ニ就テモ亦効力ヲ有ス

第三十四條

監査役ニシテ組合長又ハ會計役ヲ兼ネ組合長又ハ會計役ニシテ監査役ヲ兼ヌルコトヲ得ズ

組合長及會計役互ニ其職務ヲ代理スル能ハザルトキハ監査役中一名ニ限り一時組合長又ハ會計役ヲ代理スルコトヲ得ルト雖其代理ヲ爲ス間ハ監査役ノ職務ヲ行フコトヲ得ズ

第三十五條

監査役ハ組合長及會計役ニ對シテ其職務ヲ監察シ必要ト認ムルトキハ報告ヲ要求シ自身ニ又ハ組合員ニ託シテ組合ノ帳簿及書類ヲ檢閲シ金庫ノ現在金有價證券及物品等ヲ檢査スルコトヲ得又決算書貸借對照表及損益割當表等ヲ檢査シ總會ニ報

告ヲ爲スベシ

監査役ハ組合ノ利害ニ於テ必要ト認ムルトキハ臨時總會ヲ招集スベシ
其他監査役ノ任務ハ定款ヲ以テ之ヲ定ム

第三十六條 監査役ハ必要ト認ムルトキハ臨時總會ヲ招集スル迄假ニ組合長及會計役ノ職務ヲ停止スルコトヲ得

第三十七條 組合長、會計役及監査役ハ其職務ヲ怠リタルガ爲メニ生ジタル損害ニ對シテ其事
件ノ性質ニ依リ單獨又ハ連帶ノ責ニ任ズ

第三十八條 總會ハ本法又ハ定款ニ於テ明示シタル場合ニ於テ之ヲ開クモノトス
總會ハ定款ニ於テ別ニ規定ヲ設ケザルトキハ全組合員ノ三分ノ一以上出席スルニ
非レバ之ヲ開クコトヲ得ズ

總會ハ通常組合長之ヲ招集ス

第三十九條 總員十分ヲ一以上ノ組合員ヨリ其目的及理由ヲ示シタル請求書ヲ以テ總會ノ招集
ヲ請求シタルトキハ組合長ハ之ヲ招集セザルベカラズ

第四十條 總會招集ノ目的ハ臨時至急ノ場合ヲ除クノ外招集ノ際豫メ之ヲ通告スベシ其他招

集及議決ノ順序ハ定款ノ定ムル所ニ依ル

第四十一條 總會ニハ代人ヲ以テ發言權ヲ行ハシムルコトヲ得ズ但不能力者、婦女、團體、會
社組合ハ此限ニ在ラズ

第四十二條 組合員ハ總會ニ於テ營業ノ方針、貸借對照表及損益割當表ヲ審查議決ス

貸借對照表ハ遅クトモ開會一週日前ニ組合事務所又ハ他ノ適當ナル場所ニ揭示ス
ルカ又ハ他ノ方法ニ依リ組合員ニ瞭知セシムベシ

組合員ハ總會ニ於テ各一個ノ發言權ヲ有ス第十六條ニ依リ二口以上ノ持分ヲ有ス
ル者亦同ジ

組合員ハ自己又ハ父母、兄弟、妻子ノ一身上ニ關スル事件ニ付テハ其議決ニ與カ
ルコトヲ得ズ

第四十三條 左ノ事件ハ總會ニ於テ豫メ之ヲ議定スルヲ要ス

- 一、組合ニ於テナシ得ベキ負債金高ノ限度及貯金預高ノ限度
- 二、組合員ニ貸與シ得ベキ金高ノ限度

第四十四條 總會ノ議決若シ法律又ハ定款ニ違背スルトキハ組合長又ハ組合員ハ議決ノ無効ヲ

出訴スルコトヲ得訴訟ノ提起ハ議決後三十日ノ不變期間ニ於テ之ヲ爲スベシ
訴訟ノ提起ハ組合ヲ被告トシ之ヲ爲スベシ又組合ハ組合長原告タラザルトキハ組
合長然ラザレバ監査役ヲ以テ其代理人ト爲スベシ

本條ノ訴訟ハ組合所在地ノ管轄地方裁判所ニ專屬ス

第四十五條 總會ノ議決ニ對シ理由ナキ異議ヲ申立テタル爲メ組合ニ被ラシメタル損害ニ就テ
ハ起訴人連帶責任ヲ負フ

第四章 組合員ノ退社及除名

第四十六條 組合員ハ預告シテ退社スルコトヲ得但退社ハ各計算期終結ノ時ニ非レバ之ヲ爲ス
コトヲ得ズ

豫告期日ハ定款ニ於テ之ヲ定ムト雖三個月ヨリ短キコトヲ得ズ

第四十七條 公權ヲ失ヒタル組合員ハ計算期終結ノ時ニ於テ之ヲ除名スルコトヲ得
其他除名ノ場合ハ定款ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ得

第四十八條 組合ト退社人及ビ除名人トノ差引計算ハ除名當時ノ損益割當表ニ依リ之ヲ爲スモ
ノトス

退社人及ビ除名人ハ除籍後六週間内ニ其持分現在高ノ拂戻ヲ受クト雖準備金及其
他組合財産ニ對シテ要求ヲ爲スコトヲ得ズ若シ除籍以前ニ成立セル組合ノ負債ア
リテ準備金及全組合員ノ持分現在高其他組合ノ財産ヲ合セテ仍之ヲ償フニ足ラザ
ルトキハ退社人及除名人ハ其不足高ニ對スル分擔金ヲ拂込マザルベカラズ但分擔
金ハ組合員ノ持分口數ニ割當ツルモノトス

第四十九條 持分現在高取戻ノ權利ハ二個年ヲ以テ期滿失効ノ期トス

第五十條 組合員ハ組合長ノ認許ヲ得タルトキハ書面上ノ合意ニ依リ其持分ヲ他人ニ讓渡シ
組合ト差引計算ヲ爲スコトナクシテ退社スルコトヲ得

前項ノ讓渡ハ組合員名簿ニ記入ノ時ヲ以テ第三者ニ對シテ其効ヲ有ス

第五十一條 組合員死亡シタルトキハ其死亡シタル計算期ノ終末ヲ以テ退社シタル者ト做シ其
間ハ死亡者ノ相續人ヲ以テ組合員ニ充ツベシ

相續人未定又ハ不分明ナル場合ニ於テ法律上代理人アラザルトキハ組合長ハ死亡
者ノ最後ニ普通裁判籍ヲ有シタル區裁判所ニ特別代理人ノ任命ヲ申請スベシ
裁判所ハ右申請ニ對スル裁判ヲ申請人ニ送達シ又申請ヲ認許シタルトキハ其任ゼ

ラレタル特別代理人ニモ亦之ヲ送達スベシ

申請ヲ却下セル裁判所ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第五十二條 特別代理人ハ組合ニ對シテ死亡者ノ遺産ニ屬スル權利及義務ヲ行フ

第五章 組合ノ監督

第五十三條 信用組合ノ業務ハ第一次ニ於テ郡長之ヲ監督シ第二次ニ於テ府縣知事之ヲ監督シ

第三次ニ於テ内務大臣之ヲ監督ス

第五十四條 貸借對照表及損益割當表ハ總會ノ議定ヲ經タル後一週日以内ニ組合長ヨリ郡長ニ

差出スベシ

第五十五條 第四十三條第一ニ掲ゲタル事項ニ關スル總會ノ議決ハ郡長ノ認可ヲ經ルコトヲ要ス

第五十六條 郡長ハ少クトモ毎計算期ニ一回組合ノ帳簿書類ヲ検査スベシ又必要ト認ムルトキハ組合ノ財産ヲ検査スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ組合長、會計役及監查役ハ之ニ立會フ可シ

第五十七條 郡長ニ於テ第六十條第六十一條第六十二條ノ規定ニ照シ組合ヲ解散スルノ必要ア

リト認ムルトキハ意見ヲ具シテ府縣知事ニ上申スベシ

此場合ニ於テ郡長ハ假ニ組合ノ營業ヲ停止シ府縣知事ノ指揮ヲ請フコトヲ得

第五十八條 内務大臣及府縣知事ハ臨時吏員ヲ派遣シテ組合ノ業務ヲ監查セシムルコトアルベシ

此場合ニ於テ組合長ハ派遣吏員ノ要求ニ應ジテ帳簿、書證、有價證券、物品其他組合ノ財産ヲ其閱覽點檢ニ供スベシ

前項ノ場合ニ於テ組合長、會計役及監查役ハ之ニ立會フベシ

第六章 解散及清算

第五十九條 組合ハ總會ノ議決ヲ以テ之ヲ解散スルコトヲ得

但議決ハ出席組合員四分ノ三ノ多數ヲ要ス

定款中組合ノ存立時期ヲ規定スルモノハ其時期ノ經過ト共ニ組合ヲ解散スルモノトス

第六十條 組合仕拂ヲ停止シ又ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケタルトキハ解散スベシ若シ解散セザルトキハ府縣知事ハ職權ヲ以テ解散ヲ命ズベシ

第六十一條 組合員ノ數第五條ノ定數以下ニ減ジタルトキハ府縣知事ヲ職權ヲ以テ解散ヲ命ズ

ベシ

第六十二條

組合若シ法律ニ違反シ爲メニ公共ノ安寧秩序ヲ危害シ又ハ本法第一條ニ掲グル目的ニ非ル業務ヲ營ムトキハ府縣知事ハ内務大臣ノ認可ヲ經テ解散ヲ命ズルコトヲ得此場合ニ於テ組合ハ之ガ爲メニ生ズル損害ニ付キ賠償ヲ要求スルコトヲ得ズ

第六十三條

第六十條、第六十一條、第六十二條ノ場合ニ於テ解散ノ命ニ不服ナルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第六十四條

組合ヲ解散スルトキハ解散理由書ニ清算人ノ姓名住所ヲ記載シタル書面ヲ添へ第八條ノ管轄區裁判所ニ届出デ登記ヲ受クベシ

區裁判所ハ登記後其旨ヲ郡長ニ通知シ及第十三條規定ニ依リ揭示スベシ

組合解散スト雖組合ト組合員トノ權利關係ハ清算ヲ終ル迄ハ變更ヲ生ゼザルモノトス

第六十五條

組合解散スルトキハ清算ノ爲メ總會ノ決議ニ依リ清算人ヲ定ムベシ若シ總會ニ於テ清算人ヲ指定セザルトキハ組合長及會計役ヲ以テ清算人トス
清算人ハ少クトモ一名ヲ下ルベカラズ

郡長ハ監査役又ハ組合員十分ノ一以上ノ請求ニ依リ又ハ職權ヲ以テ清算人ヲ解任シ更ニ清算人ヲ任命スルコトヲ得

第六十六條

清算人ハ解役前既ニ着手セル組合事務ヲ完結シ負債ヲ返辨シ貸金ヲ取立テ及組合ノ財産ヲ賣却スベシ

清算人ハ清算ニ關シテ組合ヲ代表ス

第六十七條

清算人ハ清算事務ニ關シテ組合長及會計役ノ權利及義務ヲ有シ組合長ニ等シク監査役ノ監察ヲ受ク

第六十八條

清算人ハ其選定ノ日ヨリ六十日以内ニ組合帳簿ニ依リテ其財産ノ現況ヲ取調べ新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ三回以上公告シ債務者ニ其債務ノ辨濟期限ニ至リタル時直チニ之ヲ辨濟スベク又債權者ニハ或ル期間ニ其債權ヲ申出ツベキ日ヲ催告スルコトヲ要ス但其期間ハ六十日ヲ下ルコトヲ得ズ

其公告ニハ債權者期間ニ申出ヲ爲サザルトキハ其債權ヲ清算ヨリ除斥セラル、旨ヲ附記ス但清算人ハ期間ニ申出デザル債權者ト雖ドモ其知レタル者ヲ清算ヨリ除斥スルコトヲ得ズ

第六十九條 清算ハ其期間滿了前ニ於テハ債權者ニ支拂ヲ爲シ始ムルコトヲ得ズ

第七十條 期間後ニ申出デタル債權者ハ組合ノ債務ヲ濟了シタル後未ダ組合員ニ分配セザル組合財産ノミニ對シテ其辨償ノ請求ヲ爲スコトヲ得

第七十一條 期間後一年ヲ過ギ仍債權者ヨリ要求ナキトキハ財産ヲ組合員ニ分配ス右期限迄ニ要求セザル債權者ハ其債權ヲ失フ

第七十二條 財産分配ニ關スル規則ハ定款ノ定ムル所ニ依ル

第七十二條 本法ノ規定ニ違反シタル爲メ生ジタル損害ニ付キ清算人ハ組合及ビ債權者ニ對シテ其事件ノ性質ニ依リ單獨又ハ連帶ノ責ニ任ズ其情ヲ知リテ之ヲ防止セザル監査役モ亦同ジ

第七十三條 清算終リタル後組合ノ帳簿其他ノ書類ハ清算人ヨリ第八條ニ定メタル區裁判所ニ差出スベシ區裁判所ハ十年間之ヲ保存スベシ

第七章 罰則

第七十四條 故意ヲ以テ組合ノ損害トナル所爲ヲ爲シタル組合長會計役又ハ清算人ハ一月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第七十五條 前ノ組合役員又ハ清算人ハ左ノ場合ニ於テ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ情重キ者ハ罰金ニ併セ二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第一、官廳又ハ總會ニ對シ書面若クハ口頭ヲ以テ組合財産又ハ組合業務ノ實況ニ付キ故意ニ不實ノ陳述ヲ爲シ又ハ不正ノ意ヲ以テ其實況ヲ隱蔽シタルトキ

第二、公告又ハ揭示ノ中ニ詐僞ノ陳述ヲ爲シ若クハ事實ヲ隱蔽シタルトキ

第七十六條 三個月以上監査役ヲ置カズ又ハ議決ニ必要ナル監査役ノ數ヲ充タサル組合ノ役員ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第七十七條 第一條ノ目的以外ノ所爲ヲ爲シ又ハ總會ニ於テ集會及政社法ノ範圍ニ於テ爲スベキ事項ニ關シ建議及議決ヲ許シ又ハ之ヲ防止セザル組合ノ役員ハ一月以上一年以上以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第七十八條 第八條第一項及第三項、第十二條、第二十一條、第三十二條、第三十八條第一項、第三十九條、第四十二條第二項、第五十四條、第五十五條、第六十四條第一項、第六十八條第一項及第六十九條ノ規定ヲ遵守セザル組合ノ役員又ハ清算人ハ五十圓以下ノ過料ニ處ス

第五十六條第一項及第五十八條第一項ノ場合ニ於テ郡長又ハ派遣吏員ノ要求ヲ拒ミタル場合役員又ハ清算人ハ前項例ニ依リ處分ス

第八章 附 則

第七十九條 本法ノ施行ニ就キ登記ニ關スル細則ハ司法大臣其他ノ事項ニ關スル細則ハ内務大臣之ヲ定ム

第八十條 本法ハ明治二十五年六月一日ヨリ施行ス

信用組合定款模式

凡 例

一、定款ハ法律ニ牴觸セザル限りハ組合ニ於テ自由ニ之ヲ定ムルコトヲ得ト雖ドモ我邦ニ於テ未曾テ此ノ類ノ組織アラズ從テ經驗ニ乏シキヲ以テ獨國ニ行ハル、信用組合ノ定款ヲ參酌シ模式ヲ定メタリ

一、本案中括弧ヲ加ヘタルモノハ本文ノ變例ヲ示スモノナリ

擊町村信用組合ノ役員及組合員ハ年月日某所ニ於テ總會ヲ開キ左ノ定款ヲ議定ス

定 款

第一條 組合ノ目的、存立時期、商號及事務所

信用組合ハ信用組合法及本定款ニ依リ組合員ニ其營業上要スル所ノ資本ヲ貸付シ及貯金ノ機

會ヲ與フルヲ以テ目的トス

組合ハ別ニ存立時期ヲ定メズ

組合商號ヲ某村信用組合ト名ケ其所ニ組合事務所ヲ置ク

第二條 組合ノ資本

組合ノ資本ヲ左ノ三種トス

第一 準備金

第二 組合員ヨリ毎月拂込ムベキ特分

第三 預金及貯金又負債ヲ募集シタルトキハ其金額

第三條 組合ノ機關

組合ニ左ノ機關ヲ置ク

第一 總會

第二 監査役

第三 組合長及會計役

第四條 總會

組合長、會計役及監査役ノ職權ニ屬セザル總テノ組合事務ハ總會ニ於テ之ヲ管掌ス總會ハ組合長又ハ監査役ノ上席者之ヲ招集シ其招集狀ニハ會議ノ事項ヲ略記シ少クトモ三日前ニ之ヲ送達スベシ議決ハ可否ノ多數ニ依リ可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル若シ多數分明ナラザルトキハ點呼ヲ行フコトヲ得

筆記投票ハ選舉及組合員除名ノ場合ニ限り之ヲ行フ

組合ヲ解散スルニハ全組合員四分ノ三ノ多數決ヲ要ス。總會ハ選舉計算検査及損益配當ノ爲メ少クモ毎計算期ニ一回之ヲ招集スルモノトス

其他總會ハ全組合員十分ノ一ニ當ル組合員ヨリ其目的ヲ掲ゲテ請求スルトキハ之ヲ開カザルベカラズ

總會ノ決議ハ之ヲ議事録ニ記録シ議長及出席ノ役員並ニ書記之ニ署名ス

第五條 監査役

監査役ハ三名(又ハ若干名)トシ總會ニ於テ匿名投票ニ依リ最多數ヲ得タル者ヲ以テ之ニ任ズ若シ同數者アルトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ決ス監査役ノ任期ハ三年トシ毎年三分ノ一ヅツ退任ス退任ノ順序ハ豫メ抽籤シテ之ヲ定ム

監査役辭任シ又ハ死亡シタルトキハ前選舉ニ於テ次數ヲ得タル者ヲ以テ其殘餘ノ任期間之ニ補任ス

監査役ハ會議ニ依リ其意見ヲ決ス會議ハ少クトモ半數以上出席スルニ非ザレバ決議ノ權ナシ決議ハ多數ニ依リ可否同數ナルトキハ上席員ノ決スル所ニ依ル上席員ハ監査役中ヨリ之ヲ互選ス

監査役ハ左ノ事務ヲ掌ル

第一 組合長及會計役ノ事務執行ニ對スル監察每期計算書ノ検査帳簿書類及金庫ノ臨時検査帳簿書類及金庫ノ臨時検査ハ

帳簿書類及金庫ノ臨時ハ毎計算期少クトモ一回之ヲ行フモノトス

第二 組合ノ代表者トシテ組合役員トノ條約ノ締結

第三 組合役員ニ對スル臨時停職ノ執行

第六條 組合長及會計役

組合長及會計役ハ總會ニ於テ匿名投票ニ依リ最多數ヲ得タル者ヲ以テ之ニ任ス若シ同數者アルトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ決ス其任期ハ三年トシ期滿ツレバ再選スルコトヲ得

第七條 組合長ノ權限

組合長ハ外ニ向テ組合ヲ代表シ又總會及監査役ノ決議ヲ執行ス總テ組合ノ名ヲ以テスル書類ニハ其信用組ト記シ組合長ノ姓名ヲ附記シ組合印章及組合長ノ印章ヲ捺スベシ

組合長ハ總テ組合ノ事務ヲ指揮シ會計役及書記ヲ監督ス

組合長ハ毎ヶ月ニ金庫ヲ検査シ其結果ヲ監査役ニ報告スベシ

又必要ト認ムルトキハ臨時検査ヲ爲スコトヲ得

組合長ハ若干圓(例ヘバ二十圓)迄ノ金額ニ限り其職權ヲ以テ組合員ニ貸付スルコトヲ得

第八條 會計役ノ職務

會計役ハ金庫ヲ主管シ收入支出ヲ成規ノ帳簿ニ記入シ毎月小勘定ヲ爲シ毎計算期ノ末ニ至リ總勘定ヲ爲ス

收入證書及支出證書ニハ組合長及會計役ノ署名ヲ具フルヲ要ス

會計役ノ身元保證金ハ組合長監査役ト協議シテ之ヲ定メ總會ノ認可ヲ求ムベシ

第九條 書記及俸給手當

組合長ハ組合ノ事務ヲ補助セシムル爲メ二名以下ノ書記ヲ雇入ルルコトヲ得

組合長及會計役ノ俸給ハ監査役之ヲ定メ監査役ノ手當ハ組合長及會計役之ヲ定メ共ニ總會ノ許可ヲ受クベシ

第十條 組合役員共同事務

左ニ掲グル事項ニ付キ組合長、會計役及監査役ハ共同シテ會議ヲ開クベシ但少クトモ役員ノ中一名監査役ノ中半數以上ノ出席ヲ要ス

第一、新組合員ノ加入

第二、若干圓(例ヘバ二十圓)以上ノ貸付

第三、組合債ノ募集

第四、信用支拂約束

第五、一時不用ナル現金ノ利用方

議事ハ多數ニ依テ決ス可同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル議長ハ組合長ヲ以テ之ニ充テ組合長不在ナルトキハ監査役ノ上席者ヲ以テ之ニ充ツ

左ニ掲グル事項ニ付キ組合長ハ監査役ノ認可ヲ受クルヲ要ス

第一、家屋借用ノ契約其他契約ノ締結並ニ物品ノ買入賣拂

第二、書記其他雇員ノ任命及給俸

第十一條 組合員

滿二十歳ニ達シ一定ノ住所ヲ有シ治産ノ能力アル者ハ組合員タルコトヲ得

(本町村ノ住民ニシテ滿二十歳ニ達シ治産ノ能力アル者ハ組合員タルコトヲ得但他町村ノ住民ト雖總會ノ決議ニ依リ特ニ加入ヲ許シタル者ハ組合員タルコトヲ得)

組合員タラント欲スル者ハ口頭又ハ書面ヲ以テ組合長ニ届出テ其認許ヲ求ムベシ

組合長ハ組合員名簿ヲ備ヘ加入者ヲシテ之ニ署名捺印セシム組合長ハ理由ナクシテ組合員ノ加入ヲ拒ムコトヲ得ズ

加入ヲ拒絶セラレタル者ハ總會ニ其當否ノ決議ヲ請求スルコトヲ得

第十二條 組合員ノ權利及義務

組合員ハ左ノ權利ヲ有ス

第一 總會ニ於ケル議定權

第二 定款ノ定ム所ニ依リ貸付ヲ受クルノ權

第三 利益配當ヲ受ケル權

信用組設定款模式

組合員ハ左ノ義務ヲ有ス

第一、持分ノ金高(又ハ幾倍ニ當ル金額)迄ハ組合ニ對シテ責任ヲ負フ

第二、加入金ノ拂込

第三、持分ノ拂込

第十三條 拂込 金

組合員ハ加入金(例ヘバ二十五錢)及定款料(例ヘバ五錢)ヲ拂フベシ

持分ハ(例ヘバ百圓)トシ右金額ニ達スル迄ハ毎月少クトモ(例ヘバ五錢)ノ拂込ムベシ

各組合員ノ拂込金ハ一計算期中ニ於テ其合計額若干圓(例ヘバ十五圓)ヲ超過スルコトヲ得ズ

拂込金ノ合計高持分金高ニ達セザル間ハ利益配當金ハ總テ持分ニ繰入ルルモノトス

持分高ヲ超過シタル剩餘ノ拂込金及利息ハ預金トシテ取り扱フモノトス

持分ハ組合員タルノ間ハ拂戻サザルモノトス

持分ハ一組合員ニ付キ一口以上ヲ所有スルコトヲ得ズ

第十四條 組合員資格ノ消滅

組合員ノ資格ハ左ノ場合ニ於テ消滅ス

第一、任意ノ退社

組合員退社セント欲スルトキハ各計算期ノ三ヶ月前ニ於テ書面ヲ以テ豫メ其旨ヲ組合長ニ届出ヅベシ

第二、死 亡

死亡シタル組合員ハ其計算期ノ終末ニ於テ退社シタルモノト看做シ其間ハ死亡者ノ相續人ヲ以テ組合員ニ充ツ

第三、除 名

除名ハ組合員公權ヲ失シタルトキ又ハ三ヶ月間成規ノ拂込金ヲ怠リタルトキ又ハ組合ヨリ貸付金返還ニ關シ出訴セラレタルトキニ於テ總會ノ決議ヲ經テ組合長之ヲ執行ス

除名人ハ其計算期ノ利益配當ヲ受クルコトヲ得ズ

退社人死亡人及除名人ノ持分現在高ニ對スル差引計算ハ計算期終末ヨリ一ヶ月以内ニ之ヲ行フモノトス

退社シ又ハ除名セラレタル組合員又ハ死亡シタル組合員ノ相續人ハ其除名ノ當日迄ニ起リタル組合ノ債務ニ對シテ責任ヲ負フ

退社人死亡人及除名人ニ對スル差引計算ハ信用組合法第五十條ニ依リ其持分ヲ他人ニ讓渡ス
トキハ双方連署シテ其旨ヲ速カニ組合長ニ届出テ認許ヲ求ムベシ

第十五條 貸付

左ノ要件ヲ具フル組合員ハ貸付ヲ要求スルコトヲ得

第一、組合加入後少クトモ既ニ一回以上持分ノ拂込ヲ爲シタルコト

第二、前ニ借受ケタル貸付金ハ既ニ之ヲ返還シタルコト又借受金ニ付キ證人ニ損害ヲ被ラ

シメタルコト無キコト

各組合員ハ其持分現在高迄ハ貸付金ヲ要求スルコトヲ得右現在高ニ超過スル金額ハ組合長及
監査役ノ認定ニ依リ(又ハ信用程度ニ依リ)擔保ノ種類ヲ定メ之ヲ貸付スルコトヲ得

(信用程度表ハ組合長監査役及總會ニ於テ三箇年ノ任期ヲ以テ選舉シタル信用評定委員協議シ
テ之ヲ調製ス

信用程度表ハ計算期ノ初ニ於テ之ヲ調製シニ計算期毎ニ之ヲ改正ス其改正期限内ニ生ズル信
用ノ變更ハ組合長監査役協議シテ假ニ之ヲ定ム)

貸付金ノ要求ヲ拒絶セラレタル組合員ハ總會ニ其當否ノ決議ヲ請求スルコトヲ得

貸付期限ハ通常若干圓(例ヘバ三ヶ月)トシ場合ニ依リ相當ノ延期ヲ與フルコトヲ得但此ノ
際貸付金ノ一割ダケヲ返還セシム

第十六條 貸付金利息

貸付金ノ利息ハ一ヶ年何銖(例ヘバ六銖)ノ割合トシ外ニ手数料トシテ貸付金ノ何分(例ヘ
バ五厘)ヲ加ヘ貸付金ヲ拂渡ス時ニ於テ之ヲ引去ルモノトス其延期ヲ許可スルトキニ於テ亦タ
同ジ拂戻期限ヲ過ギ延期ヲ請求セザル者ハ規定ノ利息ノ外一圓ニ付キ一日若干ノ割合ヲ以テ延
滞利子ヲ拂ハシム

第十七條 準備金

營業上生ズベキ損失ヲ償フ爲ニ準備金ヲ設置ス準備金ハ組合員ノ加入金及總會ノ決議ニ依リ
繰入ルベキ純益金ノ一部ヨリ成立シ漸次全組合員ノ持分總高ノ一割ニ達スル迄之ヲ積立ツルモ
ノトス組合ノ負債ヲ償却スル爲メニ資金ニ不足ヲ生ジタルトキハ先ヅ準備金ヲ以テ之ヲ償ヒ仍
ホ不足ナルトキハ未拂持分ヲ取立テ之ガ償却ニ充ツベシ

退社人死亡者相續人及除名人ハ準備金ノ割戻ヲ請求スルノ權ナシ

第十八條 純益金

信用組法定款模式

純益金ハ準備金ノ額第十七條ノ金額ニ達セザル間ハ少クトモ其百分ノ五ヲ之ニ繰入ルベシ
準備繰入金ヲ引去リタル殘餘ノ純益金ハ持分現在高ニ應ジテ割當ツベシ割當ハ持分ノ規定高
ニ滿ツル迄之ヲ爲スモノトス

前項利益ノ割當ハ前計算期終末ニ於ケル持分現在高ニ依リ計算ス

前計算期中ニ組合員ヨリ拂込ミタル金高ハ次ノ計算ノ終末ニ至リ配當元金ニ加算ス

第十九條 他組合トノ連絡

組合ハ他ノ組合ト取引上連絡スルコトヲ得連絡ニ關スル契約ハ組合長會計役及監事役協議シ
テ之ヲ決ス

第二十條 委託金

組合員ハ勿論組合員ニアラザルモ總會ノ決議ニ於テ之ヲ拒絕セザル限ハ貯金ヲ委託シ及預ケ
金ヲ爲スコトヲ得利子ハ拂込ノ翌月ヨリ計算シ拂戻前月マデ之ヲ付シ拂込及拂戻ノ月分ハ之ヲ
加算セズ

利子ハ毎計算期ノ初日ニ合算シテ元金ニ加フ

金庫ノ現金高若シ即時ニ委託金ヲ拂戻スニ不足ナルトキハ委託者ハ會計役ノ要求ニ應ジテ左

ノ日割ニ從ヒ拂戻延期ヲ承諾セザルベカラズ

第一 三十圓以下 八日以内

第二 三十圓以上六十圓以下 二週日以内

第三 六十圓以上三百圓以下 三週日以内

以上百圓ヲ増ス毎二十四日ヲ加算ス

計算規則

第二十一條

計算期ハ何月ヨリ何月迄トシ(例ヘバ一月一日六月三十日迄ヲ第一期トシ七月一日ヨリ十二
月三十一日迄ヲ第二期トシ)每期ノ終帳簿ヲ閉テ勘定ヲ爲スベシ

監査役ハ組合長及會計役立會ニテ現金負債證書及有價證券ヲ検査ス

第二十二條

會計役ハ計算期ノ終末ヨリ四週日以内ニ勘定書ヲ完結シ組合長ノ連署ヲ以テ監査役ニ廻付ス
ベシ

監査役ハ勘定書ノ検査ヲ爲シ總會ニ報告スベシ

勘定書ノ書式ハ監査役之ヲ定ム

第二十三條

會計役ハ左ノ方式ニ依リ貸借對照表ヲ作ルベシ

第一貸方

甲、動産及不動産ノ價額

乙、現金

丙、貸金其他受取ルベキ金高若シ其高不明ナルトキハ推定價額

丁、公債證書但現計算期初週日ノ平均相場ニ依ル

戊、爲替所有高

己、計算期終未迄ノ貸金利子及他ノ銀行等へ預金アレバ其利子

第二、借方

甲、負債

乙、準備金

丙、持分

丁、前拂トナリタル計算期後ノ貸金利子

右方式ニヨリ計算シタル殘金高ヲ以テ純益トス

貸借對照表ハ監査役ニ於テ帳簿及證書ニ照シテ之ヲ検査スベシ

第二十四條 組合ノ解散及財産ノ分配

組合ヲ解散スルトキハ信用組合法ノ規定ニ依ル

組合ヲ解散スルトキハ清算人ハ即時ニ清算貸借對照表ヲ作ルベシ

清算完結シタル後清算貸借對照表ニ依リ組合ノ所有ニ歸スベキ全財産高ヲ各組合員ノ持分現在高ニ應ジテ分配スベシ又各組合員ノ持分現在高ニ對シ最終ノ貸借對照表ト清算貸借對照表トノ間ノ時日ニ於テ生ジタル利益及損失ヲ割當ツルニハ右ノ時日間ニ於ケル拂込金ハ之ヲ持分現在高(割當元金)ニ加算スベカラズ但右ノ時日間ニ生ジタル利益ハ各組合員ノ持分高ニ達スル迄ハ之ヲ加算スルモノトス

前項持分高ヲ超過スル利益金ハ各組合員平等ニ分配スベシ

第二十五條 組合ノ公告

組合ノ公告ハ組合長及監査役ノ協議ヲ以テ其手續ヲ定ムベシ(例へバ豫メ定メタル新聞ニ掲

載シ並ニ組合事務所ニ揭示スベシ

第二十六條 組合ノ爭議

此定款ノ解釋及適用ニ關シ組合員ノ權利及義務上ニ於テ爭議ヲ生ジタルトキハ其信用組合法ニ明文アルモノノ外ハ總會ノ判定スル所ニ依ル

第二十七條

何年何月日何號信用組合法及何年何月日何號內務省々令及司法省々令ニ基キ其制定シタル以上ノ定款ハ本日總會ノ議決ヲ以テ確定シ組合役員及組合員ハ之ヲ遵守スルノ責任ヲ有ス

組合長 署 名 捺 印

會計役 同 同

年月日

監查役 同 同

組合員 同 同

信用組合補助金貸付法

第一條

國庫ハ信用組合ヲ獎勵スルガ爲ニ左ノ割合ニ依リ組合ノ數ヲ定メ補助金ヲ貸付ス

- 一、人口二萬未滿ノ市及町村ニ在テハ各組合一個
- 二、人口二萬以上四萬未滿ノ市ニ在テハ組合二個
- 三、人口二萬以上十萬以下ノ市ニ在テハ人口二萬ヲ加フル毎ニ組合一個ヲ増ス
- 四、人口十萬以上二十萬以下ノ市ニ在テハ人口三萬ヲ加フル毎ニ組合一個ヲ増ス
- 五、人口二十萬以上ノ市ニ在テ人口ハ五萬ヲ加フル毎ニ組合一個ヲ増ス

第二條

補助金ハ一組合ニ付キ二百圓ヲ限リ組合員數五十名以上總持分拂込高二十五圓以上ニ達シタルモノニ之ヲ貸付ス補助金ハ初年ニ於テ五十圓ヲ貸付シ次年ヨリ其一個年中ニ於テ拂込ミタル總持分高ト同額ヲ貸付シ定規ノ貸付高ニ充ルヲ以テ度トス

第三條

組合員ノ數第二條ノ定員以下ニ減ジ一計算期ヲ過ギ仍其定員ニ充タザルトキハ内務大臣ハ補助金ノ貸付ヲ停止スベシ

又内務大臣ハ前項ノ場合ニ於テ必要ト認ムルトキハ既ニ貸付シタル補助金ヲ返納セシムルコトヲ得

第四條

補助金ヲ請求セントスル組合ハ請求書ニ定款ヲ添ヘ府縣知事ヲ經テ内務大臣ニ申出ヅベシ
内務大臣ハ定款ヲ認定シ必要ト認ムルトキハ其條項ノ改正ヲ命ズルコトヲ得

第五條

補助金ニハ利子ヲ付セズ

第六條

補助金ハ貸付ノ年ヨリ十個年間之ヲ据置キ十一個年目ヨリ一個年ニ二十圓ノ割合ヲ以テ十個年間ニ之ヲ返納セシム

第七條

本法施行ニ關スル細則ハ内務大臣大藏大臣協議シテ之ヲ定ム

說明

一、信用組合ハ其性質主トシテ私法上ノ契約ニ成ルモノナルヲ以テ一般ニ其區域ヲ制限スレバ穩當ナラズ是レ信用組合法ニ於テ更ニ區域ヲ制限セザル所以ナリ然レドモ政府ノ之ニ補助金ヲ貸付スルニ當テハ一ハ將來全國ニ興立スベキ無數ノ組合ニ向テ盡ク之ニ補助金ヲ貸付スルヲ得ベカラザルト一ハ一定ノ豫算ヲ立テ國庫ノ支出額ヲ算定スルノ必要アルトニ依リ豫メ補助ヲ爲スベキ組合ノ數ヲ定メザルベカラズ是レ本法ノ制限ヲ設ケタル所以ナリ

一、又市ト町村ノ間ニ補助ヲ爲スベキ組合數ノ割合ヲ異ニシタレバ市ハ戸口相接シ區域逼近スルヲ以テ町村ニ比シテ組合ノ數多キヲ要セズ是レ其人口ノ數ヲ陪蕪シタル所以ナリ又市ノ間ニ區別ヲ設ケタル所以ハ亦同上ノ理由ニ出テ大市ニ在テハ小市ニ比シテ組合ノ數少キモ敢テ便宜ヲ缺カサレバナリ

一、現時町村ノ一萬五千六百三十七ニシテ人口二萬以上ノ都市ハ五十七アリ依テ第一條ノ割合ニ基キ組合ノ數ヲ算スレバ一萬五千八百三十五ナリ一組合ニ付キ補助金二百圓ヲ貸付スルモノトスレバ三百十六萬七千圓ヲ國庫ヨリ支出スベキ割合トナルナリ

一、獨逸ニ於テ信用組合ヲ創設シタル以來今ニ至テ凡ソ三十年ニ近シ此ノ間ニ於テ設立シタル組合ノ數二千二百個ニ過ギズ然レドモ我邦ノ町村ハ獨逸ニ比シテ區域狹少ナルト且補助金ノ貸付アルニ依テ設立ヲ便易ナラシムルガ故ニ從テ組合ノ數獨逸ニ比シテ必ラズ多カラザルヲ得ザルベシ是レ前項ノ組合數ヲ豫定シタル所以ナリ

日本流通紙幣論

伊藤 巳代 治譯

大藏卿ノ最後ノ報告ニ依レバ、流通紙幣ノ總額ハ一億〇八百六十八萬三千二百〇三圓ヲ以テ算フ。而シテ此ノ總額ノ幾分ハ準備金中ニ合算スル事ヲ得ベシト雖モ、亦現ニ流通ノ金額ハ大約一億ニ下ラザルベシ。之ニ政府ノ公債證書ニ基キテ發行シ、殆ド五千萬ト概算スル諸銀行手形ヲ加算スルトキハ、則流通紙幣ノ總額ハ殆ド一億五千萬ニ達スルモノト知ルベシ。

抑モ一億五千萬ノ額タル既ニ日本ノ如ク開明ノ域ニ進ミタルノ國ニ於テ、其人口三千五百萬ニ比スルトキハ更ニ巨大ナリト謂フベカラズ。苟モ此ノ金額ヲシテ正貨ノ準備ニ根據シ、其所有主ノ請求ニ應ズベキ償還ノ保擔アラシメバ、則紙幣ノ簡便ナル毫モ價格低落ノ虞ナカルベキナリ。或ハ之ヲシテ合衆國ノ紙幣ニ於ケル如ク、洪大無窮ノ全國ノ財源ニ根據スル所アラメバ、則曾テ該國ニ於ケルガ如ク、一時ノ情勢ヨリシテ紙幣ノ低落ヲ來ス事アリト雖モ、亦自ラ挽回ノ道立ズンバアラズ。然ルニ不幸ニモ、日本ニ於テハ一モ此ノ如キ根據ノ現ニ存スル事ナ

シ、正貨ハ國庫及ビ關國人民ノ貯蓄トヲ論ゼズ、上下共ニ乏絀ニシテ假令ヒ大藏卿ノ意見何等前途ニ望ム所アルニ拘ラズ、今ヨリ遽カニ其増加セシ事蓋シ期スベカラザルノ事タリ。如何トナレバ政府ノ歳入ニ至テハ殆ド蕃殖増加ノ道ナキニ、其歳費ハ滔々増嵩シテ出入相償ハズ、而シテ通幣ノ價格日々ニ低落スルノ時ニ當テ、其歳費ノ額ヲ減少セン事ノ困難ナルハ、猶人民既ニ交換ノ約束ナキ紙幣ノ弊害ニ堪ザラントスルノ機ニ臨ンデ之ニ増稅ヲ課セントスルニ異ナル事ナケレバナリ。

其他ノ財源ヲ顧ルニ、獨リ孜孜奮起シテ大體ノ富淵ヲ開發スルノ一事アルノミ。此事タル稍々期望スルニ足ルベキモノナリト雖モ、亦容易ナルザル障礙アリテ其前途ヲ擁塞ス、如何トナレバ概ネ日本人ハ安逸歡娛ヲ欲スルノ情ニ深フシテ却テ貨殖ノ志ニ淺ク、素行惰懶ニシテ勞力勤勉ノ利用ヲ悟ラズ。故ニ拮据勉勵ヲ旨トスルノ人民社會中ニ在テ充備セル如ク殖産中業ヲ幫助スルノ道ニ乏シ。加之ナラズ日本人ハ縱令ヒ其一身ノ爲ニ力ヲ勞スル事アルモ、決テ政府ノ爲ニ盡ス事ヲ欲セズ。是レ其政府ヲ視テ宛モ一家人ノ其ノ家長ニ於ケルガ如クナラズシテ、寧ロ奴僕ノ家主ニ於ケルガ如クナレバナリ。而シテ其愛國ノ氣慨ハ一二ノ場合ニ於テ凜烈ナルガ如シト雖モ、平素其人ヲシテ政府ノ事ヲ以テ自己ノ事トシ視ルノ原志ヲ鼓舞スルニ足ラズ、現ニ刻下財政困難ノ如キハ之ガ爲ニ損害ヲ被リタルモノヲ除クノ外ハ、之ヲ己ノ一身ニ關係ナ

キモノトシテ度外ニ措キ敢テ之ヲ憂慮セザルモノ比々皆然リ。

情狀夫レ此ノ如シ。政府ガ紙幣困難ヲ排除セントスルノ事ニ就テハ人民信ズルニ足ラズ。其補助素リ恃ムニ足ラザルナリ。然ラバ則政府ハ獨行離偶己ノ心ヲ以テ救濟ノ術ヲ講ズルノ外アラザルナリ。而シテ刻下ノ時勢ニ應ジテ最モ多數ノ賛成ヲ得タル如キノ狀アルモノハ、流通紙幣ノ額ヲ減殺スルノ一事ニシテ、其他流通額ヲ減殺スルノ目的ヲ以テ續々妄策ヲ實施シ或ハ種々ニ拙計ヲ起按スルニ至レリ。此等ノ如キハ皆譎詐瞞着ヲ旨トスルノ失計ニシテ、爲ニ早晚慘酷ナル反動ヲ來スベキヤ炳焉タリ。是レ決テ誣言ニ非ルナリ。苟モ專心一意シテ此問題ヲ考究スルモノ誰カ現ニ浮虛紙幣ノ幾括ヲ減殺スルノ一事以テ救濟ノ一端トスルニ足ラザル事ヲ知ランヤ。抑モ今日ノ病根ハ流通紙幣ノ金額ニ非ズシテ其性質ニ在リ。若シ良醫アリテ之ガ治療ヲ爲サシメバ必ず杪瘦貪血ノ徵證アルニ猶其血液ヲ減少スルノ方劑ヲ施サルベク、反ツテ之ヲ滋養シ之ヲ肥潤スルノ方按ヲ考究スベシ。夫レ然リ而シテ其實日本ニ於テハ通常貨幣ノ額敢テ過多ナルニ非ズ、若シ日本ノ通用貨幣ヲ舉ゲ猶償却ノ約束ナキ紙幣ノミニ止マラシムルトキハ却テ過少ノ狀ヲ示シ、往日一千八百七拾三年ノ低落後、米國ニ於ケルガ如ク民庶街頭ニ喊叫シテ頻ニ紙幣ノ濫發ヲ求メタルガ如キ勢ヲ生ズベシ。或ハ人民ノ未ダ之ヲ叫求セザルノ前ニ先ダツテ、政府既ニ正貨ノ騰貴ニ應ジ之ヲ濫發スルノ止ムヲ得ザルニ陥ルベシ。故ニ眞實紙幣ノ額ヲ減殺

セン事ヨリモ寧モ他日紙幣増發ノ事アルベキニ庶幾カラントス。

又既ニ乏絀ヲ告ゲタル正貨ノ準備金ヲ以テ時々市場ニ出デテ紙幣買入ノ用ニ供スルノ計畫ハ妄謬ノ最モ甚シキモノニシテ、百端ノ弊害ヲ一時ニ招集シテ愈々危急ノ勢ニ迫ラシムルモノナリ。此ノ如キ妄計ハ素リ世人ヲ瞞着スルニ足ラズ。如何トナレバ流通高ヨリ引揚タル紙幣ハ早晚必ズ再發セラル、歟、或ハ其代用トシテ更ニ新鮮ノ紙幣ヲ發行セラル、歟、嫌疑ヲ存スレバナリ。況ンヤ刻下急需スル所ハ通用金額ノ減少ニ非ズシテ其性質ノ純良ニ在ルヲ以テ、此ノ如キノ妄計ハ僅々タル投機商ヲ除クノ外更ニ何人ヲモ益セザルモノナリ。而シテ正准ノ準備漸々減少スルニ於テハ、外國ヨリ正貨ヲ輸入スルノ外復々施スベキナキヲ以テ、到底全體ノ財政ヲシテ益々困弊ニ陥ラシムベキナリ。現ニ準備トシテ貯蓄スルト云フ彼ノ二千萬ノ正貨ヲシテ此ノ如クニ消費セシメバ、則一億五千萬ノ紙幣ハ幾千カ減殺スル事ヲ得ベシト雖モ、猶殘餘ノモハ全ク根柢ヲ失シ、忽チ低落シテ無償ニ歸スベシ。是ニ於テ乎通用貨幣ノ過多ナルニ非ズシテ反ツテ通用貨幣ノ全ク無キヲ見ルニ至ルベシ。然ルトキハ則貿易上ニ於テハ新ニ價格ノ權衡トナルベキモノヲ設クル歟、或ハ草昧ノ世ニ於ケル如ク物品ヲ以テ互ニ交易スルノ外他ニ媒介スルモノナキニ至ルベシ。蓋シ此ノ如ク紙幣ノ價格全ク低落シテ殆ド安價ニ歸シタルノ例ハ、紙幣ノ沿革史上ニ於テ歷々見ル所ニシテ、刻下ノ情勢ニ依ルトキハ日本モ亦遂ニ其轍ヲ蹈ミ、別

ニ其一例ヲ史乘ニ掲グルヲ免レザルモノ、如シ。

前ニ論ジタル妄計ノ内多ク政府ノ舉措ヲシテ貿易ノ事ニ侵入セシムルモノアリ。抑モ政府ノ貿易ニ從事スルヤ、素リ適當ナラズ。若シ之ガ爲ニ敢テ其臣民ノ損害ヲ來スニ非レバ、或ハ政府自ラ一敗シテ己ノ財貨ト威權トヲ擧テ悉ク之ヲ失ハンノミ。

是ニ由テ之ヲ見レバ救濟ノ術計ハ致々トシテ正貨ノ貯蓄ヲ増加セン事ヲ謀リ、其目途ヲ以テ機ニ應ジ事ニ臨ンテ着實有効ノ方略ヲ施スノ外更ニ他ニ覓ムベキナキガ如シ。然リト雖モ此ノ急激ナル計策ヲ實施セン事刻下ノ情況ニ於テ決テ容易ニ非ズ。又必ズ人和ヲ得ルニ難シ。苟モ之ヲ實施セント欲セバ必ズ人民ニ増稅ヲ課セザルヲ得ズ。而シテ増稅ノ事ハ政府ガ思ヒ半ニシテ、既ニ悚縮ノ色アル所ナリ。蓋シ今日ノ人民ハ曩ニ將軍家ノ政府及ビ諸藩ノ大名ガ己ノ意ニ隨ヒ聚斂ヲ極メタル時ニ於ケルガ如ク、唯命是從フノ人民ニ非ルヲ知レバナリ。

是ニ於テ乎更ニ外國債ヲ起スベキノ議ヲ内閣ニ起スモノアリ。然ルニ負債ヲ償還セシガ爲メニ更ニ債ヲ起スハ一二ノ大臣參議其他草莽間ニ在ル二三ノ有識者ガ一聞シテ以テ請債ノ良法ニ非ズト覈認スル所タリ。而シテ此ノ黨ノ所見ニ由レバ、此ノ如キ用途ノ爲ニ外債ヲ起スハ反テ益々財政ノ困弊ヲ醸スベク、又政府ノ義務ハ到底其國民獨リ之ヲ負擔セザルヲ得ザル事瞭然タル上ハ、既ニ汎ク通シテ衆庶ノ負擔ニ歸シタル紙幣償還ノ負債ハ猶他ニ同額ノ負債ヲ負ハシム

ルト、之ヲ均ク人民ヲシテ負擔セシムルニ至ルハ、彼此ノ間ニ於テ更ニ輕重ナキモノト考慮スルガ如シ。是以此ノ黨ノ利用判明ナラザル一時ノ方便ニ抗議シ、而シテ今日通用金ノ衰弱ヲ挽回シ、其性質ヲ純良ニセンガ爲ニ要スル所ノ方便ハ外國ニ請ハズシテ之ヲ内國ニ覓メン事ヲ贊成スルナリ。此所見ノ着實ナル事ハ苟モ日本ノ自然^{ナチュラ}ノ財源^{レゾールス}如何ヲ熟知スルモノ、毫モ疑ハザル所ナリ。蓋シ日本人民ハ或ハ敢テ此ノ事ヲ負擔スルヲ欲セザルノ情ヲ懷クヤモ未ダ知ルベカラズト雖モ、要スルニ斯ノ人民ハ之ヲ負擔スベキ力ヲ有シ、果シテ其負擔ノ効ヲ顯ス事ヲ得ベシ。乃チ之ヲ負擔セシムルノ法ハ斯ノ人民ニ新稅ヲ課スルニ在リ、退テ人民ノ現況ヲ察スルニ、連年ノ豐熟ハ必ズ此ノ負擔ノ重キニ堪ユベキ瑞兆ヲ呈スルハ實ニ日本ノ大幸ト云フベシ。而シテ此ノ新稅ヲ課センニハ公平緊嚴ヲ旨トシ、增課ノ理由ヲ辨明シ、國民大義ノ存スル所ヲ懇誨シ新募ノ金額ハ專ラ紙幣償却ノ事ニ使用スベキノ保障ヲ與ヘバ、則人民ノ間ニ於テ聊カ異議ヲ唱フルモノナカルベク、管ニ異議ヲ唱フルモノナキノミナラズ、猶能ク斯ノ民ヲ馴服シ、各自ヲシテ永ク彼ノ救濟ノ利益ヲ感觸セシムル事ヲ得ベシ。

此ノ救濟ノ方策タル、其他ニ人民ノ大半ヲ裨益スル事宛モ往日哥里米戰亂ノ後魯國ニ於ケルガ如キモノアルベシ。例ヘバ惰民ヲ驅リテ拮据勉勵セシムル事はナリ。惟フニ國中ニ惰民多ク中ニ稍々勤勉ヲ以テ稱スベキモノアリト雖モ、猶其產出スル所ノ寡少ナル、日本ノ如キ國ニ於ニ其テハ獨リ拮据勉勵ノ慣習ヲ養成スルノミヲ以テ、大ニ全國ノ利益ヲ裨補スルニ足ルベキコト炳焉タリ。

然レドモ此ノ如キ人民ヲ驅制シ、其舊慣ノ安逸ヲ捨テ、新令ノ艱苦ニ就カシムル以上ハ、政府モ亦須ク力ヲ極メテ輔翼獎勵ノ道ヲ盡サザルベカラズ。蓋シ輔翼獎勵ノ事ニ至テハ政府既ニ施ス所アリ。而シテ財政ノ勢ヒ猶後來ヲ期スルノ事實ニ費スベキ餘裕アラバ、政府將ニ他ニ盡ス所アラントスルモノ、如シト雖モ、舊來其施行セル舉措ニシテ全ク徒勞ニ屬スベキモノ少カラザルハ、今日ニ至テ之ヲ認容セザルヲ得ザル所ナリ。勸工上ノ事業ハ國其事ニ適セズ、民其業ニ拙ナリ。故ニ之ヲ起スモ唯人ノ耳目ヲ悅バシ浮華ヲ獎ムルニ過ギズシテ、毫モ經世ノ實益アルモノニ非ルナリ。然ラバ則官吏ヲシテ貿易ニ從事セシメン乎、官家ノ競争ニ遭テ忽チ商家痿痺シ、政府ハ復タ二三ノ有志者ニ恩賜シテ盛ニ獎勵勸誘ノ道ヲ盡ス等ノ事舉テ之ヲ爲サルニ至ルベシ。是ニ由テ之ヲ觀レバ、日本政府ノ敢テ自ラ貿易ニ從事スルモ、其結果ハ猶他邦ノ覆轍ニ出ルノ外アラザルナリ。

夫レ民間ノ事業及ビ一個人ノ勤勉ハ方今日本ノ急需タル事疑ヒナシ。然リト雖モ獨リ此一事ノミヲ以テ未刻下ノ困弊ヲ排除スルニ足ラザルナリ。蓋シ之ヲ勸獎センニハ持公秉平ヲ旨トシテ輔翼ノ實ヲ盡スヲ要スベシ。又日本ニ於テ均ク方今ノ忽務トスベキハ政府ノ管理ニ屬スル道

路ノ如キ就中運輸ノ便ヲ盛ンニ開クニ在リ。

按ズルニ現在ノ國道ハ昔日諸侯ノ行旅及ビ行軍ノ便ニ供シタルモノニ非ズ。故ニ今日貿易上ノ事業ニ便ナラズ。之ニ便ナラシメント欲セバ洪費ヲ以テ鐵道ヲ築クノ外アルベカラズ。是ニ於テ環海ヲ以テ貨物運輸ノ通路ニ充ルノ策ヲ施シ、猶幾年間ハ此ノ策ヲ繼續セザルベカラズ。是以方今道路修築ノ急需ハ、内地ヨリ沿海ノ諸港ニ出ルノ短近ノ線路ヲ設クルニ在リ。此ノ道路修築ノ業ヲ終ヘバ運輸ノ便忽チ簡易ニシテ且駿速ナルベシ。而シテ後チ諸港ヲ修更改良スルニ在リ。其他沿海航行ノ汽船ヲ整備スルハ、殖産上ニ於テ最モ有効ナル補助ノ一端ニシテ、而シテ國費ヲ仰グ所ノ事業ニシテ此ノ如ク有益ノモノハ未ダ曾テアラザルナリ。

今ヤ殖産獎勵ノ事業ニ加フニ此ノ如キ補助ヲ以テシ、且ツ公平無偏ヲ旨トシテ有志勤勉ノ人ヲ賞揚セバ則土壤ノ沃肥ト工業ノ進歩トハ日ナラズシテ方今急需スル所ノ果實ヲ以テ充分ニ酬ヒ、而シテ財政困弊ヲ醫補センガ爲ニ徵スル所ノ稅ハ一モ舉ラザルナキニ至ルベシ。

此ノ如キ用途ニ費スベキ外國債ハ充分ノ擔保ヲ有スルモノナルガ故ニ、低度ノ利金ヲ以テ速カニ募集スル事ヲ得ベシ。而シテ若シ之ヲ正當ニ使用シテ更ニ濫用ノ弊ニ陥ルナクレバ、外國債ハ決シテ重擔苛荷ニ屬セザルノミナラズ、反テ日本專占ノ利益タルベシ。如何トナレバ日本ノ急需ニ應ズルニ未ダ東洋ニ於テ需用繁多ナラザル外國ノ資本ヲ以テシ、而シテ内國ノ法律ニ依

テ之ヲ施用スルニ於テハ日本ヲシテ開豁無障ノ方向ニ進マシムル事ヲ得レバナリ。

地租改正之儀ニ付建議

先年地租正法御發行以來、全國中其効ヲ奏スル者未數縣ニ過ギズ。其實際施行ノ困難ナルヲ以、督促ノ令アリト雖モ恐クハ翹足シテ其成功ヲ期シ難キ者アラシ。加之世上新法ノ不使ヲ議スル者上下共ニ之アリ、其間亦民心ノ動搖ヲ生ジテ政府ノ患ヲナス者アリ。夫法タル者一利アレバ一害ナキ事能ハズ、況ヤ此件ノ如キ固リ至重至大ノ件ニシテ景況萬變スルヲ以、一概ニ死法ヲ以テ拘束スル時ハ、其弊勝テ言フ可ラザラントス。然リト雖モ此議已ニ決シ、此事已ニ行ハレ、騎虎ノ勢中止ス可ラス。臣由テ想フニ此ノ改正ノ成規ニ據リ變通ノ法ヲ設ケテ之ヲ極ハ、事行ハル可クシテ其害稍少カル可シト、之ニ依テ先年布告ノ明文ニ本ヅキ、輓近設クル所ノ地所名稱區別ニ由テ稍之ヲ斟酌シ、傍之ヲ實地ニ徵シ、カメテ上下ノ便ヲ謀リ、上下所有ノ權ヲ分チ財産ノ所屬ヲ固クシ、遂ニハ華士族祿ノ處ニ及ビ、之ヲ以彼ニ代ヘ、上下各失フ所ナクシテ名分ノ正ヲ得セシメバ、此盛舉ニ於テ其所裨補必淺鮮ニ非ザル可シ。由テ此議ヲ草シテ進止ヲ候セントス。但其爲事錯雜シテ辨明スルニ容易ナラザルヲ以、政府應用ノ文案ニ擬シテ

其主旨ノ所在ヲ吐露セント欲ス採擇セラレバ幸甚ナリ。

明治九年二月

一等法制官 細川潤次郎

擬内務大藏兩省之稟議

地所名稱區別改正並私有地第一種賦稅規則等之儀ニ付伺

地租改正ノ儀ハ去ル壬申年來數次ノ上陳ヲ經テ漸ク目今ノ景況ニ立チ至リ候處、一利一害ノ凡百ノ事ニ於テ免ル、能ハザル所ニシテ、右改正ノ如キモ實際施行上ニ於テ多少ノ弊害無之共

地租改正之儀ニ付建議

難申、就テハ世上ニ於テ異議モ亦少シトセズ、抑地租改正ノ旨趣ハ公平均一地稅ヲ減ジ、物品等ノ稅ヲ興スニ外ナラズト雖モ、一着ニシテ至善之點ニ達スル事能ハザルハ事理當然ノ勢ナリ。故ニ先從前ノ稅額ニ準據シ、當分地價百分三ノ稅率ヲ定メ、追々百分ノ一ニ歸着セシムベキ目的ヲ以テ伺濟ニ相成候儀ニ有之候得共、先入ノ說ヲ去リ、虛心ヲ以テ審按致シ候ヘバ右地價百分ノ三ノ稅率ヲ以テ英國ノ地稅英國ノ制ニテハ地價百分ノ三四ハ地主ノ收ニシテ地稅ハ其收入ノ二十五分一ナリニ比スルニ、其重歛タル事殆ド十倍ニシテ、結局百分ノ一ニ歸着セシムルモ猶其重歛タルヲ免レズシテ、到底至善ノ點ニ達スル事能ハザルナリ。然リト雖モ我國ノ土地大ニ彼國ノ制ニ異ナル所ノ者アレバ、則チ現今ノ民有地ヲ以テ直ニ英國ノ私有地ト同視ス可ラザルハ論ヲ待タザル所ナリ。故ニ苟モ此理ヲ察セズシテ一概ニ彼國ノ制ニ倣ヒ、大ニ其地稅ヲ輕クセントセバ、政府ニ在テハ忽チ目前ノ經費ヲ償ハザルニ至リ、人民ニ在テハ不慮ニ財產ヲ拾ヒ得ルガ如キノ僥倖者アルニ至ラシメ、大ニ經濟上ノ原則ニ違背スルノ道ニ有之、去此儘ニ閣キ候テハ終ニ至善ノ點ニ達スルノ期ナカラシムル歟ト深ク苦慮致シ、兩省協議ヲ盡シ候處、更ニ別紙諸按ノ通地所名稱區別ヲ改正シ、私有地第一種ノ稅則ヲ定メ、尙又私有地第二種ヲ第一種ニ組替ノ儀ヲ差許シ候ヘバ、一ニハ以テ即今世上ノ異議ヲ氷解セシメ、一ニハ以テ將來至善ノ點ニ達スルノ道ヲ開キ、兼テ家祿消却ノ道モ相立チ兩全ノ策ト存候間、御採用相成候様致度公布按相添此目相伺候也。

御布告按

明治七年十一月第三十號布告地所名稱區別左ノ通改正候條此旨布告候事。

官有地

第一種 地券ヲ發セズ地租ヲ課セズ區入費ヲ賦セザル法トス。

一、皇宮地 皇居離宮等ヲ云。

一、神地 伊勢神宮山陵官國幣社府縣社及ヒ私有ニアラザル地ヲ云

第二種 地券ヲ發シ地租ヲ課セズ區入費ヲ賦スルヲ法トス尤府縣所用ノ地ハ地券ヲ發セズ

唯帳簿ニ記入ス。

但此地ニ在ル官舎ヲ貸渡ス時ハ借地料ヲ收入ス。

一、官用地 官院省使寮司府藩縣本支廳裁判所警視廳陸海軍本分營其他政府ノ許可カ得タル地ヲ云

第三種 地券ヲ發セズ地租ヲ課セス區入費ヲ賦スルヲ法トス。但地所ハ人民ニ貸渡シ借地料ヲ收入スル者トス。

地租改正之儀ニ付建議

- 一、私有ニアラザル田畑屋敷等。
- 一、人民所有ノ權利ヲ失セシ土地。

第四種 地券ヲ發セズ地租ヲ課セズ區入費ヲ賦セザル法トス。

- 一、山岳丘陵林藪原野河海湖沼澤溝渠堤塘道路其他私有地ニアラザルモノ。
- 一、鐵道線路敷地。
- 一、電信架線柱敷地。
- 一、燈明臺敷地。
- 一、各所ノ舊跡名區及ヒ公園等私有地ニアラザルモノ。
- 一、私有地ニアラザル堂宇敷地及ヒ墳墓地。
- 一、行刑場。

第五種 地券ヲ發セズ地租ヲ課セズ區入費ヲ賦スルヲ法トス。

- 一、寺院大中小學校説教場病院等私有地ニアラザルモノ。

私有地

第一種 地券ヲ發シ地租區入費ヲ賦課スルニ備直ニ據ルヲ法トス。

- 一、皇族賜邸。

一、官ノ許可ヲ得テ第一種ニ編入シタル耕地宅地山林等。

但此地ハ賣買潰シ地開墾等總テ人民各自ノ自由ニ任スルヲ法トス。

第二種 地券ヲ發シ地租區入費ヲ賦課スルニ地價ニ據ルヲ法トス。

一、人民各所有ノ確證アル耕地宅地山林等ヲ云。

但此地賣買ハ人民各自ノ自由ニ任スト雖モ潰シ地開墾等ノ如キ大ニ地形ヲ變換スルハ官ノ許可ヲ乞フヲ法トス。

第三種

一、人民數人或ハ一村或ハ數村所有ノ確證アル學校病院鄉倉牧場社寺官有地ニアラザル土地ヲ云。

但此地賣買ハ其所有者一般ノ自由ニ任スト雖モ潰シ地或ハ開墾等ノ如キ大ニ地形ヲ變換スルハ官ノ許可ヲ乞フヲ法トス。

第四種 地券ヲ發シテ地租區入費ヲ賦セザルヲ法トス。

- 一、官有ニアラザル鄉村社地及ヒ墓墳地等ヲ云。

御布告按

私有地第一種賦稅規則左ノ通相定候此旨布告候事。

私有地第一種賦稅規則

第一條 私有地第一種ニ賦課スル稅率ハ僦直ノ二十五分一トス。

但區入費ハ僦直十分ノ一分二厘五毛ヨリ超過ス可ラス。

第二條 僦直トハ其地ヲ他人ニ貸シテ收入スル所ノ借地料或ハ小作米等ヲ云フ。故ニ地主ノ自宅地又ハ自作地等は近傍ノ比較ヲ以テ其僦直ヲ査定ス可シ。

第三條 地主若シ僦直ノ定量ヲ全收セズシテ其内若干ヲ減シ又ハ多量ノ僦直ヲ出ス者ニ貸サズシテ故ラニ少量ノ僦直ヲ出ス者ニ貸ス事アルモ地稅ハ其定量ニ賦課スベシ。

第四條 土地ノ盛衰又ハ天災等ニテ僦直ノ定量ハ増減アル中ハ地稅ヲ其増減シタル量ニ賦課スベシ。

御布告按

私有地第二種ヲ第一種ニ編入ニ儀差許候ニ付規則左ノ通相定候條此旨布告候事。

私有地第二種ヲ第一種ニ編入スル規則

第一條 私有地第二種ヲ第一種ニ編入スルハ地主ノ情願ニヨリテ之ヲ許可スルモノトス。

第二條 右編入ノ法ハ第二種十分ノ四ヲ官有地トナシ残り六分ヲ第一種ニ編入スル者トス其割合左ノ如シ。

第二種稅則但地價檢査例小作地ヲ檢スル法ナリ

一、地壹町步

此小作米拾石八斗八升

代金參拾貳圓六拾四錢

内

但壹石ニ付參圓

御布告按

金四圓八錢

村入費地租三分一

金拾貳圓貳拾四錢

地租

小以金拾六圓參拾貳錢

殘金拾六圓參拾貳錢

但四分利ノ
算計ヲ以

其他價金四百八圓

此百分三 金拾貳圓貳拾四錢

右ヲ第一種ニ編入スル四官六私ノ等則。

一、地四反歩 官有地第三種トス。

此儼直金拾參圓五錢六厘

内

金壹圓六拾三錢貳厘

區入費一分二厘五毛

殘金拾貳圓四拾貳錢貳厘

一、地六反歩 私有地第一種トス。

此儼直金拾九圓五拾八錢四厘

内

金貳圓四拾四錢八錢

金七拾八錢三厘

區入費一分二厘五毛
地稅分ノ一

小以金參圓貳拾參錢壹厘

殘金拾六圓參拾五錢參厘

右兩種ニ付官私收入ノ比較

差	第二種ノ儘	官收	私收	區入	區入費
	第一種ヲ組替	金拾貳圓貳拾四錢 金拾貳圓貳拾七厘 内拾壹圓四拾貳錢四厘 七拾八錢三厘 地稅 參錢參厘減	金拾六圓參拾五錢參厘	金四圓八錢 金四圓八錢 内壹圓六拾三錢貳厘 貳圓四拾四錢八厘 官地 私地 無増減	

第三條 右十分ノ四ヲ官有地トナス事ノ代リニ其官有トナルベキ儼直ニ相當スル家祿ヲ奉還ス

レバ悉皆第一種ニ編入スルヲ許スベシ。

第四條 右編入願ノ者ハ其他一筆毎ニ反別儼直ヲ記載シ區戸長ノ奥書ヲ以テ願出ツルベシ。尤

地主ノ宅地又ハ自作地ハ近傍ノ比較ヲ以テ其儼直ヲ申立ツベシ。

但儼直ハ米金ヲ論ゼズ實際取引ノ品ヲ以テス若シ水旱ノ地ニシテ一歲ノ儼直一定シ

御 布 告 按

難キ者ハ五年乃至十年ノ平均ヲ記載スベシ。
 第五條 願書ニ記載シタル反別備直ニ據リ第二條ノ割合ヲ以テ之ヲ三様ニ區分シ抽籤ヲ以テ官
 有私有ヲ定ムベシ。

譬ハ願書ニ記載シタル地所五筆ニシテ其反別備直共左ノ如クナル者トスレバ其區分
 法下ノ如シ。

- | | |
|-----------|-------------------------|
| 甲一、地四反歩 | 備直金拾六圓 |
| 乙一、地壹反七畝歩 | 備直金六圓 |
| 丙一、地貳反三畝歩 | 備直金貳圓貳拾錢 |
| 丁一、地壹反歩 | 備直金五圓 |
| 戊一、地壹反歩 | 備直金四圓八拾錢 |
| 合計地壹町歩 | 備直金四拾圓 此四分十六圓
六分二十四圓 |

右ヲ三様ニ區分スル左ノ如シ。

第一	甲一、地四反歩 備直拾六圓 之ヲ官有地 第三種トス	第二	乙一、地壹反七畝歩 備直六圓 丙一、地貳反畝歩 備直八圓貳拾錢	第三	丁一、地壹反歩 備直五圓 戊一、地壹反歩 備直四圓八拾錢
----	------------------------------------	----	--	----	---------------------------------------

乙一、地壹反七畝歩 備直六圓	丁一、地三畝拾八歩 備直壹圓八拾錢	甲一、地壹反五畝拾五歩 備直六圓貳拾錢
丙一、地貳反三歩 備直八圓貳拾錢	合計地四反三畝拾八歩 備直拾六圓	合計地三反五畝拾五歩 備直拾六圓
丁一、地壹反歩 備直五圓	之ヲ官有地 第三種トス	之ヲ官有地 第三種トス
戊一、地壹反歩 備直四圓八拾錢	丁一、地六畝拾貳歩 備直三圓貳拾錢	甲一、地貳反四畝拾五歩 備直九圓八拾錢
合計地六反歩 備直貳拾四圓	戊一、地壹反歩 備直四圓八拾圓	乙一、地壹反七畝歩 備直六圓
之ヲ私有地 第一種トス	甲一、地四反歩 備直拾六圓	丙一、地貳反三畝歩 備直八圓貳拾圓
	合計地五反六畝拾肆歩 備直壹拾四圓	合計地六反四畝拾五歩 備直貳拾四圓
	之ヲ私有地 第一種トス	之ヲ私有地 第一種トス

右三様ニ區分シタル者ヲ抽籤ニテ其内ノ一ト定ムルナリ。

第六條 右官有ニ定マリタル地ハ其儘従前ノ借地人又ハ地主ニ貸渡シ務メテ人民ヲシテ失業ノ
 患ナカラシムルコトニ注意シ私有地ハ一筆毎ニ其地券へ第一種ニ編シタル旨ヲ記入シ
 テ之ヲ其地主ニ附與スヘシ。

第七條 官有地第三種ノ備直ニ齎シ家祿ヲ奉還シテ其官有地ヲ私有センヲ事ヲ願者アラハ之ヲ
 許可シテ其他ヲ私有地第一種ニ編入スヘシ。

地租改正所由略説

辛、未以來上申スルトコロノ地租改正議及規則書類ヲ纂メ、且其止ムヲ得ザル所以ノ來由ヲ略述シ以テ參酌ニ供ス。

抑租備調ノ古法ハ大寶令ニ明文アリト雖モ後世ニ傳ラズ、中古以來爭亂相踵ギ武門武士ナルモノ各國ニ基峙シ、各耕戰ヲ務メ以テ其私ヲ營ミシヨリ、收租ノ方法モ多クハ兵役分賦ノ意ニ基キ、其地々々ノ習氣ト時勢ニ因リ主將ノ意匠ヲ以テ賦課セシモノナリ。故ニ一定ノ規律ナキハ勿論、尺度量衡ノ如キニ至テモ各其制ヲ異ニセリ。降テ徳川氏ニ及ビ二百餘年ノ太平ヲ致スト雖モ、前古攪亂ノ久シキニ懲リ、休息無事ヲ要務トナシ、制度百端其習慣ヲ因襲シ、田租ノ制ニ至ツテ其親シク管スル所ノ國々ハ粗整理ヲ加フト雖モ、國主大名ノ管スル所ニ至ツテハ竟ニ之レヲ改ムル能ハズ、尋テ戊辰變革ノ秋ニ及ビ往々地租改正ノ議ヲ唱フモノアリト雖モ、實際着手ノ難キヲ以テ未ダ其議ヲ建明スルモノアラズ。爾後辛未廢藩立縣ノ命出ルニ及ビ當省ニ

於テ首トシテ其議ニ及ビ、地券分一ノ税法ヲ議定シ、壬申正月太政官へ上申シ允准ヲ得、先ヅ東京府下ニ地券税法ヲ發行シ尋テ舊來地所賣買ノ嚴禁ヲ解キ地券ヲ附與スル等ノコトヲ舉行セリ。

是ヨリ前キ世ノ税法ヲ議スルモノ往々田地ヲ再檢シテ石盛ノ均シカラザルヲ整理シ、以テ田租ヲ公平ニセントノ説アリ。然レモ此説ノ如キハ最民心ニ關涉シ實際行フ能ハザルモノナリ。如何トナレバ徳川氏ノ時再檢亦ハ地押ノコトアレバ必ラズ稅額ヲ増加スルガ故ニ、再檢ハ政府ニ於テ地租ヲ増ス可キ旨意ト而已思フノ念慮民心ニ固着セリ。況ヤ大名領主ノ管下ニ於ケル如キ、大概石高ヲ増加シ其門閥ヲ誇耀セントスル私欲アルヲ以テ、山ニ高ヲ附シ、川ニ高ヲ賦スルノ類比々之レアリ、然レドモ其實收ヲ増ス能ハズ。故ニ其歲入ノ虛名ヲ増加スルモ其名ニ應ズル能ハズシテ各種姑息ノ賑救法ヲ設ケテ民心ヲ慰スルモ、民ハ其名ノ増加スルニ恐懼シテ檢地亦ハ地押ノ舉ヲ聞ケハ荷擔シテ立ントスルノ情勢アレバ、決シテ行ハレザルノ空論ナリ。但此際ニ當リ集議判官神田孝平^{今兵庫縣令}地價ニ稅ヲ賦スルノ議アリ最改正論ノ嚆矢トモ唱フベシ。

然シテ其端緒既ニ開ラクト雖モ、實際着手ノ如キ實ニ容易ナラザヲ以テ、地券ヲ附與スルノ事務ニ而已殆ンド一歲ヲ閱セリ。尋テ癸酉四月地方官會同ノ時ニ臨ミ、地租改正ノ議亦大ニ起

レリ。此時ニ及ンデ暫ク舊法ヲ維持セントノ議間々アリト雖モ、大略改正ヲ要スルノ論十ノ九ニ居レリ。然シテ其改正ヲ要スルモノハ悉皆地券ヲ可トスト雖モ、時ノ情ヲ斟酌シ、暫ク金額稅ヲ施行セント欲スルモノ、亦タ其一ニ居レリ。於是暫其得失ヲ計較センガタメ數員ヲ撰ミ、其方法ヲ調理セシムルニ及ビ、金額稅ヲ主張スルモノモ竟ニ地券稅法ニ左擔シ、其方法ノ書出ルニ及ビ議員一同之レヲ可ト決セリ。竟ニ其書ヲ上奏シ内閣ノ衆議ヲ經、上諭ヲ以テ天下ニ頒布セラル、モノ癸酉七月第二百七十二號ノ公布是也。凡ソ地方官ノ之レヲ可ト決シ異論ナキモノトハ何ゾヤ、蓋シ前ニ陳述スル如キ戰國ノ餘風ヲ受ケシ各縣各種ノ方法ハ、封建割據ノ時土地人民ヲ私有セシ日ニ行ハル可クシテ一視同仁ノ世ニ行ハル可キモノニ非ズ。然リ而シテ其舊ヲ改メントスルヤ、再檢地押ノ行ハレ難キハ勿論衆ノ知ル所ナレバ、更ニ一種ノ稅法ヲ設ケント欲スルニ別ニ奇策ヲ得ズ。偶金額稅ヲ施サントスルモ時宜ニ適セズ。

金額稅ヲ施サントスルモノハ正米納ノ煩雜ニシテ民費モ亦尠ナカラザレバ、各地數年ノ貢額ト數年ノ石代ヲ平均シ、一村一郡ノ貢額ヲ定メ、以往數年間ノ定貢トナサントノ旨趣ナリ。然レドモ舊時ノ稅額ヲ以テ以往ノ目的ト爲スガ故ニ、重キモノハ更ニ輕キヲ得ズ、輕キモノハ更ニ平一ニ歸スル能ハズ、到底舊法ノ面目ヲ變スルノミニシテ人民ノ得失ニ關セサレハ竟ニ其說中止セリ。

故ニ地券法ノ價ヲ見テ稅ヲ賦シ、收利ヲ見テ地價ヲ定ムルヤ、其始メ之レヲ整頓スル實ニ容易ナラズト雖モ、地價一定ノ後ハ收租ノ方法簡易明白ニシテ上下共ニ其便利ヲ得ヘキヲ以テ各員之レヲ可トセリ。

是ヨリ前各藩所領ノ政府ノ親管トナレルモノハ、總テ檢見ノ方法ニ因リ三五年間ニ年々秋穫ノ多寡ヲ檢シテ其年ノ貢額ヲ定ムル方法アリ、此法ハ舊幕慣習ノ方法ヲ參酌シ、庚午年大藏省ニ於テ議定スル所ナリ。其法タル頗ル公平ニ似タリト雖モ、一村内二三ヶ所或ハ四ヶ所ノ歩刈粃ヲ平均シ、一村貢額ノ總計ヲ定ムルヲ以テ、人民一人上ニ取リテハ良田ヲ持シモノノ益トナル事アリ、時トシテハ下田ヲ持シモノノ益トナル事アリ、若シ然ラズトモ檢見役人ノ目算ニ誤謬アル時ハ甚シキ不公平ヲ生ズルナリ。舊幕時世ハ地方ノ小吏總テ其職ヲ世々シ、幼少ヨリ其務ニ服事シ、其他ノ肥磽ト其收穫ノ如キ檢見セズト雖モ、大略ノ算計ハ豫シメ其胸中ニアルヲ以テ、其法モ亦平準ヲ得タリ。然レドモ其事情ニ熟知スルヲ以テ流弊モ亦其間ニ生ゼリ。今日置縣ノ如キ東奥ノ人九州ノ地方ニ從事シ、西南ノ人北國ニ任用セラル、如キニテハ、地方ノ事情ニ暗ク、如何ゾ檢見スルモ其平準ヲ得ルヲ期セン乎。故ニ地方從事ノモノヲ檢見スルニ當ツテハ、寧ロ寬ニ失スルモ酷ニ失スルヲ戒トス。是其志舊法ノ苛酷ヲ救ハントスルニ在リト雖モ、事情亦然ラザルヲ得ズ。故ニ近來ハ人民舉テ檢見ヲ企望セリ。加之

延米口米ノ如キ一縣内數種或ハ二千餘種アルアリテ收入ノ煩ハシキノミナラズ、甲ハ五升ヨリ一斗或ハ二斗ヲ納メ、乙ハ三升五升ヲ納メ、或ハ一粒モ納メザルアリ、其實量ノ輕重ハサテ置、其名義ノ偏頗ナルヲ以テ、地方官モ務メテ之レヲ同一ニセント欲スルガ故ニ、檢見ヲ以テ貢額ヲ定メントスルノ念慮アリ、如此人民ト地方官ト均シク檢見ヲ欲スルガタメ、事情ノ止ムヲ得ザルアレバ當省モ之レヲ拒ムヲ得ズシテ其申請ニ應スル中ニ必ラズ舊額ニ比シ十分一或ハ十分二ヲ減ズルモノ往々有之、然リ而シテ其減ズルモノ細民究氓ノ一人毎ニ徹底スレバ亦是ヲ仁政ト云フモ可ナレトモ、或ハ豪商ニ利シテ貧究ニ及ハス政府ノ歳入ヲ減ズルモ實惠下民ニ及ハザルノ弊アリ。

爾來舊法ノ格外偏重偏輕ナラザルモノハ、後來改正ノ秋マデ暫ラク舊慣因襲スベキ旨及指令置、漸ク地方官モ人民ニ對シテ改正ノ前途ニアルヲ以テ、暫ラク舊慣ニ据置ヲ説諭スルヲ得ルト雖モ、臨時旱水ノ憂アルヲ以テ、舊稅額ヲ保ツ能ハザル郡村ハ往々被免檢見人ヲ申請シ、而シテ被免ノ上舊額ヨリ減ズルモノ追々上申有之、其減スルモノハ天災ニ屬スルト雖モ、亦舊額ノ偏重ト官吏用法ノ斟酌トニ因リ減ズルモノ若干ニ居レリ。

早年ハ水田ニ利アリ、水損ハ旱田ニ利アリ、假令水旱並臻ルト雖モ、癸酉ノ如キハ大略以テ中年ノ上ト推想セリ。然ルニ同年檢見被免ノ多キ、本年ニ至リテ各地ノ上概算審按スルニ、

甚キハ十ノ二三ヲ減ジ、或ハ其一ヲ減ズルアリテ、兼テノ胸算ト適合セサルモノ比々之レ有リ。

地租改正ノ止ム可カラザルモノハ、現今地租收入ノ景況右ニ陳述スルガ如キニ因レリ。右事情ニヨリ論ズルハ、強テ舊法ヲ維持セントスレバ檢見ヲ舉行セザルヲ得ズ。檢見ヲ舉行スレバ若干減租ナキヲ免カレズ。加之反別錯亂ノ地舊來反別ヲ用ヒザル地ハ檢見ヲ舉行セントスルニ決シテ能ハズ。縦令帳簿上ノ反別整頓セルアルモ、實際ハ必ラズ然ラザレバ檢見施行スルニ當リテハ大概均一ノ賦租ヲ徵スル能ハズシテ、多少ノ物議ヲ生ズベシ。夫如此ナレバ舊法ヲ維持セント欲スルモ、今日ニ當リテハ決シテ能ハザルノ勢ヒアリテ、一種ノ良法ヲ設ケザルヲ得ザルノ時勢ニ立至レルナリ。

今地券稅ノ法タルヤ、從價百分三收入ノ則ニシテ其價ハ凡ソ實利ノ十六倍有奇六朱ヲ以テ算スナリ。若シ現收穫百ヲ以テ算スレハ其二十四五ヲ官納スルモノトナス之レヲ舊法ニ比スレバ舊幕法ニ五公五民ノ稱アリト雖モ檢見上千減二割引ノ法アルヲ以テ四公六民ノ割合ナリ而シテ實際ニツキ猶精算スレハ種々ノ寬法アルヲ以テ其實計ニ至ツテハ大概三七民ナリ藩ニ二公一民六公四民等ノ如キ或ハ苛刻ノモノアリト雖モ容赦手當貸附捨リ等姑息ノ救助法アリテ其酷ヲ補フヲ以テ精密ニ之レヲ算セ百分中四五ヲ減ズルモノニシテ、方今適當ノ稅額ト稱ス可シ。抑農民ニ而已稅ヲ徵收スルモノハ往古兵農分カレザル時人々皆兵役アルヲ免カレズ。故ニ其稅ノ輕カリシモ、武將政權ヲ私スルニ及ビ、兵農漸ク分カレ、所謂武士ナルモノ戰鬪ニ從

事シ、農ハ専ラカヲ隴畝ニ盡シ、其收ムル所ノモノヲ以テ普通ノ租ト、武士ヲ養フノ諸費トニ供セザルヲ得ザル勢ヨリ、竟ニ如此苛重ニハ及ビシナルベシ。抑稼穡ヲ重スル國風ナレバ農ニ而已稅ヲ負ハセシモ亦自然ノ勢ナリ。然リ而シテ職工等ニ偶々稅ヲ賦スルモ、運上冥加等ノ名義ヲ以テシ、全ク聊ノ輕稅ヲ納メシメタルハ最不公平ト云フベシ。今ヤ萬民同一ニ兵役ヲ務ムル事ニナル上ハ、農租ハ猶減シタキ事ナレドモ、一時其地位ニ至リガタキヲ以テ先ヅ本文ノ通り議定スル所ナリ。

右陳述スル所ハ地租改正ノ由來ニシテ、其詳細ナルハ既ニ上陳セル所ノ別數冊ニ盡セリ。而シテ前途改正ノ後、稅額ノ増減スルヤ未ダ其精算ヲ得ズト雖モ、今般山口縣調査ノ景況及ビ諸縣ヨリ申牒スル所ヲ參考スルニ、凡ソ別表ノ如ク減額ニ至ランモ量ル可カラズト雖モ、地租改正ノ止ム可カラザルハ前條具述スル所ノ如シ。然リ而シテ、此事業タル至大至重ナル勿論ニシテ、萬一事ノ半途ニ至リ多少ノ紛紜顧議ヲ生ズル事アラバ、下衆庶ニ信ヲ失フノミナラズ、國家ノ一大患ヲ釀成ス可クト豫メ焦慮スル所ナリ。因テハ今ニ於テ尙御熟慮ノ上前途ノ廟算御確定アラン事ヲ企望ス。

租稅頭 松方正義

地租改正増減概表

全國ノ租稅中地租其八九ニ居レリ、今ヤコレヲ最改正セントス。其關スルトコロ頗大ニシテ愈慎密整理セザルベカラズ。ソレ各府縣稱スルトコロノ反別ノ如キ、數百年來イマダ曾テ檢地セザルモノアリ。或ハ轉封削地等ノ事アリテ屢檢地ヲ經ルモノアリ。其丈重ノ法ニ於ケル亦一ナラズ。其他石高ノミヲ稱シテ反別ノ稱呼ヲ失フモノアリ、或ハ四百歩ヲ以テ一反トナスモノアリ、帳簿ニ載スルトコロ皆其實ニ適ハズ。故ニ先ヅ反別ノ廣狹□□ヲ整理スルニアラザレバ舊稅ノ寬苛輕重ヲ知り、新稅ノ増減スルユエンヲ知ルニ由ナシ。仍テ壬地租帳毛付反別ヲ以テ舊反別トシ、然シテ隅田切添繩蕙ノ類概ネ反別ノ増スベキ見込ヲ加ヘ、新反別トシ收穫米價等凡見込ヲ以テ地價ヲ算出シ、増蕙ノ概略ヲ見ントスルニ或ハ増スモノアリ、又減ズルモノアルベシト雖モ、從前ノ稅大低苛重ニ過ルモノ多ケレバ、地價百分ノ三ヲ以テ課稅ノ定率トナシテコレヲ平均スルトキハ、減ズルトコロ多クシテ増ストコロ少ク、増減ヲ以テ減額ヲ償フニ足ラズ。其他貢米ノ外延米口米ノ類大率六拾萬石ヲ收入シ來レリ。是等ハ其縣ニヨリテコレヲ課ス

ルモノアリ、課セザルアリ、最免除セザルヲ得ズ。而シテ其口米ニ換ルガ如キハ漸次別ニ賦金ノ法ヲ設ケテ一地方ノ用度ニ供セントス、之ヲ合算スレバ殆ド金六百萬圓ノ減額ニ至ランカ、然レドモ其實數ノ如キハ豫シメ算知シ難ク、實際ニ臨ンデハカナラズ差違アルベシ。暫ク其假表ヲ設ケテ増減ノ概略ヲ見ルノミ。

總計	三府六十縣	
舊田	百七十六萬貳千五百四十五町七反歩	合三百二十三萬三千五百九町四反歩
反別畑	百四十七萬九百六十三町七反歩	
假田	二百二十六萬二百五十四町五反歩	合四百十二萬九千七百七十一町二反歩
別畑	百八十六萬三千五百十六町七反歩	
舊田	二千七百二十九萬九千五十一圓	
畑	七百二十八萬八千五百六十六圓	合三千七百三十五萬五千七百三十圓
田	二百七十六萬七千九百八十六圓	
新田	二千五百八十五萬八千七百二十四圓	
田	不知	

地租改正増減概表

租地反一	價地反一	金米舊	較比	金稅	稅
畑 田	畑 田	畑 田	減	增	畑
四十壹錢九毛八三	壹圓十四錢壹厘〇三	五十五錢壹厘九毛四八 三十八圓四厘四毛 十三圓六十九錢九厘四毛	五百八十八萬六千六百八十四圓	二百四萬八千四百四十三圓	七百六十五萬八千七百三十八圓
差引減三百八十三萬三千四百一十一圓					合三千三百五十一萬七千四百六十二圓
外					
米五十九萬石 諸掛延米口減 代金二百六萬五千圓 米ノ類 但一石三圓五十錢積り					

地所賣買放禁分一收稅法施設ノ儀伺

地所賣買放禁分一收稅法
施設之儀正院伺

大藏卿 大久保利通
大藏大輔 井上馨

稅法ハ治民ノ要務ニシテ理財會計ノ基本ナリ。其當否ニヨリ邦國ノ隆替人民盛衰ニ關涉シ、至大至重ノ要件タル今更喋々論辯ニ不埃、抑皇國中古以降慣行ノ稅則ハ戰國ノ遺法ニシテ妥當ヲ得ザルモノ多シ。既ニ地ニ石高アリ、貫高アリ、東高アリ、無高アリ、無反別アリ、稅ニ檢見法アリ、定免法アリ、五公五民モ名有テ其實大ニ不同アリ、其他雜稅等ニ至テハ千差萬別枚舉ニ遑アラズ。加フルニ割據ノ陋習比鄰法ヲ異ニシ、農民苛酷ニ苦シム事久シ。今ヤ政權一ニ朝廷ニ歸シ凡百ノ政務齊一ノ際、治國ノ樞要タル稅法ニ於ケル、均一ノ法則ヲ設ケザルベカラズ。茲ニ於テ古來ノ沿革當今ノ形勢内外ノ制規等夫々探討考覈審議細案仕候處、斷然從前ノ方

地所賣買放禁分一收稅法

ル時ハ第一耕地ノ廣狹地味ノ善惡秋毛ノ熟否等、検査ノ煩勞ヲ省キ前ニ陳述スル數件ノ錯雜ヲ一掃シ、年來ノ通患一朝ニ氷解シ、前ニ偏頗ノ田租稍平準ヲ得テ億兆ノ農民一樣ノ恩濟ニ浴セシ事實ニ此方法ニアリ。最モ新法ハ速成ヲ戒ム。其施行ノ順序ニ至テハ許多ノ法則更張無之テハ難相成、殊ニ従前地代金ノ高低ハ雷ニ地味ノ肥瘠ノミニ不拘、多クハ貢税ノ多寡等ニ因レリ。然ルニ一時ニ之ヲ釐革スル時ハ均一ヲ需メテ却テ不公平ヲ醸シ、實際ニ於テハ扞格ノ憂無之モ難申、故ニ時勢人情ヲ揣リ逐次施行先ヅ以テ地所永代賣買ヲ許シ、各所持地ノ沽券ヲ改メ、全國地代金ノ總額ヲ點檢シ、而後更ニ簡易ノ收税法ヲ設ケ、豫シメ弊害ヲ防ギ、民ニ示ス毫モ疑ヲ容レザル畫一ノ條令ヲ以テセバ、永世不拔ノ良法ト奉存候間御制可ヲ蒙リ候ハ、追々取調可伺出、先以改革之順序御布告條目案相添此段奉伺候也。

壬申二月

伺之通

太 政 官

御布告

地所永代賣買之儀從來禁制ニ候處自今四民共賣買致所持候儀差許候事。

府 縣

今般地所永代賣買被差候ニ付今後賣買並讓渡之分地券渡方等別紙規則之通可相心得事。

壬申二月

大 藏 省

地所賣買讓渡ニ付地券渡方規則

第一

一、地所賣買讓渡之節地券相渡候ニ付而者於府縣元帳ヲ製シ地券申受之儀願出候節者別紙雛形之通地券本紙並ニ控共二枚ヲ書シ押切印之上本紙者地主ニ興ヘ控者右元帳ヘ綴込置可申事

第二

一、右元帳ヲ以地券之大帳ト定メ以後之分綴込置一箇年分取纏壹通リ大藏省ニ差出置可申事。

第三

一、地券申受之儀者別紙願面書之通リ相認爲願出可申事。

第四

一、右願出有之節者雙方情實篤ト相糺相違無之候ハ、地券相渡可申事。

第五

一、一筆之地所ヲ裂キ賣買致度旨願出候分ハ實地ニオキテ惣步數ヲ改檢地帳ニ照合シ引分ケ方偏願無之様篤ト檢査之上願之越聞届相渡可申事。

第六

一、右地券者地所持主タル確證ニ付大切ニ可致所持旨兼而相諭置可申候萬一水火盜難ニ而地券チ失ヒ候節者二人以上之證人ヲ立村役人連印ヲ以書替之儀爲願出可申事。

但盜難等ニ而失ヒ候分後日相知レ候ハ、早速可差出旨請書取置可申事。

第七

一、初度地券相渡候以後賣買讓渡シ並ニ代替リ其外質地流込等ニ而持主相替リ候節ハ地券之裏
ニ雛形之通り相認地券書替之儀爲願出可申事。

第八

一、右書替願出候節者其情實ヲ吟味シテ後地券ヲ渡シ舊券ヲ取消スヘシ尤大帳ニモ地主相替リ
候趣並地代金増減之有無年月日共詳記シ置一箇年分取纏メ大藏省ニ可届出事。

第九

一、山林原野其他之地所共賣買讓渡ニ付地券相渡候分總而同様可相心得事。

第十

一、願ニヨリ荒蕪之地所拂下ケ候節者同様地券可相渡事。

第十一

一、新規書替共地券申受候節證印稅トシテ左之通り上納可爲致事。

證印稅

地券ニ記セシ

金高

同同
同同
同同

百圓以下
百圓以上
貳百圓迄
五百圓以上
五百圓迄
千圓以上
千圓迄

千分ノ五
即十圓ニ付五錢
五十錢
一圓
一圓二十五錢

地所賣買讓渡ニ付地券渡方規則

同同	千圓以上	一圓五十錢
同同	貳千圓迄	二圓五十錢
同同	貳千圓以上	三圓七十五錢
同同	五千圓迄	
同同	五千圓以上	

第十三

一、爾後地券ヲ不申請密賣買致シ候者ハ其地所並代金共取揚可申事。
致連印候村役人者地代金之三分之通罰金可申付事。

第十三

一、從來之持地者追而地券渡シ方之儀可相達事。

第十四

一、東京府下ヲ始沽券稅法御達之土地ハ此規則之例ニアラサル事。
右之通定候事。

奉願候畑地賣買之事

某國何郡何村之内

何番
字何々

一畑何段何畝何步

此高何石何斗何升何合

此地代金何拾何兩也

持主	何同郡何同村	之	誰
買請人	何同郡何同村	之	誰

但是迄之質入證文添

右地所今般相對之上賣渡且買請可申積相談相整候間賣買之儀御聞濟地券御渡シ被下置度依之村
役人奥印ヲ以此段奉願候以上

地所賣買讓渡ニ付地券渡方規則

年號干支月

賣渡人右

何

之

誰印

買請人右

何

之

誰印

前書願之趣双方相糺候處情實相違無御座候依之私共連印ヲ以此段申上候以上

年號干支月

某國何郡何村組頭

何

之

誰印

同 名主

何

之

誰印

何府縣廳

年號干支月

地券之證

某國某郡某村之内

何番

一田何町何反何畝何步

某郡某村

持主

何

之

誰

押 切 印

此高何拾何石何斗何升何合
此地代金何百何拾何兩也

同

人

押 切 印

一畑何町何反何畝何步

此高何拾何石何斗何升何合

此代金何百何拾何兩也

右檢查之上授與之

何府知事
何縣令 苗字名

大少屬 苗字名 受付

林並原野ノ類モ此雛形ニ準スヘシ。

年號干支月

地券之證

某國某郡某村之内

字何々 險阻 平地

地所賣買讓渡ニ付地券渡方規則

某郡某村

押 一 山反別何拾何町何畝步
 切 立木有無
 印 此地代金何拾何兩也

持主 何 之 誰

右檢查之上授與之

何^{府知事}苗字名

大少屬 苗字名 受付

一、地券願請候以後再ヒ他之者エ賣渡候歟或者親族エ讓渡候節者地券之裏エ左之案文ノ如ク相認爲願出可申事。

讓渡證印願裏書雛形

表書之地所今度某國何郡何村何之誰エ地代金何拾何兩ヲ以賣渡申度奉存候御聞濟之上者同人名前之御證券ト御引換被成下度依之村役人連印ヲ以此段奉願候以上。

賣渡人	何	之	誰印
買請人	何	之	誰印
名主	何	之	誰印
組頭	何	之	誰印

親族エ讓渡候節證印願書雛形

表書之地所今度親族^{兄弟其他續柄ヲ}何郡何村何之誰エ相讓申度奉存候御聞濟之上者同人名前之御證券ト御引換被成下度依之^{親類或者組合歟}證人相立村役人連印ヲ以此段奉願候以上。

讓渡人	何	之	誰印
讓受人	何	之	誰印
證人	何々	之	誰印

同	同	同
何	何	何
之	之	之
誰印	誰印	誰印
組頭	名主	何
何	何	何
之	之	之

壬申九月第二百二十六號地券渡方規則相達置候處更ニ詮議之廉有之規則中第十五條ヨリ十七條迄ハ追而太政官ヨリ御達可相成筈ニ付右三ヶ條相省キ壬申第三百三十二號同七月第九十四條布達之條々十五ヨリ十七條迄ヘ差加猶規則紙之通更正達候事。

壬申十月

大藏大輔 井 上 馨

地券渡方規則

第十五條即チ壬申九月第三百三十二號布達
增補改正之條

一、一筆之地所ヲ裂キ賣買イタシ候儀願ニヨリ差許候ニ付而ハ舊地主ヘ殘置候分並裂地ニ致候分トモ地所之番號ハ在來之儘据置幾廉ニ分裂候共何番之内誰持地與記シ可申券狀番號之儀ハ地所之番號ニ不拘券狀渡シ順番ニ可致事。

第十六條即チ壬申七月第九十四號布達
增補之二

一、田畑トモ幾筆モ合筆イタシ券狀一通ニ相記シ候儀願ヒニヨリ可差許右様之分ハ一筆限リ別冊ニ致シ一人別ニ爲差出地券證ハ其人毎ニ總反別相記シ一筆限帳別冊有之段腹書ニ相顯一筆限帳別冊與券狀與割印ヲ押シ地券之番號ノミ相記シ地所ノ番號ハ總而別冊之肩書ニ一々相記可相渡事。

但一筆限帳控一通リ爲差出於其應一村限リ取纏置可申事。

第十七條 即チ同上增補之三

地券渡方規則

一、證印稅儀拾圓以下之分ハ都而五錢可取立事。

第十八條

一、屋敷地之外切之切歩之儀ハ百坪以下ハ難相成事但是迄一筆限リ右以下之坪數ヲ所持有之分ハ此限ニ非ス。

第十九條

一、地券合筆一紙ヲ以テ渡方相願候モノハ別冊一筆限之代金へ賣買規則第十一則之割合ヲ以テ證印稅取立可申事。

第二十條

一、總而人民所持之地所後來御用之節ハ地券ニ記セル代價ヲ以テ御買上可相成事。但家作等有之地所上地之儀ハ必ス持主承諾之上タルヘシ尤世上一般利益之爲ニ御用相成候節ハ券面通り之代金及ヒ其建物等ニ應シ相當之手當差遣シ上地可申付事。

第二十一條

一、從前切添切開並高地へ試作致シ候歟或ハ除地見捨地等へ家屋取立候歟林藪之類開發イタシ候種類其他隱田タリトモ此度限リ一切差許候間有體可書出旨可申渡事。

第二十二條

一、地券相渡シ候後ニ於テ隱田等有之候節ハ此規則第十二條密賣買之例ヲ以テ所置可致事。

但隱田ハ賣買之代金無之候ニ付地所ノミ取上可申其地所者入札拂取計右代價之三分通り村役人ヨリ可取立事。

第二十三條

一、從前切畝歩致シ檢地帳名寄帳小拾帳等ニ突合サザルトモ現地之景況ニ隨ヒ總而地引繪圖差可出旨說示可致事。

第二十四條

一、段別等持主申立ヲ以テ檢地帳へ引合セ相違無之分ハ据置之積相心得檢地竿入等取計不及候得共地所境界紛雜取調差支候向ハ一筆限リ畝杭ヲ打引繪圖爲出落地無之様實地檢查可致事。

但餘歩有之地所檢地帳ニ比較増歩相成候分ハ人民申立之通据置右ニ相反シ檢地帳ヨリ減歩相成候地所竿入檢查之上減歩可致事。

第二十五條

一、從前高内外ニ不拘社寺鄉藏之類或ハ埋葬地等地主定リ無之分ハ地引繪圖中ニ其譯可記置事。

第二十六條

一、村持之小物成場山林之類ハ地引圖中色分致シ申事。

第二十七條

一、堤外附寄洲又ハ流作場等不定地之類大繩場ニ相成居主有之候ハ、格別確定之持主無之地所ハ入札拂ニ致シ持主相定免可申若シ持主ニ難相定分ハ拜借地之積可相心得候事。

第二十八條

一、從前高内外ニ不拘郷藏敷村圍穀積藏敷之類人民ニ關係之分ハ地券ヲ定メ一村總持與可致事。

第二十九條

一、堰料堤敷道敷川床敷等之類潰地高内永引之分ハ自今無稅地ニ相定メ可申事。

第三十條

一、墓所地ハ從前之通無稅地與可致事。

第三十一條

一、本田畑ト雖モ村民退轉イタシ持主無之荒地ハ其段別ヲ點檢致シ入札拂之積相心得管内普ク布告可致事。

第三十二條

一、持主有之荒地ハ反別坪數等綿密ニ遂檢査起返之手數勘辨之上至當之年期ヲ定メ代價ヲ記セサル券狀ヲ其持主ニ相渡年期中無稅與可相定事。

但荒地券狀證印稅ハ反別之多少ニ拘ラス一筆之地所ヨリ五錢之印稅ヲ收入スヘシ。

第三十三條

一、持主無之荒地並持主有之荒地共一郡限反別仕譯繪圖面相添可届出事。

第三十四條

一、村持之山林郊原其地價難定土地ハ字反別ノミ記セル券狀へ從前之貢額ヲ記シ肩ニ何村公有地與記シ其村方へ可相渡置事。

但池沼之種類モ同斷之事。

第三十五條

一、兩村以上數村入合之山野ハ其村々ヲ組合與シ前同様之仕方ヲ以テ何村何村之公有地與認メ券狀可渡置尤其券狀ハ組合村方年番持等適宜ニ可相定事。

第三十六條

一、總而上林原野之類段別難相分ハ先以テ無反別ニ致シ漸次點檢之積可相心得事。

第三千七條

一、總而右種類ハ地界ヲ券狀ニ記載ス可シ譬ヘハ東耕地西字何山南某川北某村字何原與如斯詳カニ記注ス可キ事。

第三十八條

一、從前無稅地ニ住民有之候得共地位下等ニシテ他ヨリ望人ナキヲ以テ地價ノ目的難相立節ハ一反步則三百步之地なりニ付十圓以上之地價ニ定ム可キ事。

第三十九條

一、地所引合相濟候ハ、落地無之旨地主一同調印之上戸長以下之誓文請書可申付事。

第四十條

一、右種類地有稅無稅之區界ヲ仕譯村限り地券臺帳之末ニ記載可致事。

右之通相達候事

府

縣

地所賣買讓渡ニ付地券渡方規則中第一條第二條右之通改正

第一條

一、地券相渡候節地券者最前之雛形通りニ製シ地主ヘ相渡地券大帳ハ二ツ折帳ニ仕立半枚ニ一筆宛記載シ券狀與割印可致置事。

但腹書多分有之分者見計タル可キ事。

第二條

一、地券大帳者年々收稅之照準ニイタシ地券渡濟上一村限地所之段別地券金高トモ總合高取調租稅察ヘ可差出事。

但總會高取調方別表式之通可相心得尤モ表式ハ追而可相達事。

右之通及更正候段相達候也

壬申九月

大藏省

地券渡方規則

五八一

内國租稅改正見込正院へ上申

大藏大輔 井上馨
大藏少輔 吉田清成

夫皇國ノ税法ニ於ケル、往古ハ兵農不分賦稅無別。中古ニ至リ政權武門ニ移リ封建ノ制行レシヨリ、兵農全ク分レ比隣法ヲ異ニシ、農民特リ其重歛ニ苦シム事久シ。今ヤ皇威煥發郡縣ノ體裁ニ歸シ、百政齊一之際經國ノ樞機理財會計之基本タル税法ヲ更張セザルベカラズ。抑租稅ハ人民保護ノ要務タレバ之ヲ出サシムルヤ上下均一貧富公平ヲ旨トス。而シテ税法ヲ施設スルニ當ツテヤ、特リ地ヲ耕ヤシカヲ勞スル者ニ課スニ非ズシテ物品ヲ費ス者ヨリ出サシメ、有用品ニ薄クシ、無用品ニ重クスルヲ以テ普通ノ公理トス。然リト雖モ從來田租ヲ主トシ、五公五民坪取之法ノ如キ今俄ニ之ヲ廢セントセバ、因襲ノ久シキ既ニ人心ニ團結シ、一時ニ釐革シ難シ。故ニ先ヅ地所賣買ノ禁ヲ解キ、地券ヲ改メ、而テ沽券ノ税法ヲ施設シ、或ハ物品稅印稅等ヲ起シ、其實舉ルニ從テ一般土地ノ稅ヲ薄クシ、以テ生産ノ増殖ヲ勸メ、或ハ專賣特許ノ稅ヲ設以テ人ノ智識ヲ開キ、百工ヲ獎勵シ以テ人工品ノ増殖ヲ誘導スル時ハ、内地ノ物品繁殖シ

テ國用以テ豊足スベシ。加之全國ノ地宜ニ應ズル物産ヲ育シ、邦俗ニ適スル工藝ヲ闢キ、其稅ヲ權衡シ、海外ニ輸出シ、然シテ我國不足ノ物品ト交易シ、海關保護稅ノ活用ヲ以テ内地ノ物品輸出ノ利害ヲ去就シ、海外ヨリ輸入ノ物品ヲ計較シ、其得失ニ從テ之ガ稅額ヲ輕重シ、常ニ輸出ノ物品ヲシテ輸入ノ物品ヨリ倍蓰セシムルコトニ注意シ、以テ之ガ稅法ヲ設クル時ハ、海外ニ對シテ許多ノ利益ヲ得ベシ。最モ内地ニ於テハ稅法之平準ヲ極メ、農民貢租ノ偏重ハ漸次消去シ至當公平ヲ得ルニ至レリ。始メテ下モニ偏重偏重ノ弊害ナク、上ニハ年々逐テ歲入ノ利ヲ増シ實ニ稅法ノ要機ニシテ今日ノ急務ナリ聊微衷ヲ記シテ謹テ公評ヲ乞フ。

辛未十月

三府下地券發行之儀正院伺

大藏卿 大久保利通

大藏大輔 井上馨

租稅收納之法制都鄙市村共公平適當ヲ得候様改正仕度、方今專ラ詮議中ニ有之候得共、不容
 易重事ニ候間、篤與熟議之上變制ノ義追々可申上候處、差向三府下地租之儀者從來地子免除之
 仕來ヲ以更ニ收稅等無之、去迎政府保護之道ニ於テハ都鄙一樣之儀ニ而都會之地ニ至リテハ殊
 ニ理事數端從而政府之費用モ不少義之處、偏ニ農稅而已ヲ收課シ、市井ノ地租者措テ不收者如
 何ニモ不公平之儀ニ有之候間、追々一般之法制相立度先以東京府下之地券ヲ發行イタシ、年々
 地租取立政府保護之費用ニ充候様仕度右東京府下之地租收法施行イタシ候上ハ、其制規ヲ以實
 際ニ對シ取捨致シ、二都開港場其他從來地子免除之市場ニ及シ、海内租法適當ヲ得候様仕度、
 而仍規則取調差上申候右御許可之上ハ別紙達案之適當省ヨリ同府へ可相達與存候。仍而規則相
 添此段相伺申候也。

辛未十月七日

東京府

其府下從前武家地町之稱有之候處自今相廢シ一般地券發行地租收入之儀被仰候ニ付別紙規則

書ニ照準取計可申事。

壬申正月

大藏省

地券發行地租收納規則

第一

自今地券ヲ發行スルガ爲ニ所轄廳ニ於テ別ニ記録局ヲ設ケ相當之官員ヲ備ヘ置地券ニ係ル事務一切ヲ司ラシムヘシ。

第二

東京中各大區ヲ以テ分界シ其大區之一小區毎之地界ヲ正シ精密ナル地圖ヲ製シ每分區々番號ヲ附置可申事。

第三

武家地之儀者從來之賜邸並ニ諸縣之上地開墾地等入交リ境界坪數判然セサルニ付先上地之坪數ヲ點檢シ入札拂イタシ落札之金高ヲ以テ地券ヲ定新規之持主ヘ可相渡事。

第四

賜邸之分ハ更ニ地代金ヲ取立スト雖モ其坪數ヲ改メ其近傍拂地等ニ比較シ地券高取極メ從來

之持主ニ可相渡事。

第五

從來貸附地之分ハ其坪數ヲ點檢シ是迄ノ拜借人ニ低價ヲ以テ可拂下等ニ付地位ヲ上中下之三等ニ分テ左之低價標準ヲ以テ拂下代金高取極メ上納可爲致事。

低價標準

一、上等 千坪ニ付 金貳拾五圓

一、中等 同斷ニ付 金貳拾圓

一、下等 同斷ニ付 金拾五圓

一、拜借地ハ低價ヲ以テ拂下ゲ遣ハスト雖モ比隣ノ地券金高ト格別相違アル時ハ以後税金等ノ割合ニ不公平ヲ相生シ可申候間實地拂直段ニ拘ハラヌ比較シ的當之地券金相定メ下ケ渡スヘキ事。

第六

總テ拂下ケ地代金ハ地券相渡節一時上納可爲致事。

第七

華士族卒賜邸並ニ現住之拜借地ノ外更ニ他之地處ヲ御拂下ケ願フ者ハ總テ公之入札法ヲ用ユ